東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

－ 平成25年度 －

２０１４．３

東大阪市教育委員会

はしがき

東大阪市は、大阪府の東部、奈良県に隣接し、生駒山の懐に抱かれ、自然に恵まれた50万都市です。

生駒山地のふもとには、先人の残した貴重な文化遺産、遺跡が数多く眠っています。本市ではこれら遺跡・埋蔵文化財を保護、顕彰する立場から昭和47年に文化財課と郷土博物館を設置、開館しました。考古資料を展示する登録博物館としては大阪市に次ぎ、府下の衛星都市としては初めてであり、府下市町村の博物館施設の先駆けとなりました。平成14年11月には市立埋蔵文化財センターがオープンし児童や生徒、多くの市民に広く利用され、文化財の活用と普及に努めてまいりました。

本書では、平25年度国庫補助事業による発掘調査の成果を報告します。今回の報告では、皿池遺跡、横沼遺跡、若江遺跡、岩田遺跡、山畑古墳群、岩滝山遺跡、薬師寺跡、馬場川遺跡の調査・整理概要を掲載しています。いずれも遺存状態の良好な遺構・遺物に恵まれ、既往の調査成果に新たな知見を加えることができました。限られた調査範囲ではありますが、各々の地域史の解明に大きく寄与できたものといえます。

これらは次世代に引き継ぐべき貴重な考古資料であり、本書が埋蔵文化財保護の報告書としてだけでなく、文化財の普及啓発冊子として市民の方々に広く読まれることを期待します。

最後になりましたが、調査の実施や報告書の刊行にあたり、個人・関係諸機関から多大なご協力を賜りましたことに深く感謝し、今後とも文化財保護にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成26年３月

東大阪市教育委員会

目　　次

はしがき
目次・例言
第１章 平成25年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要 …… 1
第２章 皿池遺跡第10・11次発掘調査 …… 5
第３章 横沼遺跡第１次発掘調査 ……29
第４章 若江遺跡第87（遺構編）・88次発掘調査 ……37
第５章 岩田遺跡第３次発掘調査 ……75
第６章 山畑古墳群第34次発掘調査 ……81
第７章 岩滝山遺跡第11次発掘調査（平成24年度高塚古墳調査） ……87
第８章 薬師寺跡第１次発掘調査……101
第９章 馬場川遺跡第21・22次発掘調査……109

例　　言

1　本書は、国庫補助50％・市負担50％（総額12,000,000円）で実施した、個人及び零細事業主施行による開発工事に伴う発掘調査ほかの概要報告書である。

2　本発掘調査は、調査原因に係る個人および法人の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。

3　現地の土色および土器の色調は農林水産省農林水産技術事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』に準拠し、記号表示も同書に従った。

4　現地で出土した遺物の整理については、株式会社地域文化財研究所・株式会社文化財サービス大阪支店に委託のうえ、実施した。

5　本書の編集は、仲林篤史・奈良拓弥が行った。

6　考古学用語については、佐原真・田中琢2002『日本考古学事典』三省堂の表記に従った。

7　調査では、遺構名称に略号を使用したものがある。略号は以下のとおりである。

SP	ピット・柱穴	SD	溝・濠・溝状遺構
SK	土坑	SE	井戸
SX	その他遺構		

8　現地調査の実施及び報告書作成にあたり、ご協力いただいた地権者の方々や関係諸機関に対し厚くお礼申し上げます。

9　各章に共通して遺物は、下記の文献を参照した。
古代の土器研究会編1992『古代の土器１―都城の土器集成―』
古代の土器研究会1996『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東４　煮炊具―』
財団法人古代学協会・古代学研究所編1994『平安京提要』角川書店
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
中世土器研究会編1995『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社
寺沢薫・森岡秀人編1989『弥生土器の様式と編年　近畿編Ⅰ』木耳社
埴輪検討会2003『埴輪論叢』第４・５号
米田敏幸1991「土師器の編年１、近畿」『古墳時代の研究』６　雄山閣

第１章　平成25年度埋蔵文化財発掘調査・確認調査の概要

平成25年度の文化財保護法第93条及び第94条に基づく埋蔵文化財包蔵地での届出（通知）件数は、平成26年２月28日現在で届出378件、通知29件で合計407件である。届出（通知）にかかる工事内容の内訳は次のとおりとなる（０件の工事名は省く）。

個人住宅　105件　　分譲住宅　153件　　共同住宅　16件　　兼用住宅　１件　　店舗　６件
その他住宅　１件　その他建物　31件　　道路　１件　　学校　10件　　宅地造成　10件
公園造成　１件　ガス　27件　　電気　６件　　水道　16件　　下水道　21件　　通信　１件
その他の開発　１件

407件の届出（通知）の指導内容は、発掘調査68件、工事立会86件、慎重工事253件であった。

平成21年度では届出（通知）が441件、平成22年度が445件、平成23年度が470件、平成24年度が408件であったことから、平成20年度以降の増加を続けていた工事件数が減少に転じたことがうかがわれる。

東大阪市教育委員会では、次ページ一覧表のとおり、個人又は零細事業主による個人住宅又は共同住宅等の建築に伴う確認調査及び発掘調査を平成25年度国庫補助事業として実施した。

その内訳は、個人住宅建設に伴う確認調査が18件（うち発掘調査３件）、個人事業主よる共同住宅等の建設に伴う確認調査が10件（うち発掘調査２件）、零細事業主による共同住宅等の建設に伴う確認調査が４件（うち発掘調査１件）で、合計32件である（平成26年２月28日現在）。昨年度が34件であったため、件数は減少している。平成25年度の国庫補助事業では、個人専用住宅建設に伴って実施する確認調査の件数が、個人事業主による共同住宅等の建築工事に伴う確認調査の件数を上回った。

確認調査が必要となる工事の例としては、基礎工事に地盤改良工事又は柱状改良工事等を伴うものが挙げられる。それらの工事によって埋蔵文化財への影響が考えられることから、国庫補助事業として事前の確認調査を行い、埋蔵文化財保護行政等に必要なデータを得ているところである。特に今年度は、従来あまり調査事例が多くなかった遺跡で遺構・遺物の発見が相次いだ。

最後に、次年度の報告となる調査事例を簡単に報告しておく。

まず、No.21の若江遺跡第89次発掘調査では、確認調査により瓦器・土師器等の遺物包含層と中世の溝を検出したため、発掘調査を実施した。調査では中世の溝のほか、近世の礎石立ち建物や中世の耕作痕跡を検出した。若江遺跡では南端にあたる調査区であり、中近世の土地変遷を考える重要な成果であった。No.25の弥刀遺跡第10次発掘調査では、確認調査により瓦器・土師器の遺物包含層と中世の溝を検出したため、引き続き発掘調査を実施した。中世の溝と段差を検出したのみであるが、中世の土地利用を考える上で重要な成果を得ることができた。No.26の若江遺跡第90次発掘調査でも、溝を検出し、付近の調査記録より若江城の堀跡であることを確認した。

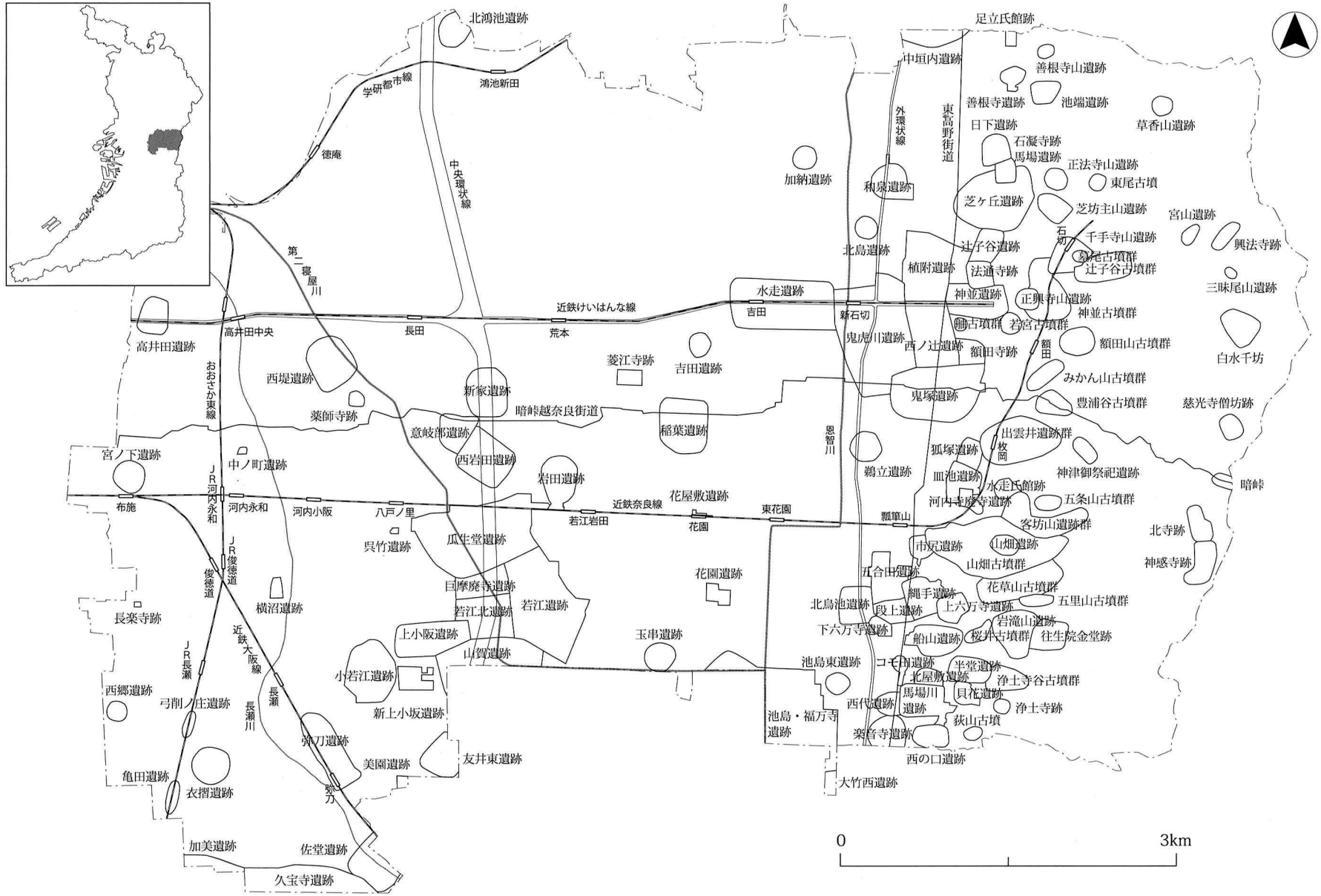
平成24年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況（補遺）

	調査事業名（用途）	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
34	弥刀遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市友井三丁目388番16	仲林	平成25年3月19日	4.5㎡	GL-1.6mまで確認。瓦器・土師器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。

平成25年度国庫補助緊急発掘調査事業実施状況

	調査事業名（用途）	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
1	貝花遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市横小路町二丁目517番10、517番11	奈良	平成25年4月5日	8㎡	GL-2.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
2	横沼遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市横沼町三丁目49番1、49番8	奈良	平成25年4月18日	4㎡	GL-2.1mまで確認。瓦器・須恵器が微量出土。工事実施。
3	西堤遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市西堤本通東三丁目5番2	奈良	平成25年5月2日	4㎡	GL-2.4mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
4	弥刀遺跡確認調査（個人住宅建設）	源氏ケ丘62番4	奈良	平成25年5月8日	4㎡	GL-1.7mまで確認。土師器・須恵器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
5	横沼遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市横沼町三丁目1番32	奈良	平成25年5月15日	8㎡	GL-2.3mまで確認。須恵器が微量出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
6	薬師寺跡第1次発掘調査（個人住宅建設）	東大阪市御厨一丁目1132番1	奈良	平成25年5月22日～平成25年5月23日	9㎡	本書第8章。
7	佐堂遺跡確認調査（個人施工による診療所建設）	東大阪市金岡四丁目12番24	奈良	平成25年5月31日	4㎡	GL-2.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
8	山畑古墳群確認調査（個人施工による共同住宅建設）	東大阪市四条町321番1、312番5、313番1、313番2	奈良	平成25年6月11日	47㎡	GL-0.8mまで確認。土師器・須恵器が微量出土。溝・土坑・ピットを検出。届出の基礎設計では埋蔵文化財に影響せず。工事実施。
9	上六万寺遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市南四条町1007番1の一部	仲林	平成25年7月3日	2㎡	GL-1.1mまで確認。陶磁器が出土。近世以降であることを確認。工事実施。
10	宮ノ下遺跡確認調査（個人施工による共同住宅建設）	東大阪市長堂一丁目67番19	仲林	平成25年7月8日	8㎡	GL-1.2mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
11	稲葉遺跡確認調査（個人施工による長屋住宅建設）	東大阪市稲葉二丁目187番2、188番、189番の各一部	奈良	平成25年7月16日	8㎡	GL-2.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
12	辻子谷遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市中石切町一丁目646番1	奈良	平成25年8月8日	2㎡	GL-1.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
13	馬場川遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市横小路町三丁目727番3	奈良	平成25年8月12日・平成25年8月24日	4㎡	GL-2.1mまで確認。縄文土器が出土。二次堆積によるものと確認。立会調査を実施。工事実施。
14	岩田遺跡確認調査（個人住宅建設）	東大阪市岩田町五丁目644番4の一部	仲林	平成25年9月5日	4㎡	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
15	馬場川遺跡第21次発掘調査（個人住宅建設）	東大阪市横小路町三丁目1173番、1174番の各一部	奈良	平成25年9月6日～平成25年9月10日	18㎡	本書第9章。

	調査事業名 (用途)	実施場所	担当	調査期間	調査面積	調査結果
16	鬼塚遺跡第30次発掘調査 (零細事業主による高齢者向け住宅建設)	東大阪市南荘町1796番1の一部	仲林・奈良	平成25年9月18日・平成25年10月4日～平成25年10月11日	30㎡	GL-1.3mまで確認。瓦器・土師器・須恵器を含む遺物包含層を検出。発掘調査実施。来年度報告予定。
17	瓜生堂遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市西岩田一丁目8番2	奈良	平成25年10月3日	6㎡	GL-2.6mまで確認。瓦器・土師器が微量出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
18	弥刀遺跡確認調査 (零細事業主による共同住宅建設)	東大阪市友井一丁目22番4	奈良	平成25年10月17日	8㎡	GL-2.0mまで確認。土師器・須恵器・黒色土器が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
19	若宮古墳群確認調査 (零細事業主による分譲住宅建設)	東大阪市額田町1131番14、1131番15	奈良	平成25年11月1日	3㎡	GL-0.7mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
20	西ノ辻遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市東山町1072番1	奈良	平成25年11月5日	9㎡	GL-1.8mまで確認。土師器・須恵器が微量出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
21	鬼虎川遺跡確認調査 (零細事業主による介護老人福祉施設建設)	東大阪市水走三丁目3番6、3番14、3番16	菅原	平成25年11月8日	27㎡	GL-2.5mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
22	船山遺跡確認調査 (個人施工による宅地造成)	東大阪市六万寺町三丁目637番の一部	奈良	平成25年11月22日	6㎡	GL-1.6mまで確認。土師器・須恵器・瓦器が出土。二次堆積よるものと確認。工事実施。
23	若江遺跡第89次発掘調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市若江南町二丁目482番4	仲林・奈良	平成25年11月25日・平成25年12月5日～平成25年12月19日	48㎡	GL-2.0mまで確認。瓦、土師器、瓦質土器等の遺物包含層及び中世の溝を検出。発掘調査実施。来年度報告予定。
24	鬼塚遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市新町445番1、445番4	仲林	平成25年11月26日	1㎡	GL-1.0mまで確認。埋蔵文化財検出せず。工事実施。
25	弥刀遺跡第10次発掘調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市友井三丁目340番13の一部	奈良	平成25年12月3日～平成25年12月4日	22㎡	GL-2.0mまで確認。瓦器・土師器の遺物包含層及び中世の溝を検出。発掘調査実施。来年度報告予定。
26	若江遺跡第90次発掘調査 (個人住宅建設)	東大阪市若江本町四丁目956番1、956番6、957番1、957番2	仲林	平成25年12月6日～平成25年12月9日	7㎡	GL-1.8mまで確認。瓦、土師器等の遺物包含層及び中世の溝を検出。発掘調査実施。来年度報告予定。
27	植附遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市中石切町三丁目2638番11の一部	仲林	平成25年12月16日	4㎡	GL-1.6mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
28	意岐部遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市御厨東町二丁目689番1	奈良	平成25年12月24日	5㎡	GL-2.3mまで確認。土師器・須恵器が微量出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
29	宮ノ下遺跡確認調査 (個人施工による共同住宅建設)	東大阪市長堂一丁目69番41、69番42	奈良	平成26年1月7日	8㎡	GL-3.0mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
30	山畑古墳群確認調査 (個人施工による長屋住宅建設)	東大阪市四条町488番1、488番2の各一部	奈良	平成26年1月10日	9㎡	GL-1.8mまで確認。瓦器・土師器・埴輪が出土。二次堆積によるものと確認。工事実施。
31	水走遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市水走二丁目1129番1の一部	奈良	平成26年1月16日	4㎡	GL-2.3mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。
32	稲葉遺跡確認調査 (個人住宅建設)	東大阪市稲葉二丁目23番10	奈良	平成26年2月5日	4㎡	GL-2.2mまで確認。埋蔵文化財出土せず。工事実施。



第１図　東大阪市内の遺跡分布図

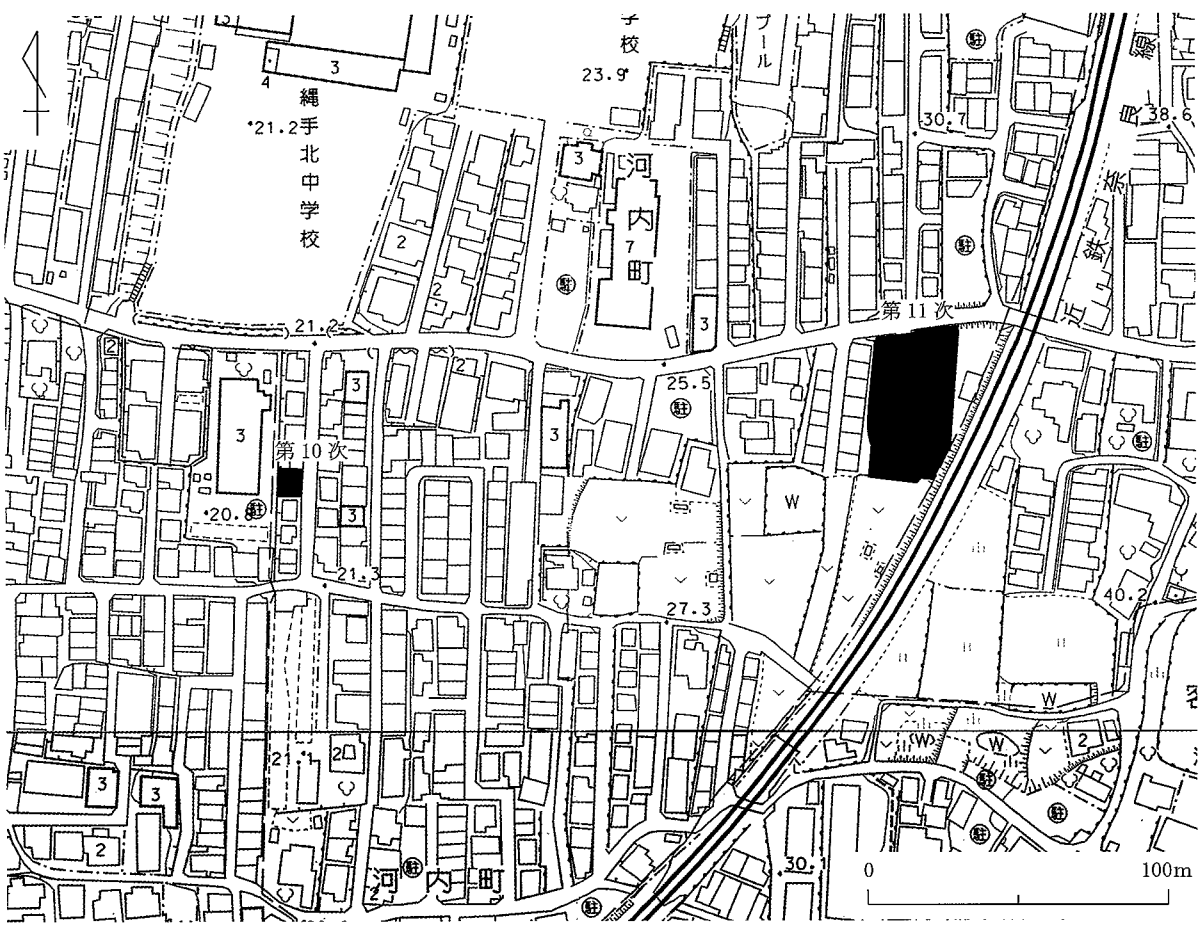
第２章　皿池遺跡第10・11次発掘調査

1）はじめに

皿池遺跡は、東大阪市河内町、喜里川町及び本町に広がる弥生時代から鎌倉時代にかけての集落跡・官衙跡である。遺跡は、東西約 300m、南北約 400m に広がり、客坊谷を流れる河川によって形成される扇状地上の標高 15m～30m の範囲に位置する。

遺跡は、北に孤塚遺跡（古墳時代～中世）、南に河内寺跡（飛鳥時代～中世、国史跡河内寺廃寺跡を範囲に含む周知の埋蔵文化財包蔵地の名称）と接する。河内寺廃寺跡は、飛鳥時代後期に創建された四天王寺式伽藍配置をとる古代寺院跡ある。現在は、伽藍のうち塔、金堂及び東面回廊の一部が国の史跡に指定されている。後述のように、河内国河内郡の郡衙であったと推定される皿池遺跡に近接することから、河内郡大領であった河内直（連）によって創建され、郡衙に伴う寺院として発展してきたと考えられる。

皿池遺跡は、現在の縄手北中学校の場所にあった五条皿池より弥生時代後期の土器や遺構が発見され、知られるようになった遺跡である。また一方で、遺跡が河内国河内郡の大宅郷に位置することから、公館や官衙の存在がかつてより推定されてきた。昭和 51 年の縄手東小学校建設工事に伴う第３次調査では、奈良～平安時代の掘立柱建物跡が検出された。その後の調査では、古墳時代中期後半の皿池古墳やそれに伴う船形埴輪等が出土した。また、平成 17 年の第７次発掘調査では、古墳時代の総柱建物が、平成 18 年の第８次発掘調査では渤海三彩の可能性がある三彩陶が出土した。これらの調査成果により、河内郡衙跡の様相が少しずつ解明されてきたところである。

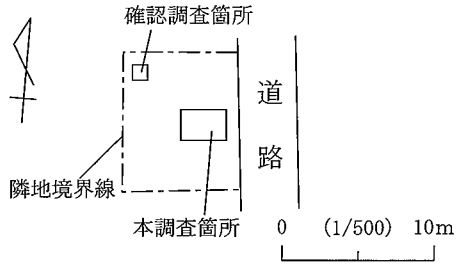


第１図　調査位置図

第10次調査

2）調査の経過

平成24年10月、東大阪市河内町において、零細事業主による分譲住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第1図）。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成24年11月1日に確認調査を実施した。確認調査の結果、確認調査トレンチ第1層（GL-0.4～1.6m）より奈良時代～中世の瓦、土器片を含む遺物包含層を検出した。この結果に基づき協議代理者と取扱いについて協議を行い、平成24年11月2日～11月6日に調査トレンチを設定して調査を行った。調査面積は、確認調査とトレンチと合わせて6.7㎡となった（第2図）。



第2図　調査トレンチ位置図

3）調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、確認調査トレンチ及び調査トレンチの位置は第2図のとおりであり、各トレンチ間の距離は約3mである。

確認調査トレンチ

第0層（GL- 0m～0.4m）盛土層。

第1層（GL-0.4m～1.6m）オリーブ黒色（5Y2/2）中礫～細砂混じりシルト質粘土。

調査トレンチ（第3図）

第1層　盛土

第2層　黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルト。

第3層　黒褐色（2.5Y3/1）砂混じり　粘土質シルト。

第4層　黒色（2.5Y2/1）砂礫混じりシルト。

第5a層　黒褐色（10YR3/1）砂混じり粘土質シルト。
炭化物、土器・瓦含む。

第5b層　オリーブ黒（5Y2/2）砂混じりシルト質粘土。
5b層より砂を多く含む。

第5c層　オリーブ黒（5Y2/2）砂混じりシルト質粘土。
炭化物、土器・瓦含む。

第6層　オリーブ黒（5Y3/1）砂混じり粘土。
土器、炭化物含む。

第7層　暗灰色（N3/1）砂質粘土。炭層。

第8層　黒褐色（2.5Y3/1）砂混じりシルト質粘土。土器含む。

第9層　黒褐色（2.5Y3/1）砂混じりシルト質粘土。8層よりも砂は少ない。土器含む。

第10層　黒色（N2/1）砂質粘土。土器含む。

第11層　黒色（7.5Y2/1）細砂混じり粘土。土器含む。

第12層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）砂質シルト。土器含む。

第13層　黒色（7.5Y2/1）砂質シルト。土器含む。

第14層　黒色（N2/0）砂混じり粘土。水分多い。土器含む。

調査トレンチの堆積状況を概観していく。まず、盛土層～第３層は近世以降の盛土層である。第４～６層までが、大量の土器、瓦を含む遺物包含層である。土器、瓦を大量に含む第５層は、３層に分層できた。上部を第5a層と下部を第5c層とした。第5a層は、第5c層に比べ遺物の出土量が多い層である。第5a層と第5c層の間に堆積する第5c層と同色で、より多く砂を含む層を第5b層とした。第5b層はトレンチ南西隅で検出した巨礫を覆う形で堆積していたことが確認できたが、後述のとおり遺構に伴うものではない。

第６層は、第5c層下に堆積する粘土層であるが、出土遺物より第５層と同時期の堆積と考えられる。

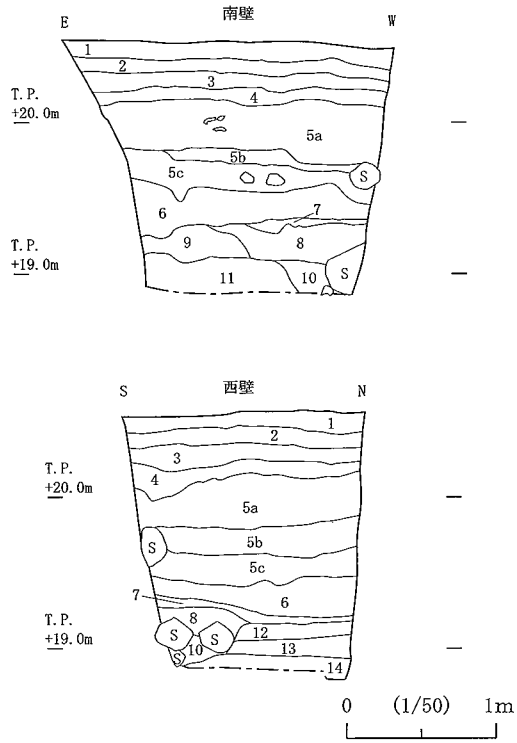
第６層下に堆積する第７層は炭層で、調査トレンチのほぼ一面に広がる。第７層下の第８層及び第９層は黒褐色のシルト質粘土層である。

南壁では、第８・９層の下に第10層とその第10層に切り込まれる形の第11層を検出した。

西壁では、第８層及び第10層に切り込まれる形の第12～14層を検出した。

次に、各層の性格について検討する。

第４層から第６層は、大量の遺物や巨礫を含み、0.8～１ｍの厚さをもつ層で、調査の便宜上、上層とした。第５層には人頭大の礫やそれを覆う第5b層など、何らかの遺構の存在を想像させる堆積状況が確認できた。しかしながら、平面・断面観察でも遺構は検出できなかった。むしろ上層である第４～６層は、一様に大量の遺物や礫を含む堆積状況であったことから、これらの層は、一時期に行われた大規模な盛土層であると考えた。第４層は、盛土による整地が行われた時期の地表面と考えられる。同層内より出土したいわゆる「て」の字状口縁をもつ土師器皿より、盛土が行われた時期は、平安時代中期頃と考えられる。第７～14層までを下層とした。



1．盛土
2．黒褐色（2.5Y3/2）粘土質シルト
3．黒褐色（2.5Y3/1）砂混じり粘土質シルト
4．黒色（2.5Y2/1）砂礫混じりシルト
5a．黒褐色（10YR3/1）砂混じり粘土質シルト
炭化物含む　土器・瓦多く含む
5b．オリーブ黒色（5Y2/2）砂混じりシルト質粘土
5cより砂多い
5c．オリーブ黒色（5Y2/2）砂混じりシルト質粘土
炭化物、土器・瓦含む
6．オリーブ黒色（5Y3/1）砂混じり粘土
土器・炭化物含む
7．暗灰色（N3/1）砂質粘土　炭層
8．黒褐色（2.5Y3/1）砂混じりシルト質粘土
土器含む
9．黒褐色（2.5Y3/1）砂少なめシルト質粘土
土器含む
10．黒色（N2/1）砂質粘土　砂多い
11．黒色（7.5Y2/1）細砂混じり粘土
12．オリーブ黒色（7.5Y3/1）砂質シルト
13．黒色（7.5Y2/1）砂質シルト
14．黒色（N2/0）砂混じり粘土　水分多い

第３図　本調査箇所南壁・西壁断面

第８・10層は、第９層と第12･13層を切り込む土坑１の埋土である。南壁で観察できた第９層及び第11層は、西壁の第12層から第14層にそれぞれ対応すると考えられる。また、第７層は、断面観察から、第９層の上面には見られないことから、土坑１の埋没時に堆積したものと考えられる。

遺構

土坑１は、トレンチ南西部で検出した巨石を含む落込みである。埋土は、前述のとおり第８・10層である。遺構は、溝である可能性もあるが、不明である。土坑には、石が２石で並ぶ状態で検出されたが、トレンチ端の部分であったため、何らかの目的で据えられたものかは分からない。

下層の堆積時期は、出土遺物より８世紀後半に求められる。

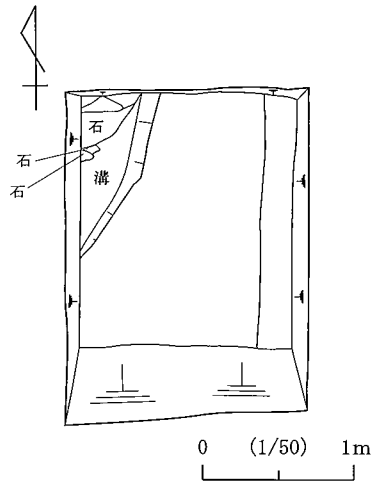
4）出土遺物

出土遺物は、土器・土製品と瓦で分け、それぞれ層位ごとに記載していく。

土器・土製品（第５・６図）

第５層

１～８は土師器杯、9･10は須恵器蓋、11･12は須恵器杯、13は土師器甕、14は須恵器鉢、15･16は須恵器壺である。１は底部内面に円弧状の暗文が施され、外面はミガキが残る。２は内面に放射状の暗文が施される。３は内湾する体部に口縁部をナデによって緩やかに外反させる。13の甕は把手部分のみが残る。外面には粗い縦方向のハケメを施す。いずれの土器も平城Ⅲ～Ⅳ期であり、８世紀半ばである。



第４図　遺構平面図

第７層

17～21は土師器杯、22は土師器甕、23は土師器羽釜、24は土師器盤、25～27は須恵器杯、28は古式土師器甕、29は弥生土器甕、30は弥生土器鉢、31は埴輪、32は須恵器壺である。

17と18の器形は同じであるが、17は内外面に粗いミガキを施し、内面にはハケメが残る。いずれも平城Ⅲ～Ⅳ期。19～21は８世紀後半の所産であろう。22は口縁部を大きく外屈させる。外面にハケメを施したのち口縁部から頸部にかけてナデ調整を行う。平安Ⅰ期であろう。23はやや開く口縁部に短い鍔部を持つ。８世紀代。24は内面に二段の放射状暗文と円弧状暗文を施す。平城Ⅱ期。26は口縁端部内面にわずかな段を持つ。外面は下半をヘラケズリする。TK10型式。28の口縁部は直線的に立ちあがり、端部は内側へと肥厚させる。外面には間隔の短いヨコハケを施し、内面は頸部付近をユビオサエし、上部はナデ調整である。布留３か４式。29は「く」の字に屈曲させた頸部に口縁端部をつまみ上げる。30は外面に縦方向のミガキ、内面に横方向のミガキを施す。外面には２条の沈線がめぐる。いずれも弥生時代後期後葉であろう。31は埴輪の破片である。突帯部分と透孔の一部が残る破片である。透孔は円形と考えられ、２次調整ヨコハケが認められる。普通円筒埴輪の破片と考えたい。Ⅳ期。32は外面に自然釉が多く付着する。平安Ⅱ期。９世紀後半。

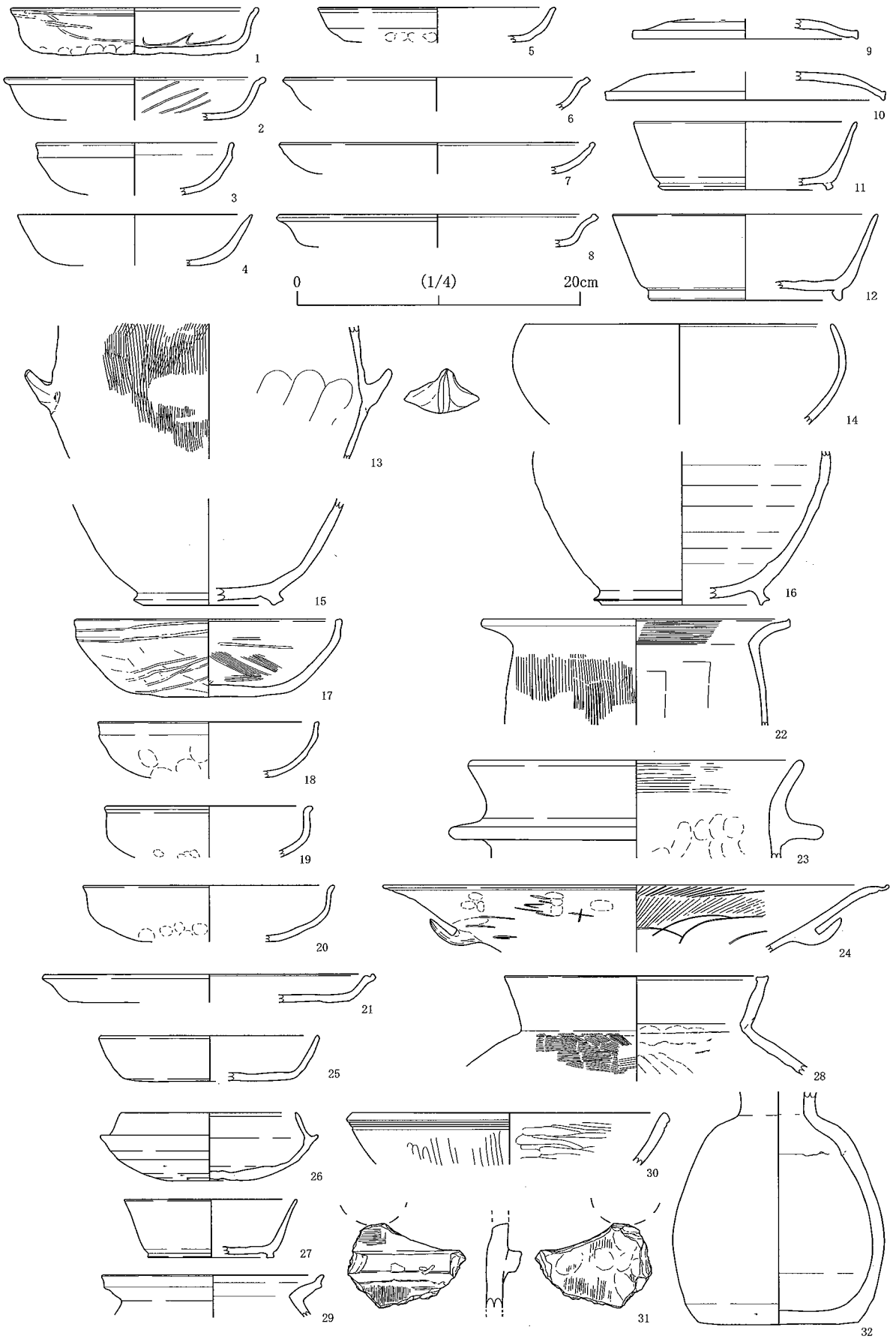
上層（第４～６層）

33～38は土師器杯、39は土師器皿、40･50～53は土師器甕、41は黒色土器盤、42は黒色土器椀、43は須恵器蓋、44・45は須恵器杯、46は須恵器壺、47は須恵器高杯、48は須恵器擂鉢、49は埴輪、54・55は土師器羽釜、56は土師器鉢、57は竈である。

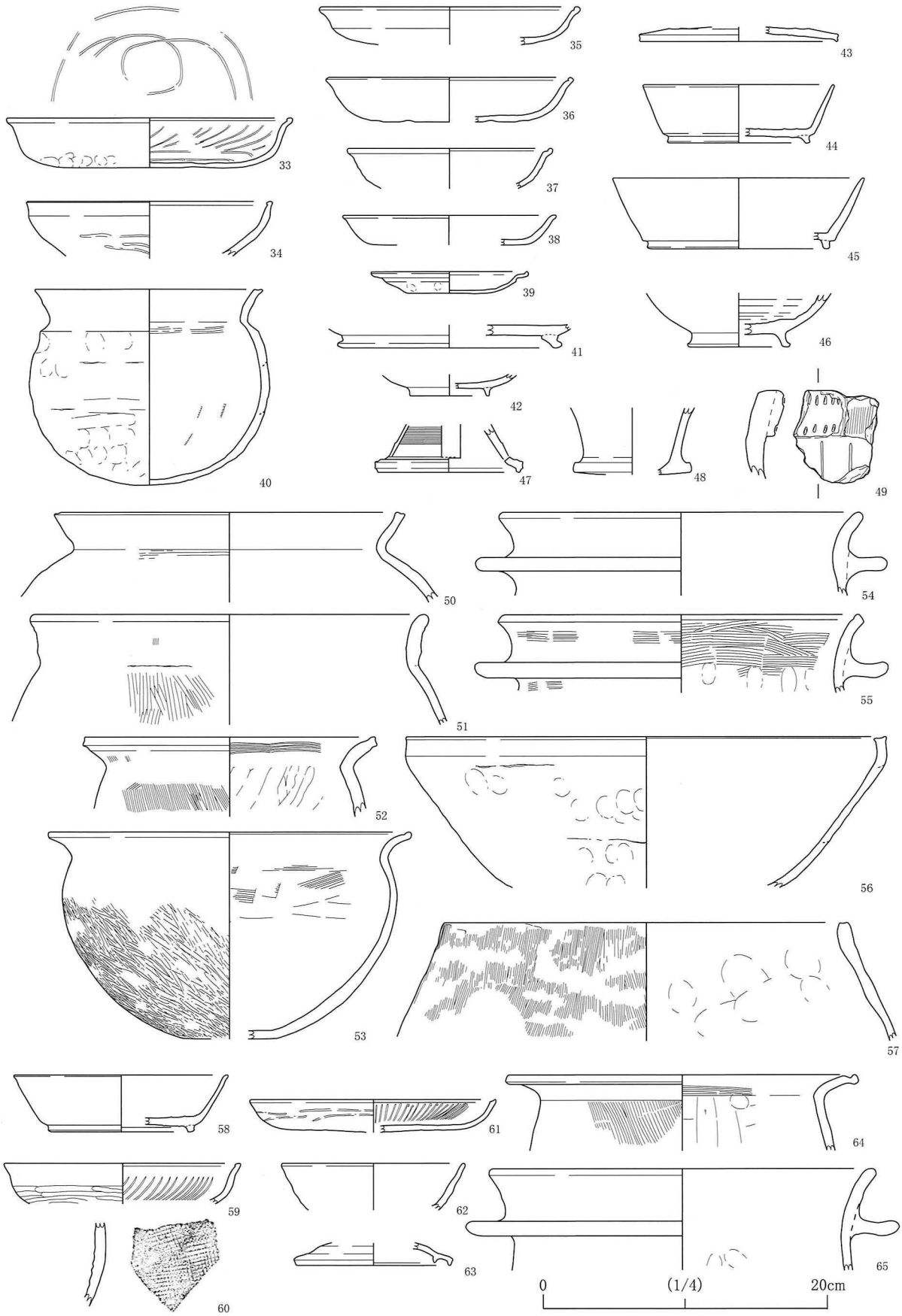
33は内面に放射状暗文と円弧状暗文を持つ。平城Ⅲ期。34～38は８世紀後半であろう。39はいわゆる「て」の字状口縁を持つ皿である。10世紀半ば。41・42は内黒の黒色土器である。９世紀半ば。47は４方向の方形透孔を持つ高杯である。TK47型式。５世紀後半。49は形象埴輪の一部である。突帯の部分に列点を持つ。下半に二条の沈線が縦方向に施される。器種不明。51はやや直立気味に立ち上がり緩やかに外反する口縁部である。外面に粗いハケメを施す。平城Ⅴ期か。57は竈の口縁部である。外面にハケメを施す。上端部に平坦面を持つ。平安Ⅰ期か。

第８・９層

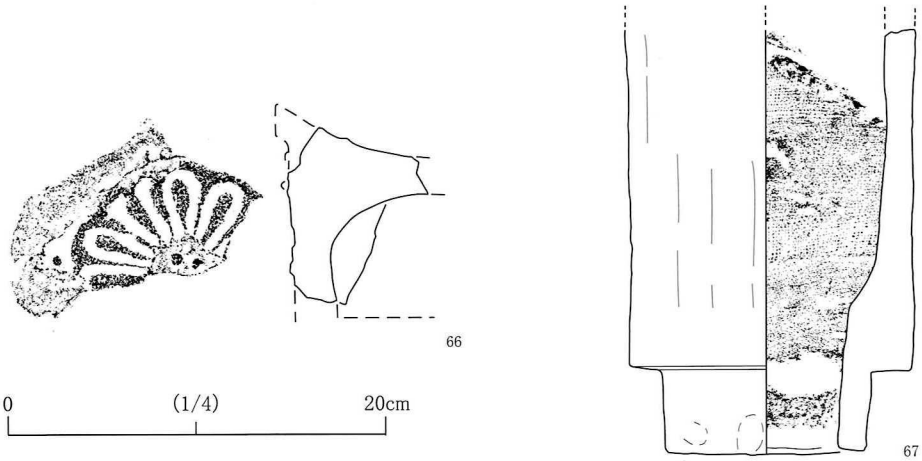
58は須恵器杯である。やや開く口縁部を持つ。平城Ⅳ期。59は土師器杯である。内面は放射状の暗文を配し、外面はヘラケズリによって調整する。平城Ⅴ期。60は韓式系土器である。外面に格子



第５図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図



第６図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図



第７図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図

目タタキが残る。５世紀後半。

下層（第７～14 層）

61 は土師器杯、62 は須恵器杯、63 は須恵器杯蓋、64 は土師器甕、65 は土師器羽釜である。61 は放射状の暗文を持ち､外面に粗いヘラミガキを施す。63 は７世紀後半。64 は口縁部を大きく外反させ、端部を上部に肥厚させる。外面は粗いハケメ、内面はケズリののちナデを施す。平安Ⅰ期。時期を記したもの以外はいずれも８世紀後半である。

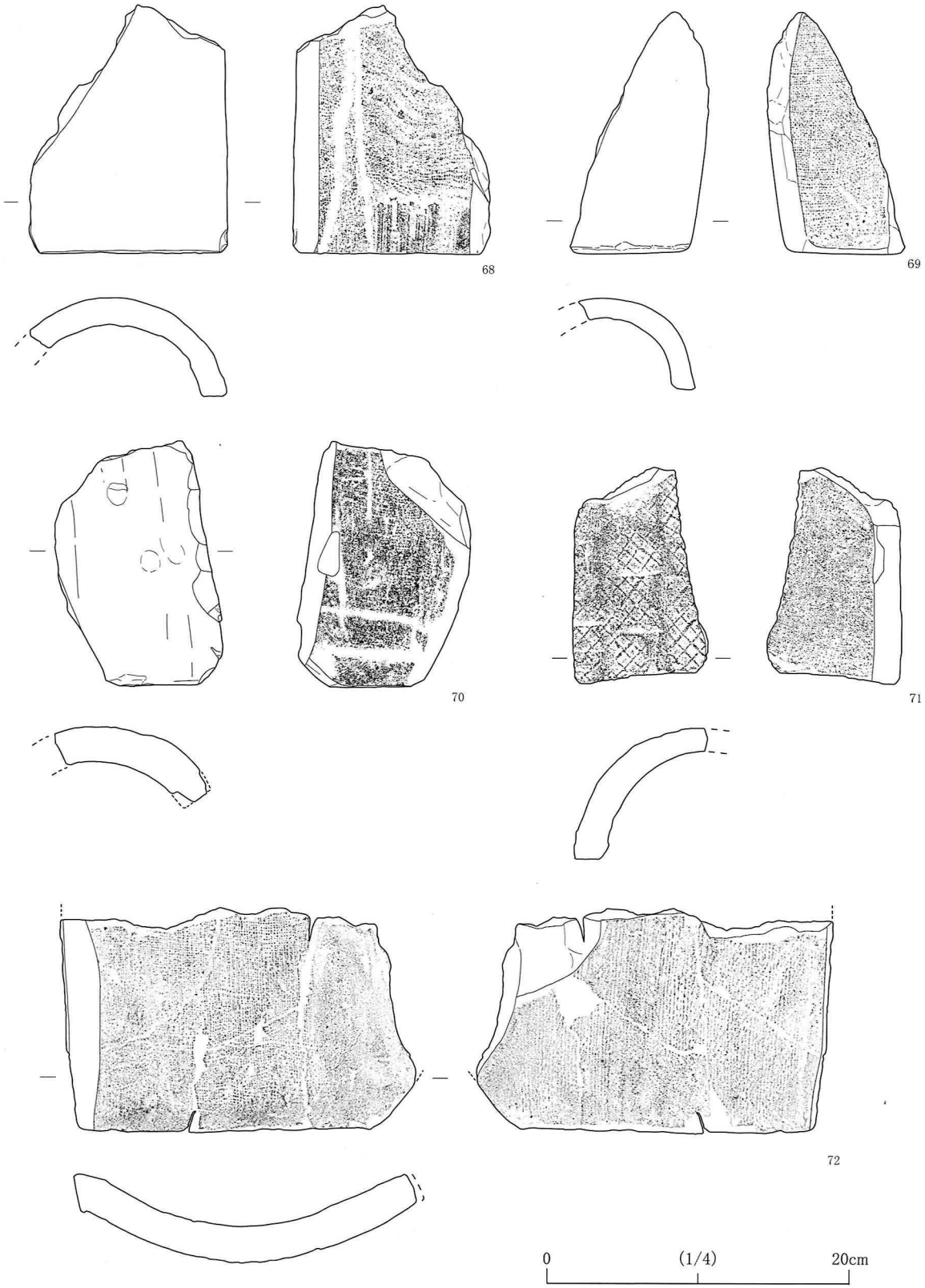
瓦（第７～10 図）

66 は単弁十二葉蓮華紋軒丸瓦である。平安時代中期。67 は瓦質の土管である。内面には布目が残る。68 ～ 71・74 は丸瓦である。68 ～ 70・74 の凸面は縄目タタキを施したのちナデ消しを行っている。凹面は布目が残る。71 の凸面は格子目タタキを施す。７世紀代であろう。72 ～ 73・75 ～ 77 は平瓦である。外面に縄目タタキが施され、内面に布目が残る。71 を除いていずれの瓦も奈良時代～平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。66・70 ～ 77 は第４～６層、67 は第８層、68・69 は第５層からの出土である。

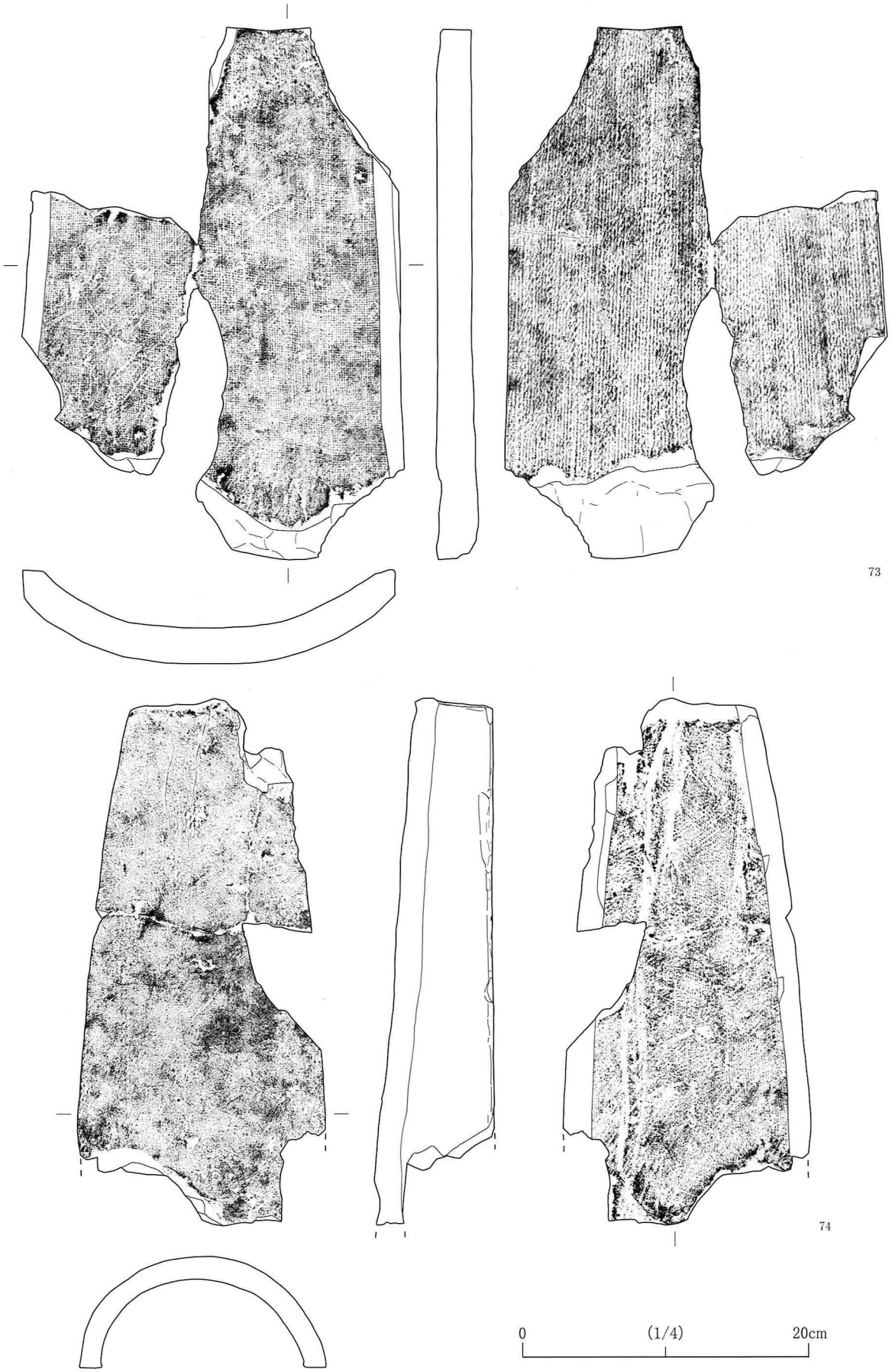
5）まとめ

付近の過去の調査を見ていく。平成 14 年に、皿池遺跡第４次調査が本調査区の南西約 20m の地点で行われた。当該調査では、弥生時代中期から後期にかけて埋没した東から西方向へ流れる河川跡や古墳時代から鎌倉時代にかけて存続した集落に伴う遺構を検出した。このうち、古墳時代から中世まで続いたとされる集落跡の遺構面のレベルは、T.P.18.7m 付近である。今回の調査で検出した溝１が切込む第９層又は 12 層上面で T.P.19.0m～19.1m、さらに上層のトレンチの大部分を覆うと考えられる炭層で T.P.19.3m 前後である。調査トレンチの範囲が限られており断言はできないが、今回検出した遺構及び遺構面は、調査地は、西から東へと傾斜し、レベルが上がっていく自然地形であることも考慮すると、第４次調査で検出された弥生時代後期に河川又は谷地形が埋没した後に営まれた集落跡の延長である可能性が考えられる。しかし、上層で行われた大規模な盛土によって第４次調査で検出された古代から中世にかけての遺構面との間に約 1.3m の高低差が生じた。盛土が行われた時期は、出土遺物より平安時代中期頃と考えられ、この時期に大規模な土地の改変が行われたことが分かる。

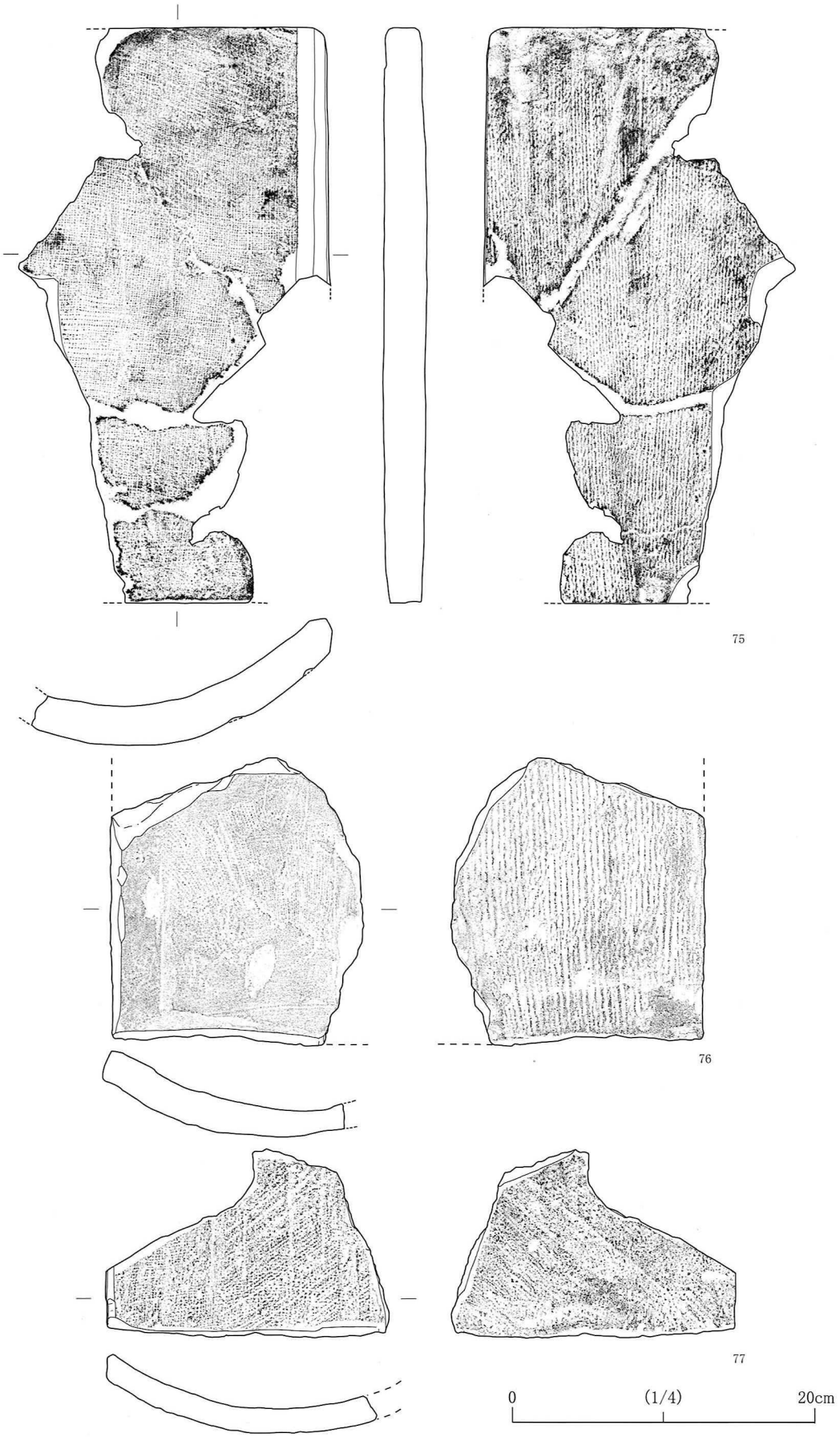
この土地改変に伴う上層の盛土層と関連する整地層が、調査地前面で行われた下水道管きょ築造工



第８図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図



第９図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図



第 10 図　皿池遺跡第 10 次調査出土遺物実測図

事に伴う第８次調査でも検出されている。調査地前面であるA-８区で、GL-0.4～1.5m付近より検出された第２～５層は、奈良～平安時代の遺物を多く含んだ層である。当該調査では、奈良～平安時代の瓦が主に出土したが、河内寺廃寺跡創建瓦である三重弧文軒平瓦（KWH1、飛鳥時代後期）も出土している。

皿池遺跡西方には、郡衙とのつながりが想定される河内寺廃寺跡が位置する。今回の調査地は、河内寺廃寺跡の西面回廊推定地より、真西に約36mの地点である。これまでのところ、皿池遺跡からは瓦葺建物の存在を示す遺構等は検出されていない。また、河内寺廃寺跡の調査でも、寺域西部では、西面回廊を含め建物等に伴う目立った遺構は検出されていない。

今回の調査成果の一つは、大量に出土した遺物群であり、特に上層から出土した遺物は、土器・瓦が多く含まれていた。その中でも特に特徴的なものが、河内寺廃寺跡との関連が考えられる単弁十二葉蓮華文軒丸瓦（KWM３型式）と同文の軒丸瓦である。このKWM３型式の瓦は、平安時代中期頃所産である。今回出土したこの瓦は、第８次調査で出土した軒平瓦に続いて、河内寺廃寺跡との関連が強く想定でき、河内寺廃寺跡の伽藍外西域での建物等の存在を示唆している。

最後に、これまでの調査研究により、河内郡大領であった河内連は、『平安遺文補遺』所収の昌泰２（899）年の土地売券にも名を連ねていることから、当時なお、郡領として大きな勢力をもっていたと考えられている。今回の調査トレンチ上層及び第８次調査で検出された平安時代中期における河内寺廃寺跡西方の大規模な整地は、当時の河内連の勢力下で行われたと考えることも可能であろう。

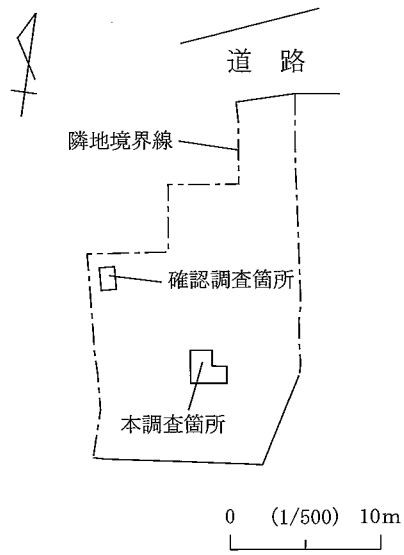
第11次調査

6）調査の経過

平成24年12月に、今回の調査区を含む土地で開発行為に伴う事前の協議に関する意見聴取が本市建築部開発指導課よりあった。今回の調査地はその時点では、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなったが、西側に皿池遺跡、南西に河内寺跡が近接し、また近年の調査成果より当該地域でも何らかの埋蔵文化財が発見される可能性が考えられた。このため、本件工事の設計担当者と協議を重ね、事業主からの依頼に基づき確認調査を実施することとなった。

確認調査の結果、２層にわたる遺物包含層及び土坑状の遺構を検出し、当該地に埋蔵文化財が存在することを確認した。確認調査の結果を受けて、代理者と協議を行い、計画建物のうち一部の掘削工事が埋蔵文化財に影響を及ぼすことが確認された。このため、当該範囲の発掘調査が必要である旨の指導を行い、平成25年３月30日及び31日に調査を実施した。

また、同時に、大阪府教育委員会文化財保護課とも協議を行い、当該地域を周知の埋蔵文化財包蔵地である皿池遺跡の範囲に含めるための協議を行った。今回の確認調査は、国庫補助事業の対象となる文化財保護法（昭和25年法律第214号。以下法という。）第99条第１項の規定により地方自治体が行う発掘調査である。このため、事業者には法第96条第１項に基づく埋蔵文化財の不時発見の届出義務はなく、法第93条第１項に基づく届出を提出させた上で必要な行政指導を行うよう指導を受けた。

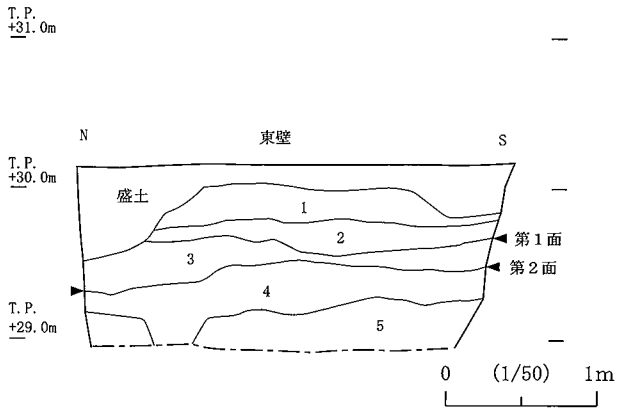


第11図　調査トレンチ位置図

7）調査の概要

①確認調査の概要

確認調査は、埋蔵文化財の有無を確認するため調査のため、計画建物の範囲外で行った。調査トレンチは東西２m、南北３mである。調査の結果、第２～４層で、須恵器、土師器、瓦器等を含む遺物包含層を検出し、第３層上面で土坑状の遺構（P1）を、第４層上面でP2をそれぞれ検出した。なお、出土した遺物のうち図化できるものはなかったため、本文中の記載にとどめることとする。



1．にぶい黄褐色（10YR4/3）0.5～3cm大の礫混じり砂質シルト
2．黒褐色（10YR3/2）0.2～1cm大の礫混じりシルト
3．暗褐色（10YR3/3）0.15～1cm大の礫混じり粘土質シルト
炭化物含む P1の遺構面
4．灰黄褐色（10YR4/2）1～3cm大の礫混じりシルト質粘土
P2の遺構面
5．黒褐色（10YR2/3）細～中砂　こぶし大～人頭大の礫混じり粘土質

第12図　確認調査トレンチ東壁断面図

各層の堆積状況は以下のとおりである。

第１層　にぶい黄褐色（10YR4/3）0.5～３cm大の礫混じり砂質シルト。（旧耕土）

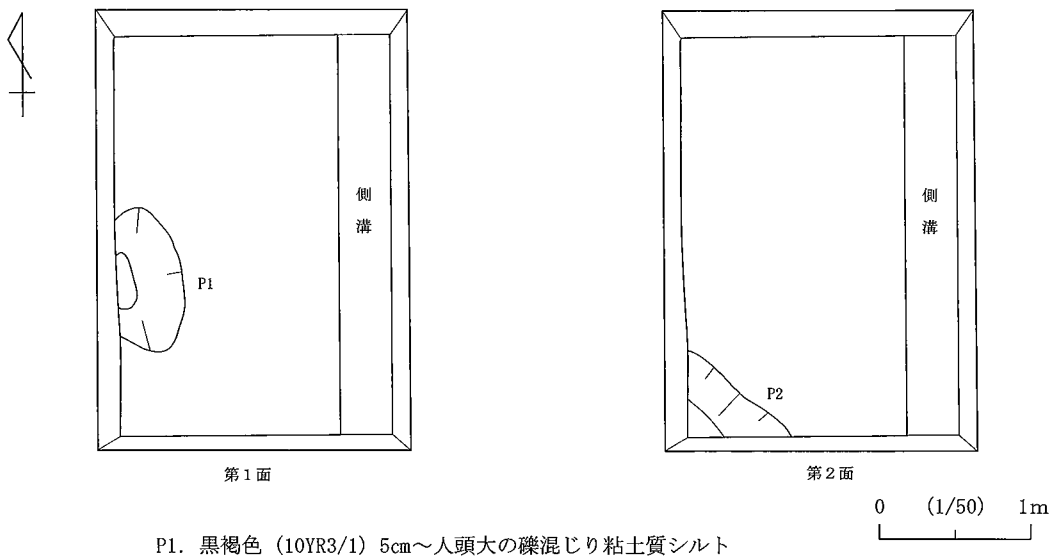
第２層　黒褐色（10YR3/2）　0.2～１cm大の礫混じりシルト。

第３層　暗褐色（10YR3/3）　0.15～１cm大の礫混じり粘土質シルト。炭化物含む P1 の遺構面。８～９世紀代の遺物含む。

第４層　灰黄褐色（10YR4/2）　１～３cm大の礫混じりシルト質粘土。P2 の遺構面。

第５層　黒褐色（10YR2/3）　粘土質細～中砂。こぶし大～人頭大の礫混じり。（地山層）。

第３層及び第４層上面で遺構を検出した。いずれも土坑状の遺構である。



P1．黒褐色（10YR3/1）5cm～人頭大の礫混じり粘土質シルト
P2．青黒色（5BG2/1）0.2～0.3cm大の礫混じり粘土

第13図 確認調査トレンチ遺構第1面・2面遺構平面図

P1 は、長径 97cm（短径はトレンチ西壁内に収まり、不明）の土坑である。埋土は、黒褐色（10YR3/1）5 cm～人頭大の礫混じり粘土質シルトである。出土遺物は須恵器甕、土師器の小片である。

P2 は、トレンチ南西隅に見られた土坑又は溝の遺構である。埋土は、青黒色（5BG2/1）0.2 ～ 0.3 cm大の礫混じり粘土である。遺物は、須恵器杯蓋、土師器羽釜の破片が出土した。

②発掘調査の概要

確認調査結果を受けて実施された発掘調査は、計画建物のうち、掘削深度が遺構面を破壊する恐れのある個所で行った。発掘調査地点は、確認調査地点の南東約 9 m である。調査面積は、15.6㎡である。確認調査により確認された遺構面は、現状の GL-0.4～0.5m である一方、発掘調査により検出された遺構面は、GL-0.25～0.3m と非常に浅かった。

発掘調査トレンチで確認できた堆積状況は以下のとおりである。

第１層　オリーブ黒色（7.5Y3/1）３～５cm大の礫混じり粘土。

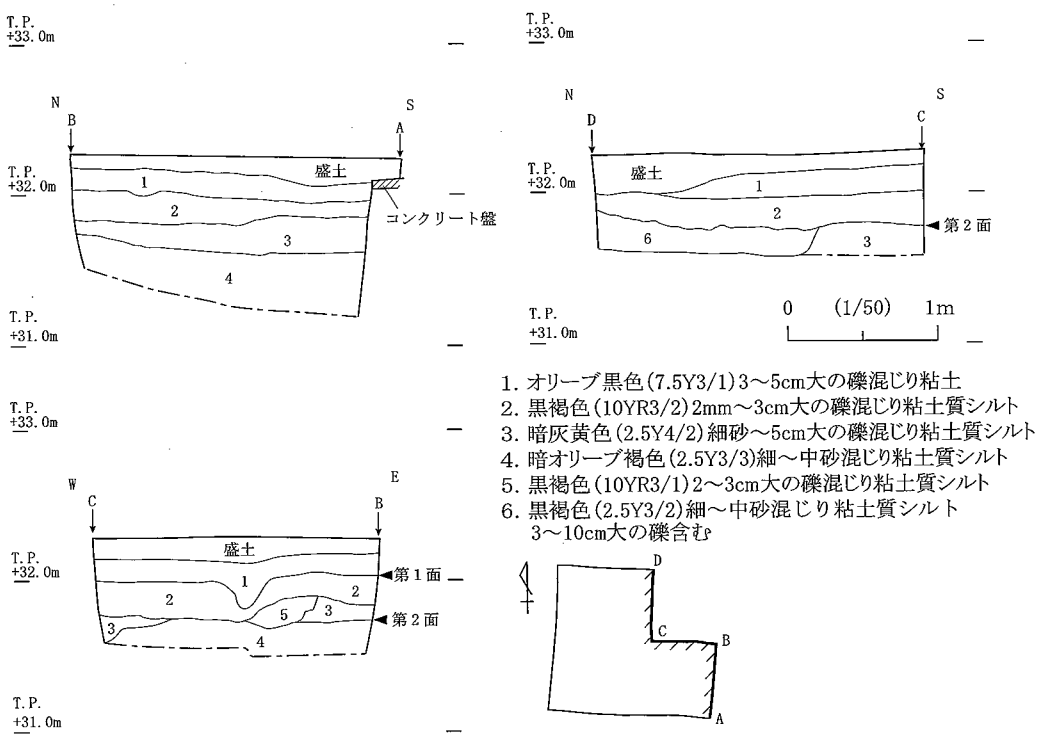
第２層　黒褐色（10YR3/2）２mm～３cm大の礫混じり粘土質シルト。

第３層　暗灰黄色（2.5Y4/2）細砂～５cm大の礫混じり粘土質シルト。

第４層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）細～中砂混じり粘土質シルト。

第５層　黒褐色（10YR3/1）２～３cm大の礫混じり粘土質シルト。

第６層　黒褐色（2.5Y3/2）細～中砂混じり粘土質シルト。３～10cm大の礫含む。



第 14 図　本調査トレンチ断面図

第１層は、旧耕作土である。

第２層は、須恵器片を含む整地層である。出土遺物は須恵器小破片のみであるため、整地された時期は不明である。少なくとも中世以降のものと考えられる。遺構は検出されなかった。

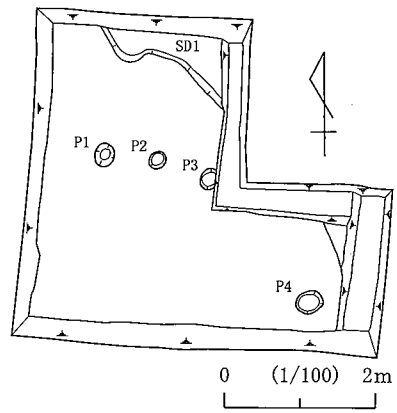
第３層及び第４層はいずれも地山層である。土質より２層に分層した。

第５層は、第３層がブロック状に混入する層で、トレンチ断面 BC 間で検出した。またトレンチ

BC 間断面では、第４層上面を第３層が覆う形での堆積状況が確認できた。これらはいずれも、第２層による整地時に撹乱を受けたものと推定できる。

第６層は、溝（SD1）の埋土である。検出された遺構は、ピットが４個、溝が１条である。すべて、第３層（地山）上面で検出された。

P1 は、長径 23.6cm、短径 30.2cm で、埋土は、黒色（2.5Y2/1）粘土質シルトである。P2 は、長径 22.4cm、短径 21.8cm で、埋土は黒褐色（2.5Y3/1）２mm～１cm大の礫混じり粘土質シルトである。P3 は、長径 29.8cm、埋土は、黒褐色（2.5Y3/1）粘土質シルトである。P4 は、長径 37.4cm、短径 33.6cm、埋土は、黒褐色（10YR2/3）２～３cm大の礫を含む粘土質シルトである。SD1 は、検出幅が 92cm、深さは 25cm である。埋土は、黒褐色（2.5Y3/2）３～10cm大の礫含む細～中砂混じり粘土質シルトである。CD 間の断面では、第３層及び第４層を切り込む形で検出した。遺物は出土していないため、埋没時期は不明である。



P1. 黒色(2.5Y2/1)粘土質シルト
P2. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
2mm～1cm大の礫まじり
P3. 黒褐色(2.5Y3/1)粘土質シルト
P4. 黒褐色（10YR2/3)粘土質シルト
2～3cm大の礫含む
SD1. 黒褐色(2.5Y3/2)細～中砂混じり
粘土質シルト 3～10cm大の礫含む

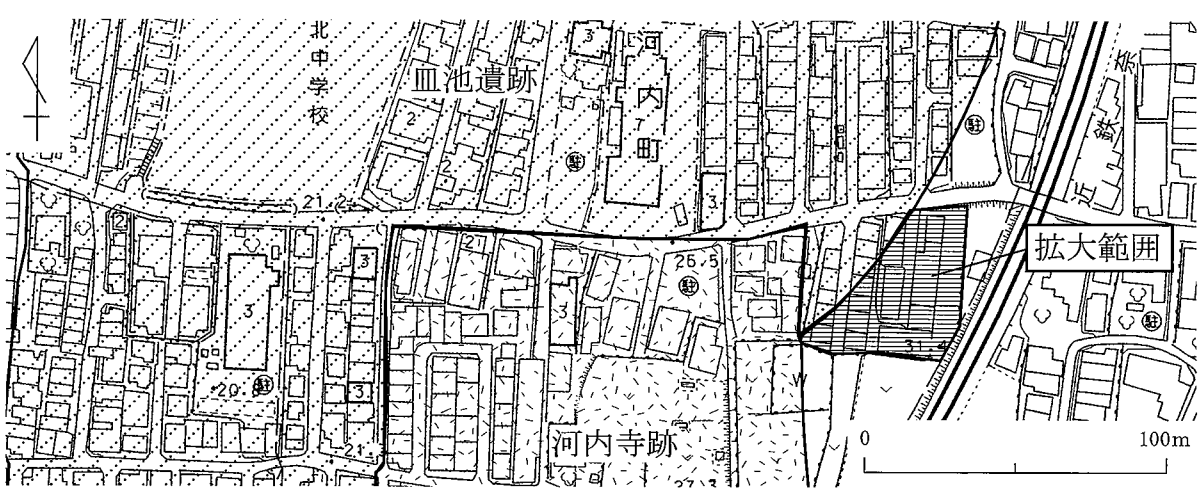
第 15 図　本調査トレンチ遺構平面図

8）まとめ

今回の調査により、確認調査トレンチでは、第３・４層で遺物包含層及び遺構を検出したが、続く発掘調査では同様の層の堆積は確認できなかった。おそらく、中世以降の耕作に伴う削平を受けたものと考えられる。今回の発掘調査により、第 16 図のとおり皿池遺跡東域における範囲が拡大されることとなった。

【参考文献】

大阪府教育委員会 1968『河内寺跡調査概報－東大阪市河内町－』
財団法人東大阪市文化財協会 2002『皿池遺跡第４次発掘調査報告』
東大阪市教育委員会 2007『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 －成 18 年度－』
東大阪市教育委員会 2007『河内寺廃寺跡発掘調査報告書』



第 16 図　皿池遺跡範囲拡大図

図版1　皿池遺跡第10次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
調査風景
（南東より）

2．本調査箇所
完掘状況
（東より）

3．本調査箇所
完掘状況
（南西より）

図版2　皿池遺跡第11次発掘調査　遺構

1．確認査箇所
調査風景
（北東より）

2．確認査箇所
東壁断面
（西より）

3．確認査箇所
南壁断面
（北より）

図版3　皿池遺跡第11次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
機械掘削状況
（東より）

2．本調査箇所
東壁断面１
（南より）

3．本調査箇所
東壁断面２
（西より）

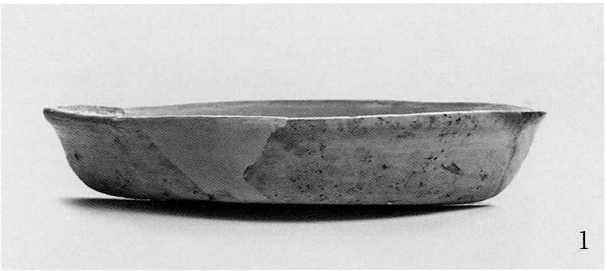
図版4　皿池遺跡第11次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
完掘状況
（西より）

2．本調査箇所
完掘状況
（南東より）

3．本調査箇所
完掘状況
（北より）

図版5　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物


1

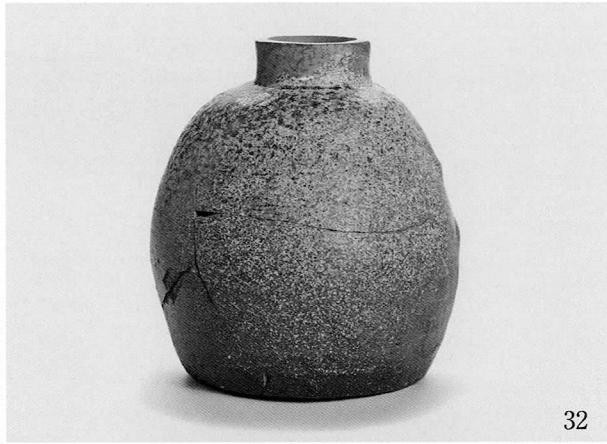
14

17

28

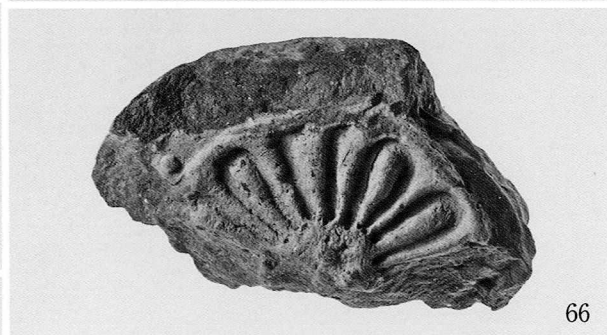
27

39


32

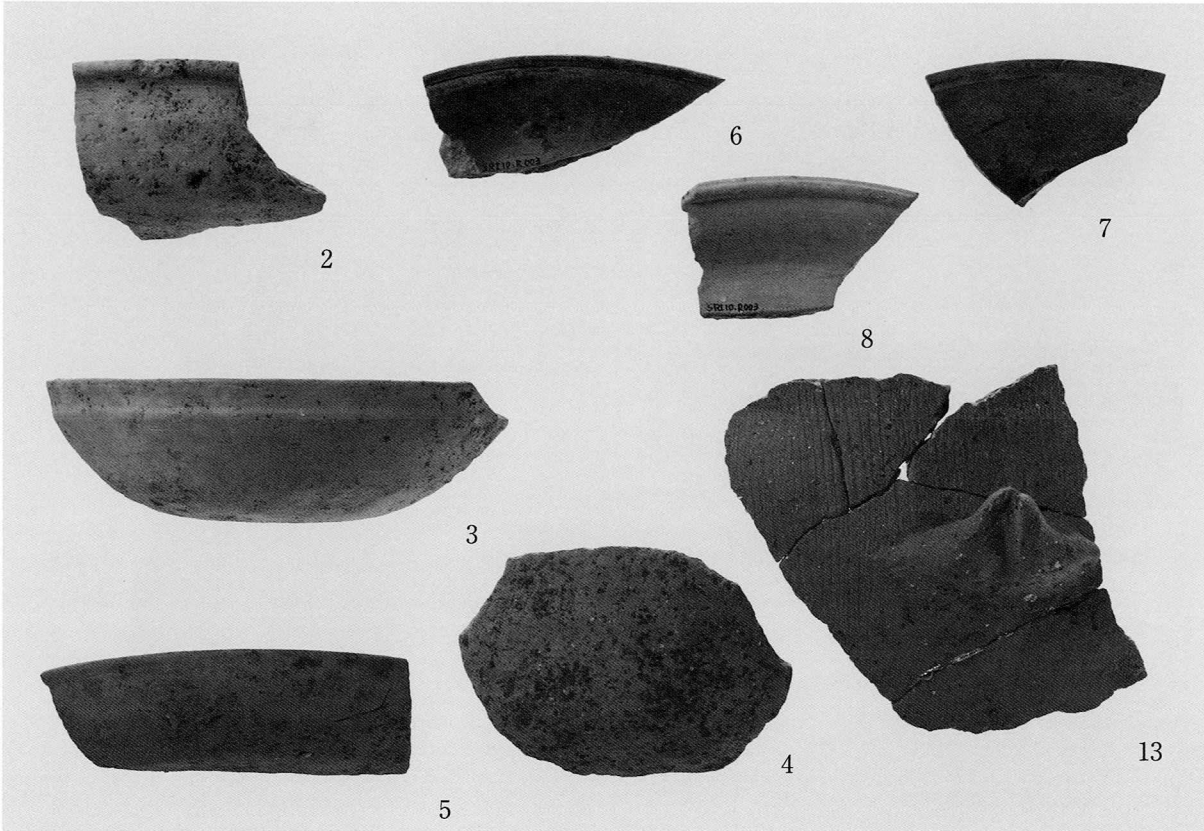
40

53

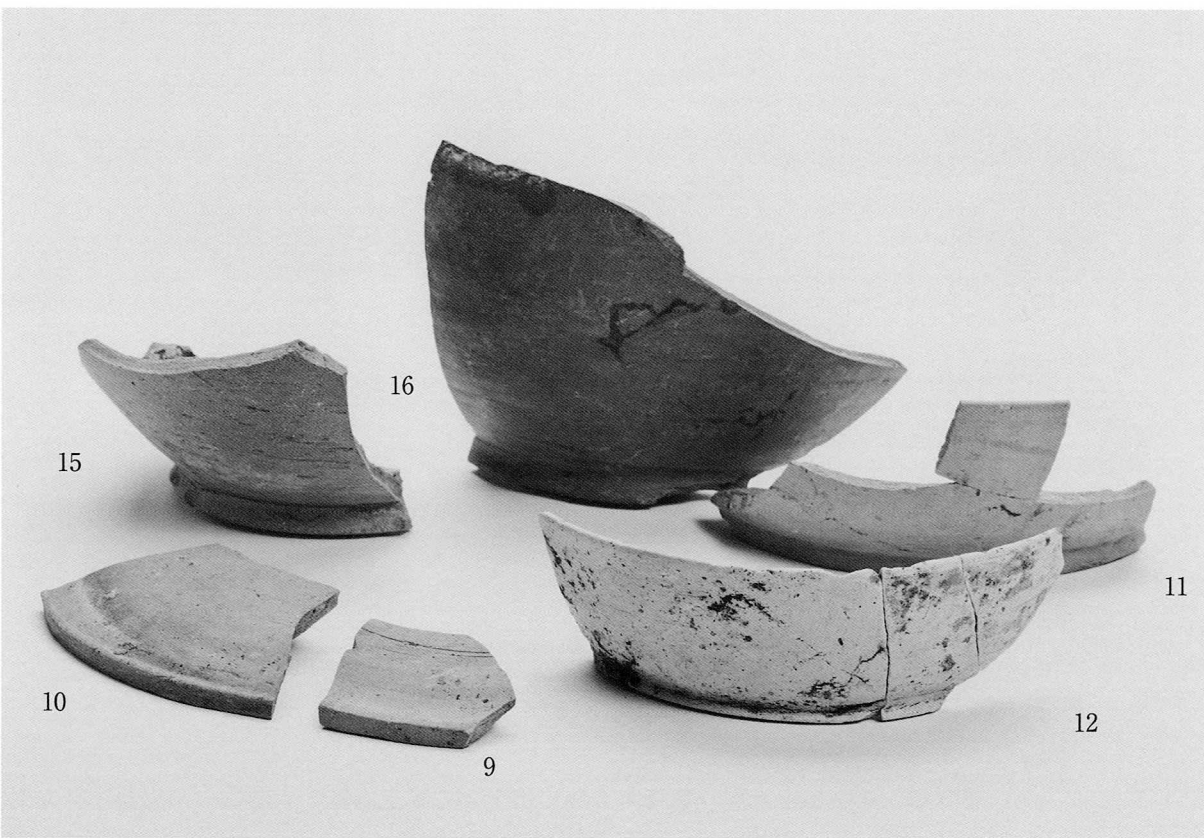

66

第５層、第７層、上層（第４～６層）出土　古式土師器・土師器・須恵器・軒丸瓦

図版6　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物

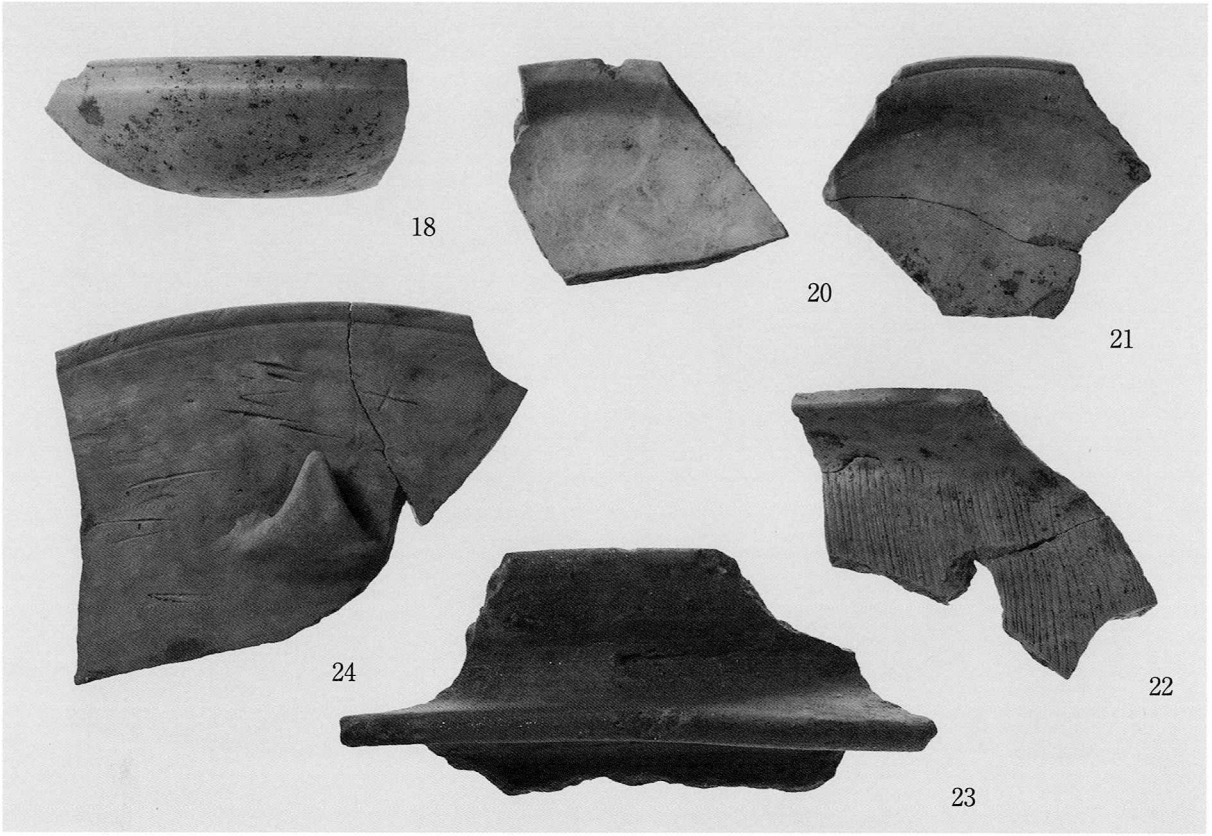


1．第5層出土　土師器

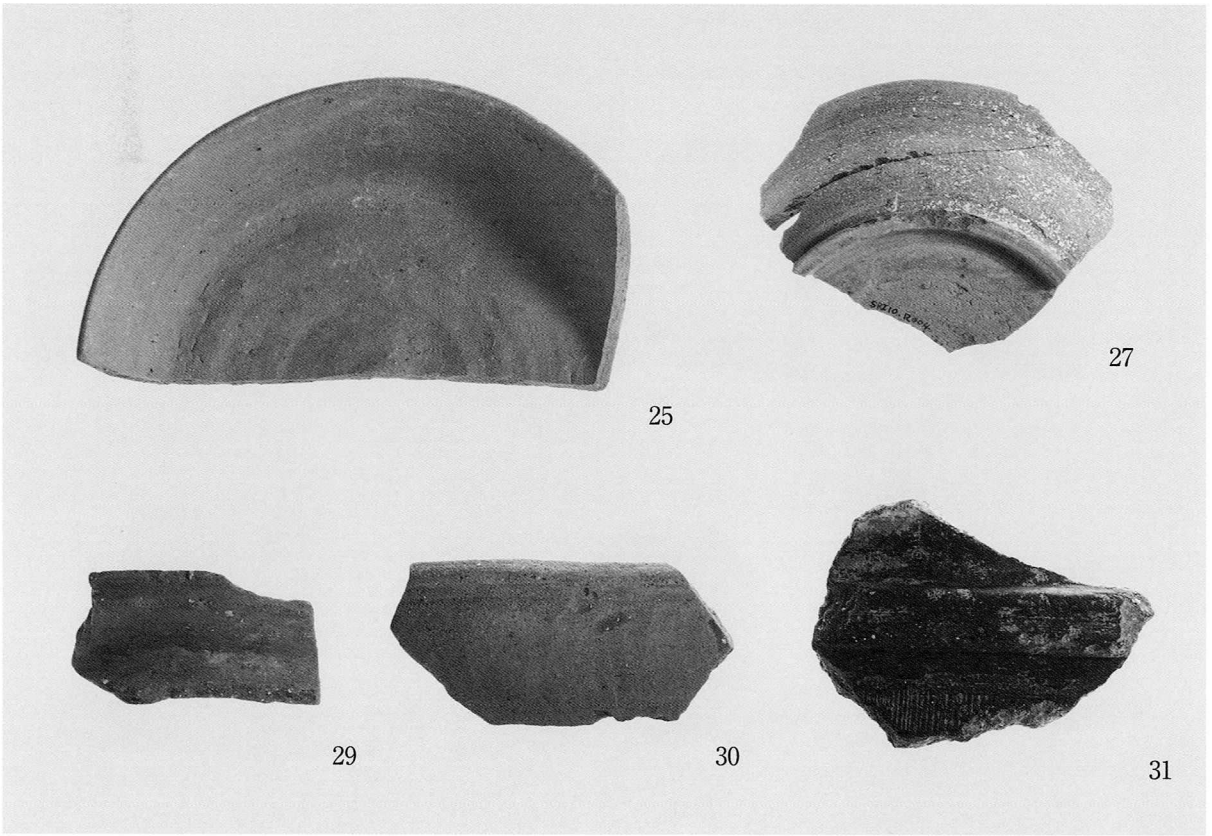


2．第5層出土　須恵器

図版7　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物

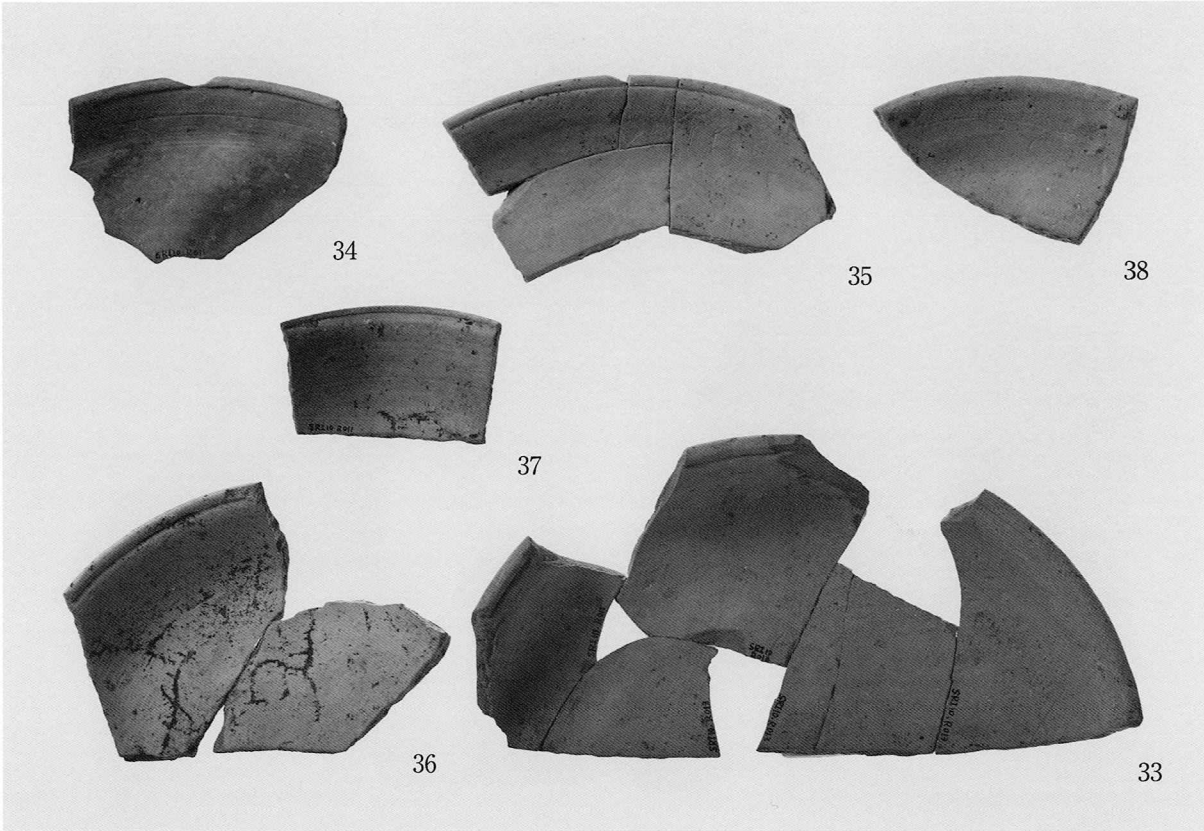


1．第7層出土　土師器

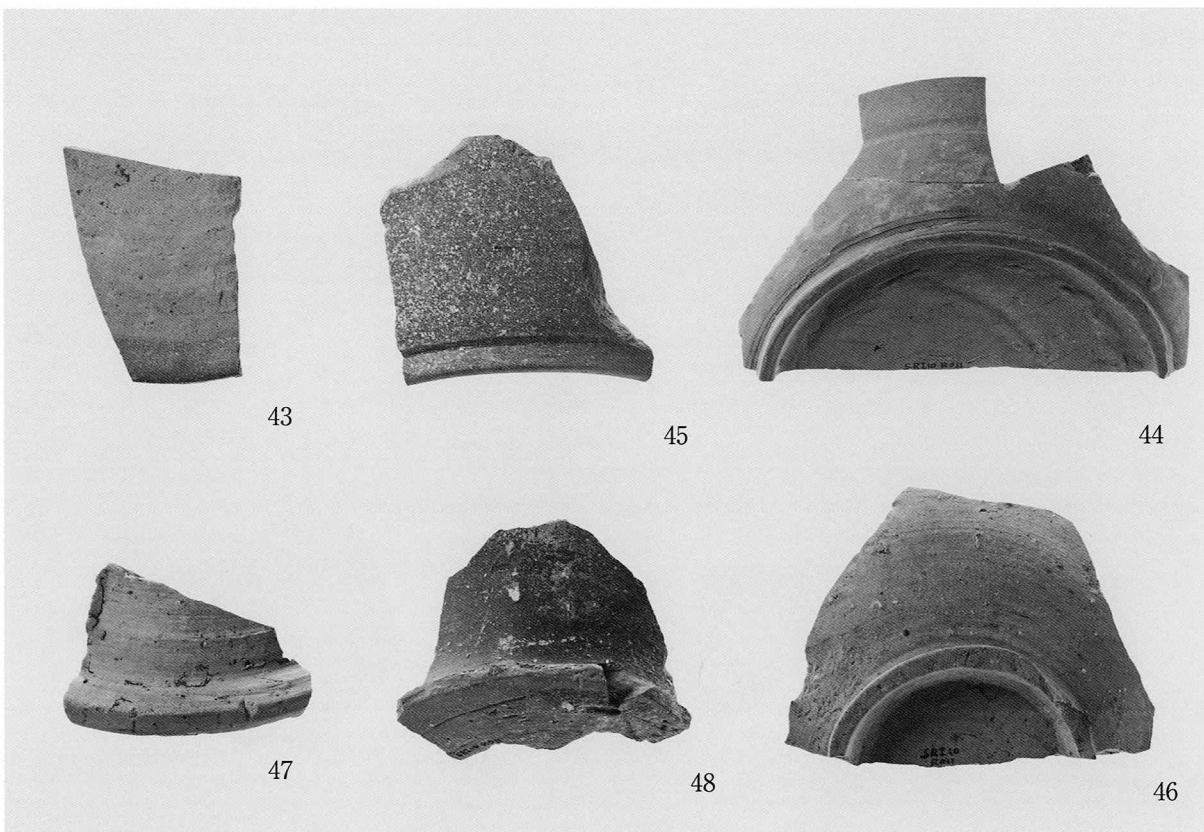


2．第7層出土　須恵器・埴輪・弥生土器

図版8　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物

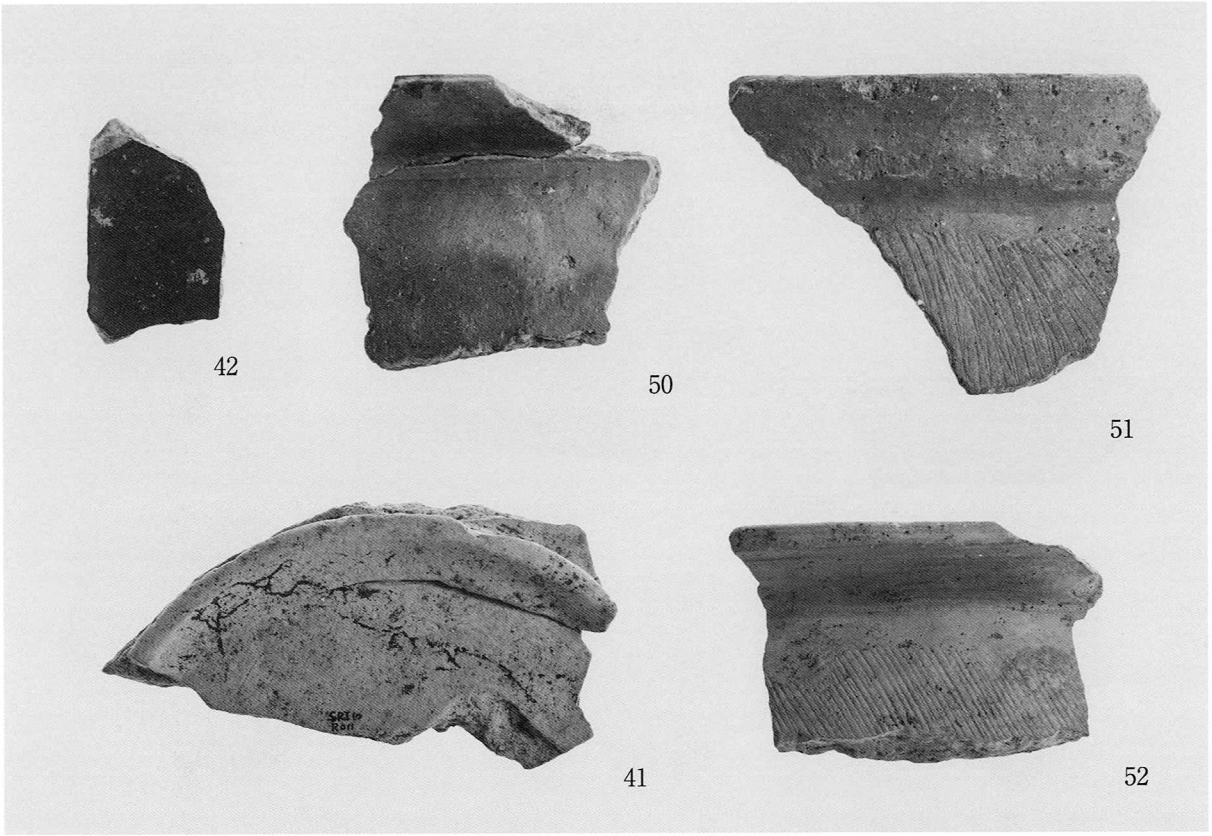


1．上層（第4～6層）出土　土師器

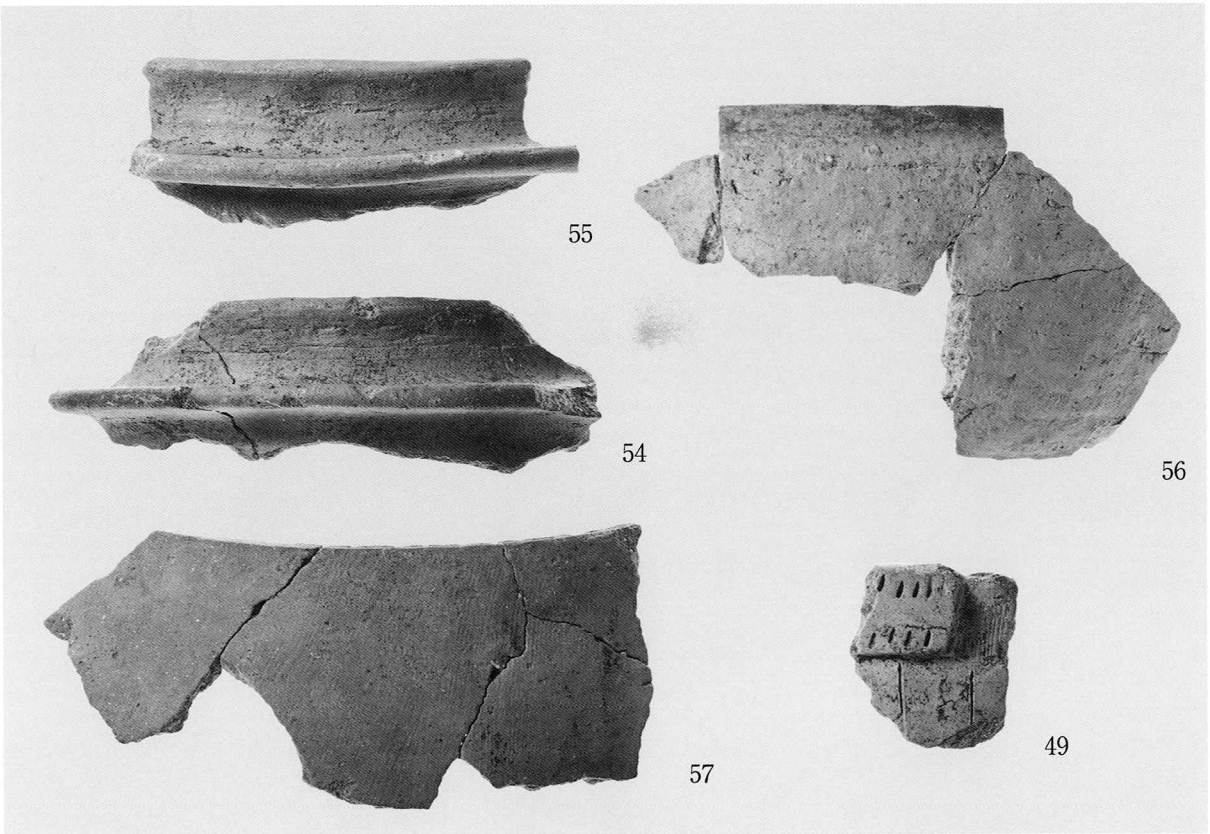


2．上層（第4～6層）出土　須恵器

図版9　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物

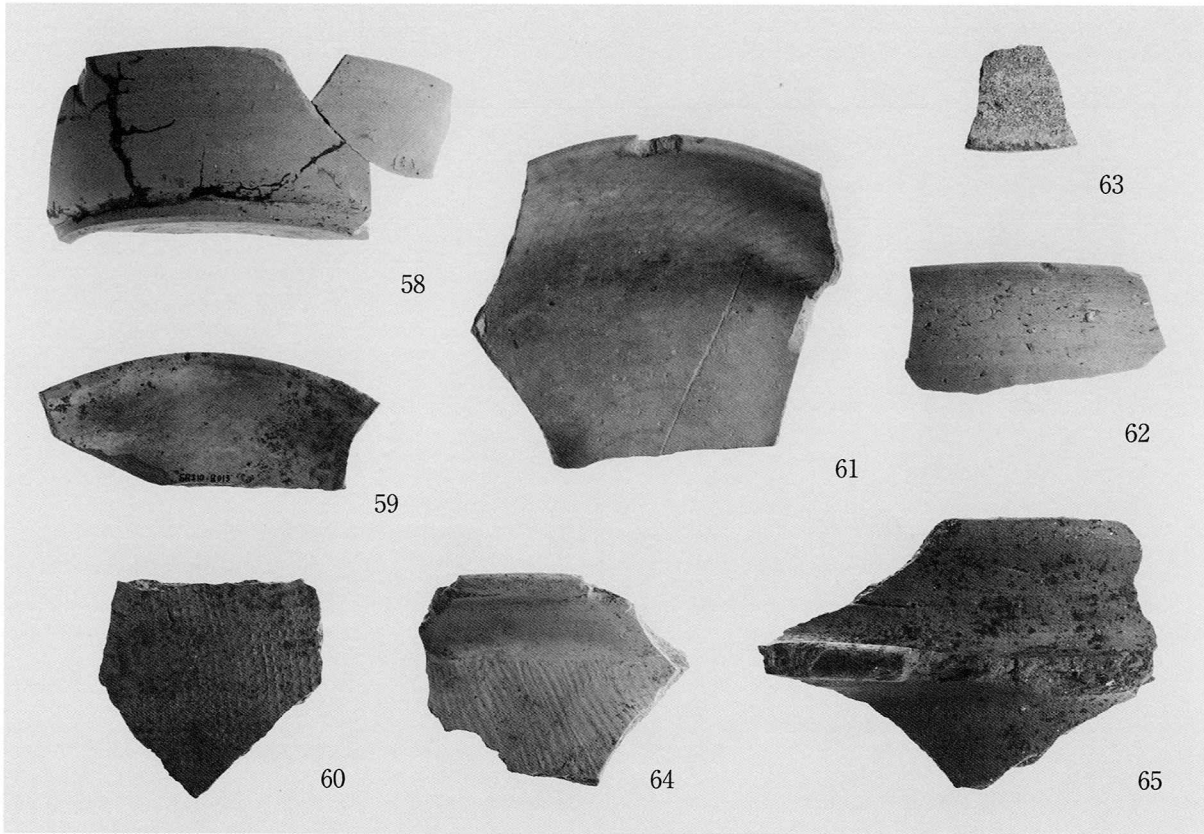


1．上層（第4～6層）、第8・9層出土　黒色土器・土師器



2．上層（第4～6層）、第8・9層出土　土師器・埴輪

図版10　皿池遺跡第10次発掘調査　遺物



1．下層（第7～14層）出土　土師器・須恵器・韓式系土器

2．第8層出土　土管

第３章　横沼遺跡第１次発掘調査

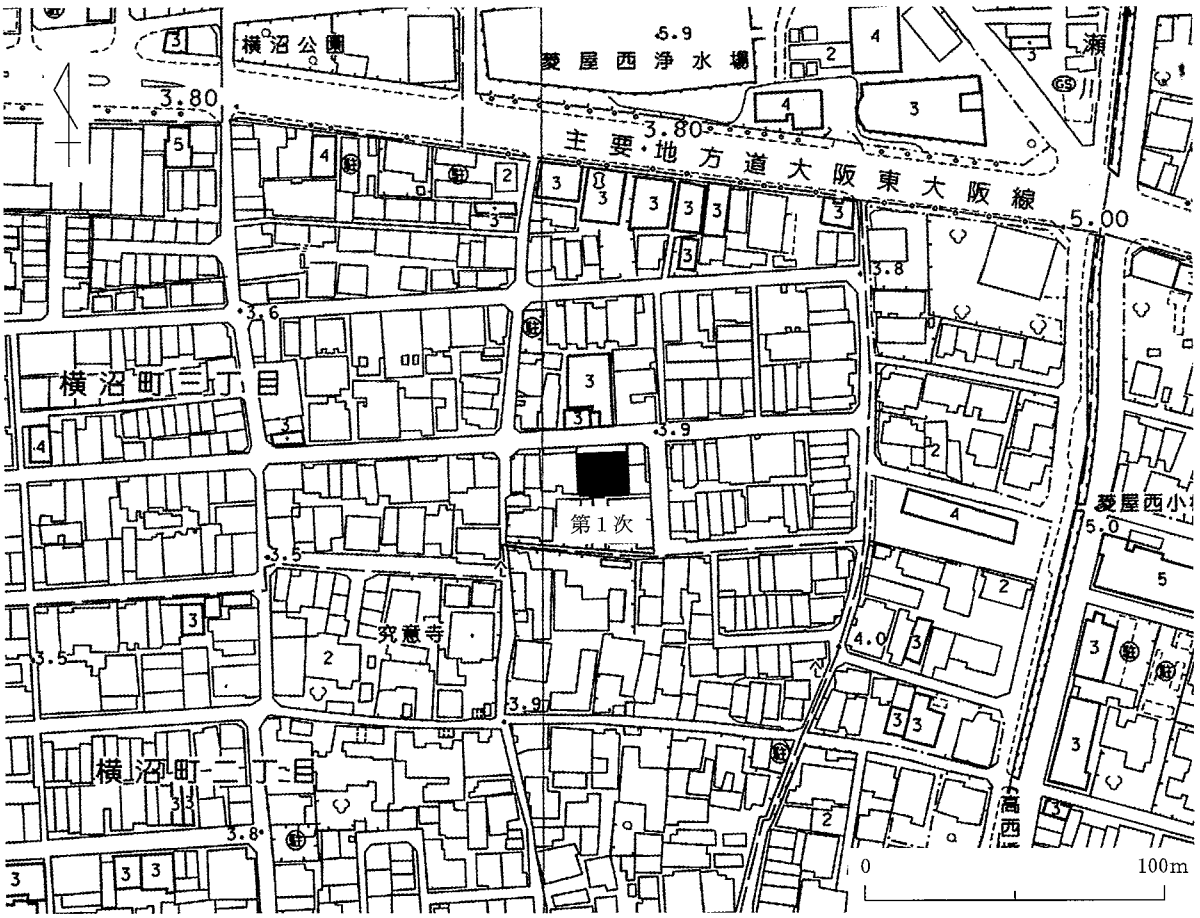
１）はじめに

横沼遺跡は、横沼町三丁目に位置する中世の散布地である。

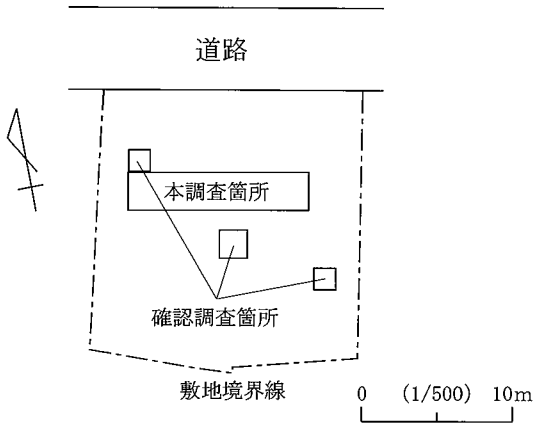
本遺跡の存在が知られるようになったのは、昭和 63（1988）年に試掘調査を行い中世の土器を検出したことによる。以降、確認・立会調査を継続して行ってきたが、これまで顕著な成果を得ることはできなかった。

２）調査の経過

平成 24 年 11 月、東大阪市横沼町三丁目２番１において、個人施工による共同住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 24 年 11 月 19 日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-1.0mから -1.8mの間で中世の須恵器及び瓦器が出土した。この結果に基づき協議代理者と取り扱いについて協議を行い、平成 24 年 11 月 21 日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で 32.5㎡である。（第２図）



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図

３）調査の概要

層序（第３図）

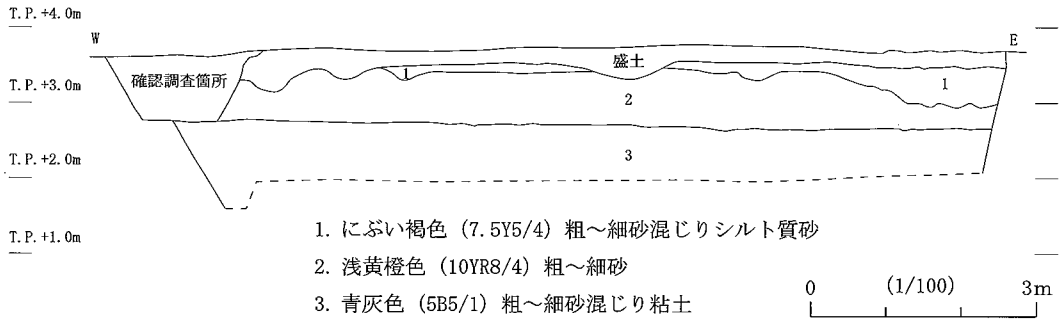
盛土。

第１層　にぶい褐色（7.5Y5/4）粗～細砂混じりシルト質砂。

第２層　浅黄橙色（10YR8/4）粗～細砂。

第３層　青灰色（5B5/1）粗～細砂混じり粘土。

第１層は、近世の耕作土と考えられる。第２層は、東に流れる長瀬川から供給された砂である。遺物は出土していないが、近世の堆積であろう。第３層は、水成堆積層である。植物遺体が多く残存しており、下部では中～小礫が認められた。池や湿地といった水が留まる地形であったと考えられる。遺物はすべてこの層からの出土である。

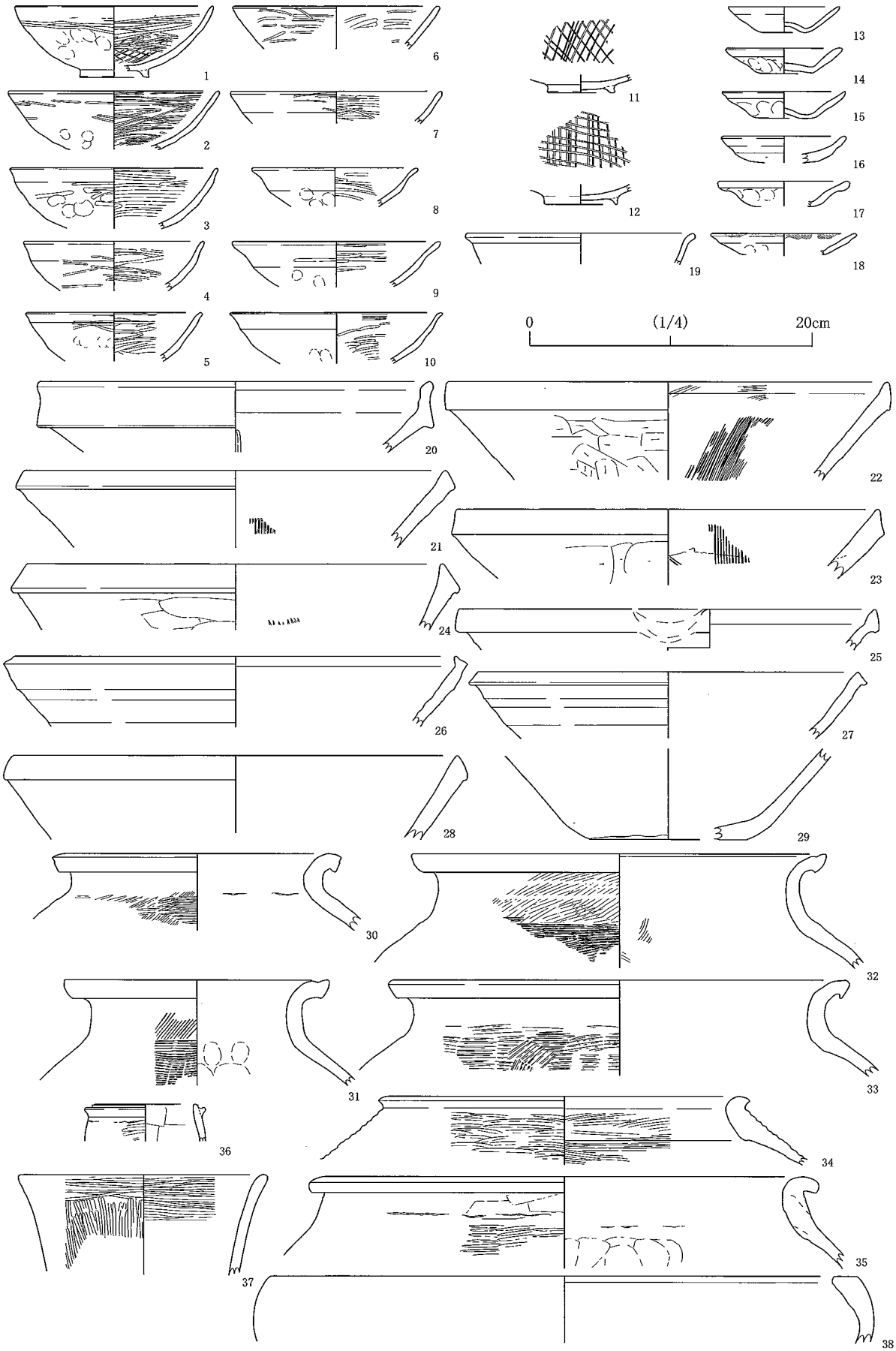


第３図　本調査箇所北壁断面

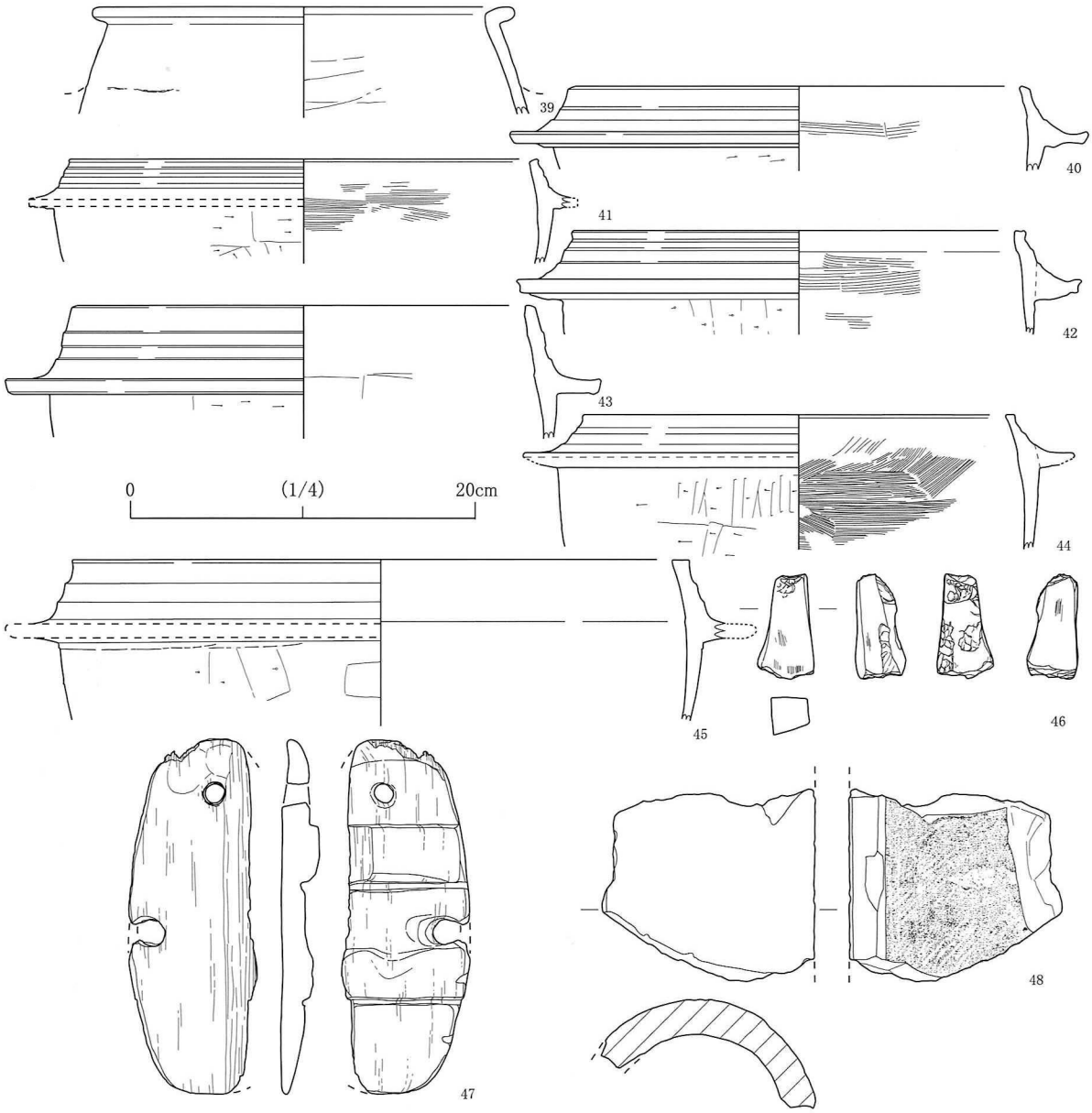
４）出土遺物（第４・５図）

いずれの遺物も第３層から出土しており種類ごとに報告する。

１～12は和泉型瓦器椀である。１・２・11・12は内面に格子状の暗文を施す。また、１～３の内面は密にミガキが施され、外面にもミガキを施す。12世紀後半。４～７は内外面ともにミガキを施すがやや間隔は広い。13世紀前半。８～10はさらにミガキの間隔が広く、外面にはほとんど見られない。また、口縁部を大きく外反させ、器高は低い。13世紀後半。13～18は土師器皿である。13～15は底部に突出のあるいわゆる「へそ皿」である。17は口縁部が玉縁状になる。18には内外面に煤の付着が認められる。いずれも14世紀中頃から後半である。19は端反りの青磁碗である。龍泉窯系と考えられる。15世紀代か。20～24は擂鉢である。20は備前焼で内面には１条のみ擂目が残る。21～23は東播系須恵器である。胴部から口縁部にかけて直線的に伸び、端部を上下へと拡張させ面を持つ。外面はケズリ調整である。24は瓦質土器である。25～29は東播系須恵器の鉢である。25は片口、それ以外は捏鉢である。いずれも12世紀末～13世紀中葉。30～35は甕である。30～33は短い頸部を持ち、口縁部を外方へと屈曲した器形で、外面には細かなタタキが施される。30は東播系須恵器、31～33は瓦質土器である。いずれも12世紀末～13世紀前半。34・35は口縁端部を外方へと屈曲させる器形である。外面はタタキを施す。いずれも瓦質土器で14世紀～15世紀のものであろう。36・37は瓦質土器の香炉である。36は口縁部に突帯状の受け口が取り付けられており、外面にはミガキが残る。37はやや大きめの香炉で内外面ともにミガキを施す。38は瓦質土器の浅鉢である。口縁上部には広い面を持つ。39～45は羽釜である。39～41は土師質土器、42～45は瓦質土器である。39は口縁部を外屈させる器形で鍔部分は剥離している。それ以外は長い口縁部に段を



第４図　横沼遺跡第１次出土遺物実測図



第５図　横沼遺跡第１次調査出土遺物実測図

持つ。いずれも 15 世紀代であろう。46 は砥石である。上下以外の４面すべてが使用されており、かなり使い込まれた印象を受ける。凝灰岩製。47 は下駄である。右側 1/3 程度が欠落している。鼻緒をかける部分の磨滅が激しく、またつま先の凹みからもかなり使い込まれ、破損したものと考えられる。48 は丸瓦である。凹面には布目とコビキ痕が認められる。また縁の部分には面取りが施される。

５）まとめ

出土した遺物はいずれも 12 世紀後半から 15 世紀のものである。先述のとおり調査区すべてが池または湿地であり、生活を示す遺構は検出できなかった。ただし、遺物に二次堆積による磨滅は認められず、いずれの遺物も近隣から廃棄されたものと推測される。調査地点の北や東でも確認調査を行っているが、堆積状況は近似しているにも関わらず、遺物は発見できていない。今回出土した遺物を廃棄した中世の集落は、調査地点よりもさらに南側に広がっていたと考えられる。近世以降は長瀬川より供給される砂が厚く堆積しており、砂を利用した畑を営んでいたと考えられる。

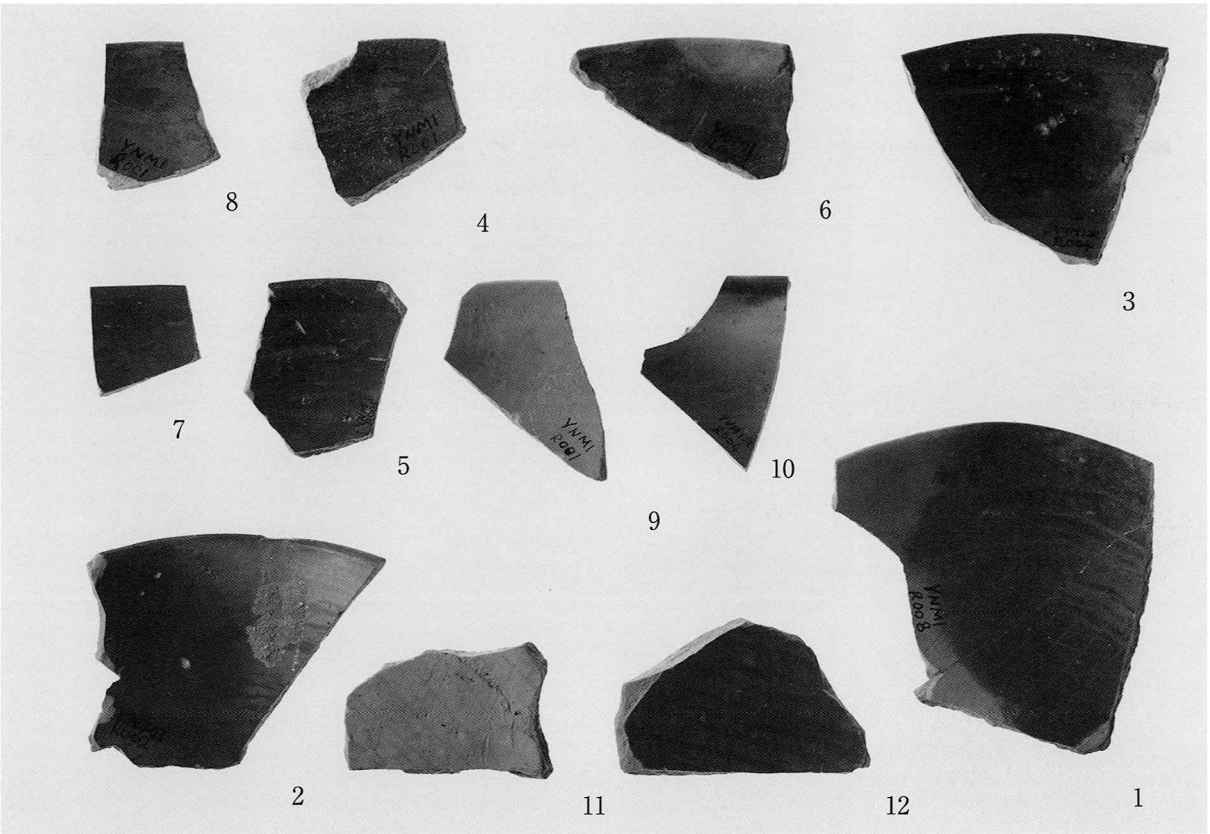
図版1　横沼遺跡第1次発掘調査　遺構

1．調査風景
（南西より）

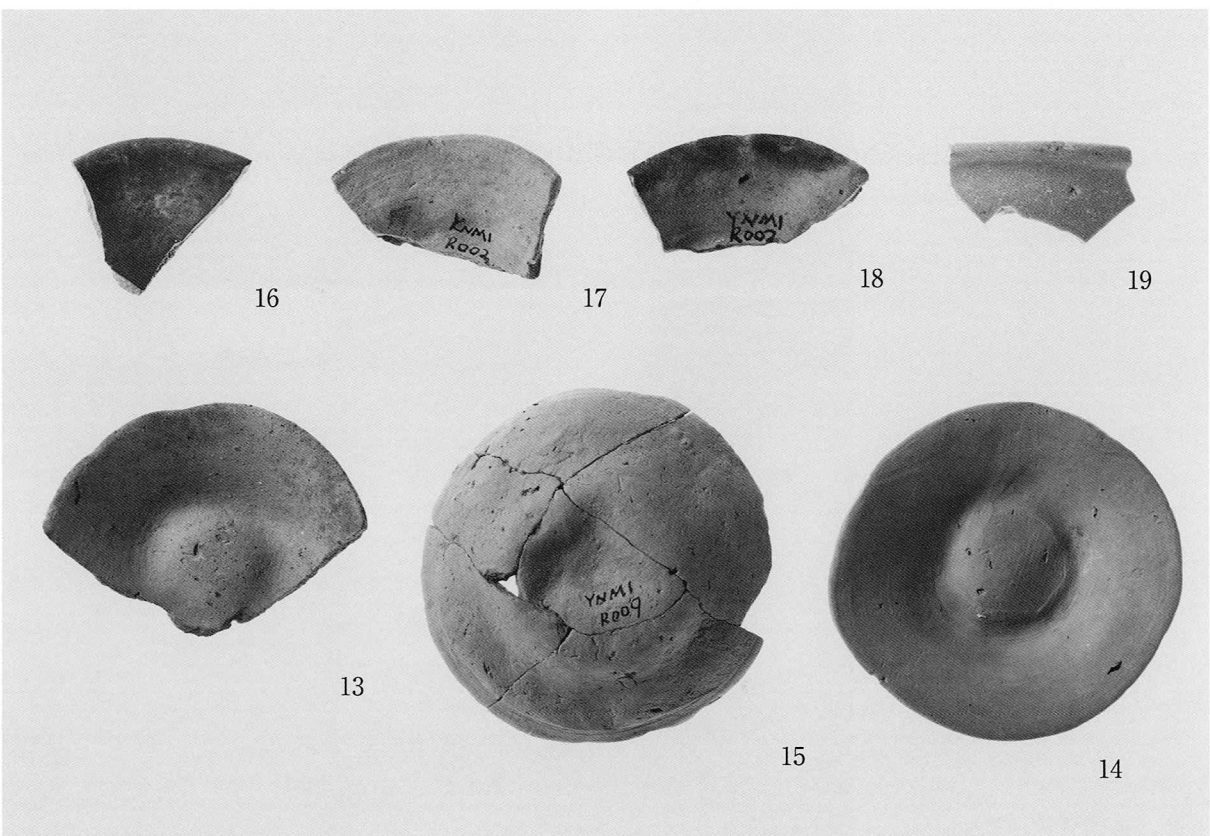
2．本調査箇所
（西より）

3．本調査箇所断面
（南東より）

図版2　横沼遺跡第1次発掘調査　遺物

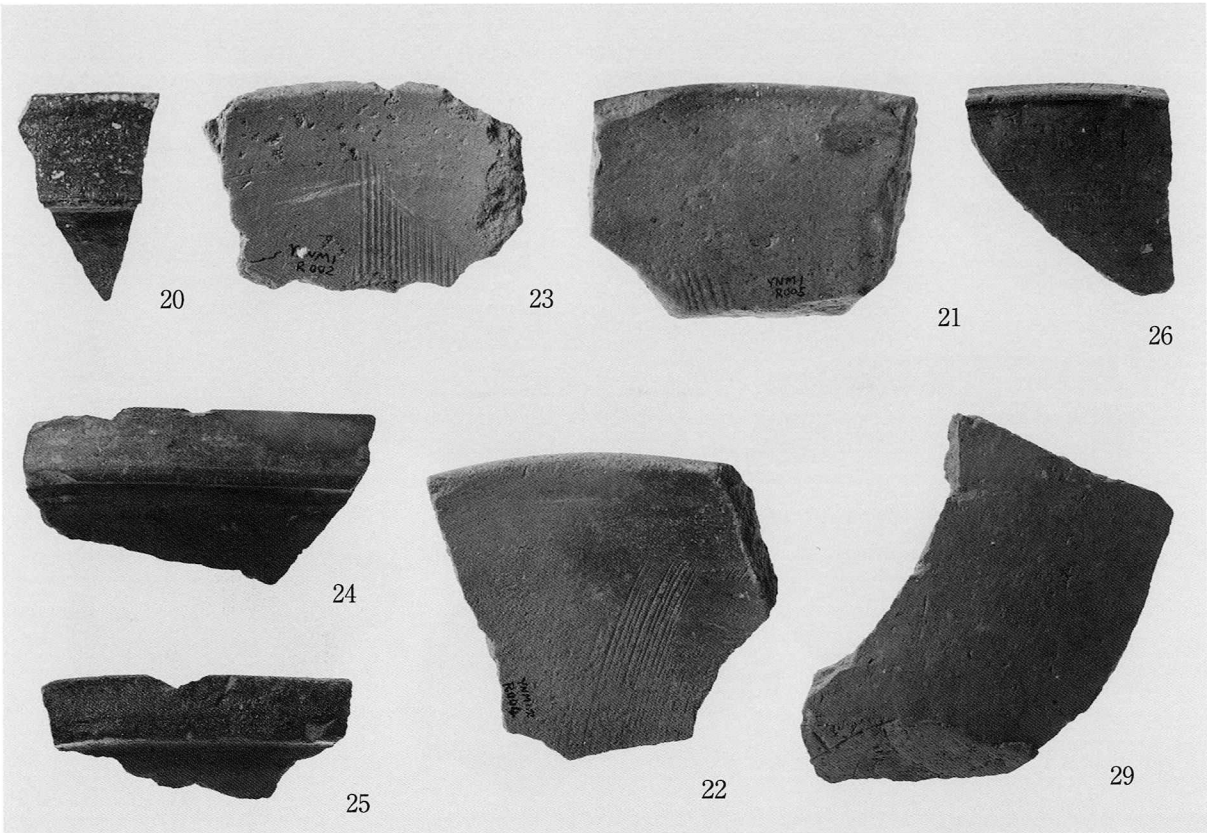


1．第3層出土　瓦器

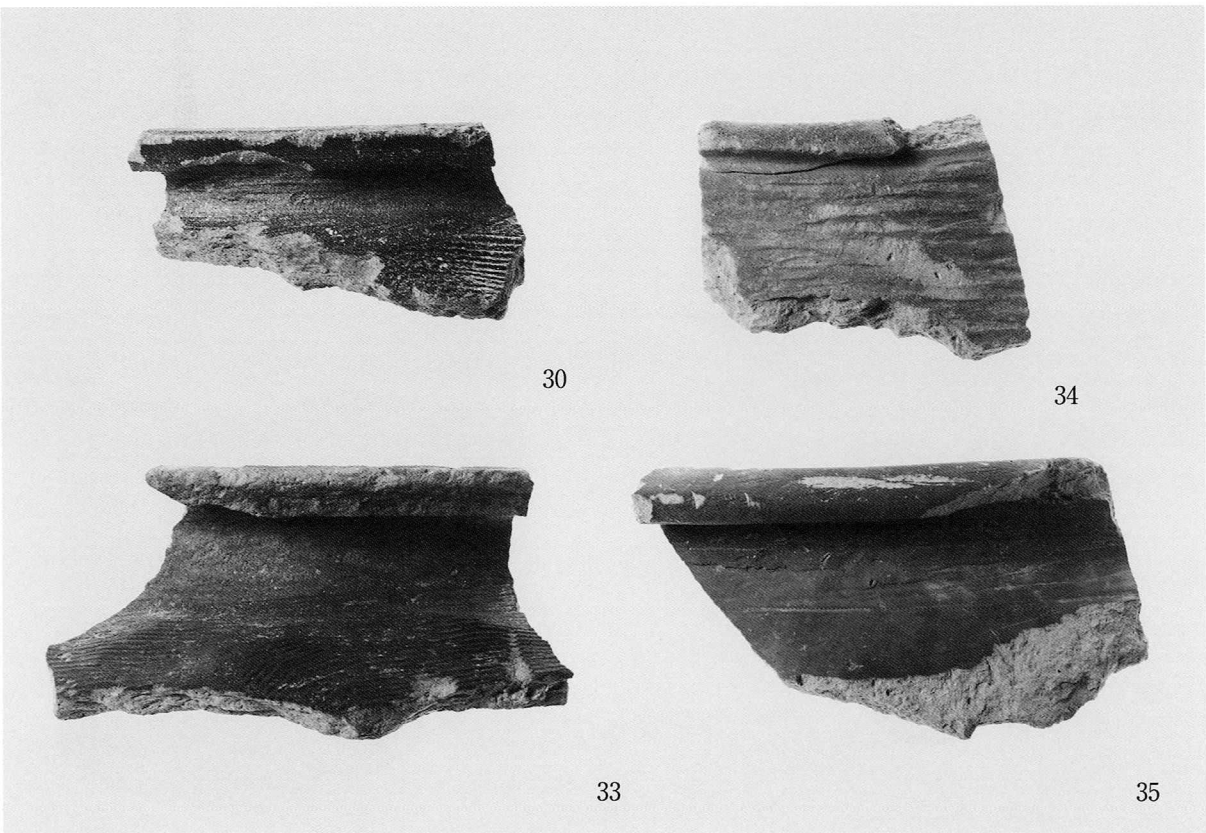


2．第3層出土　瓦器、土師器、青磁

図版3　横沼遺跡第1次発掘調査　遺物

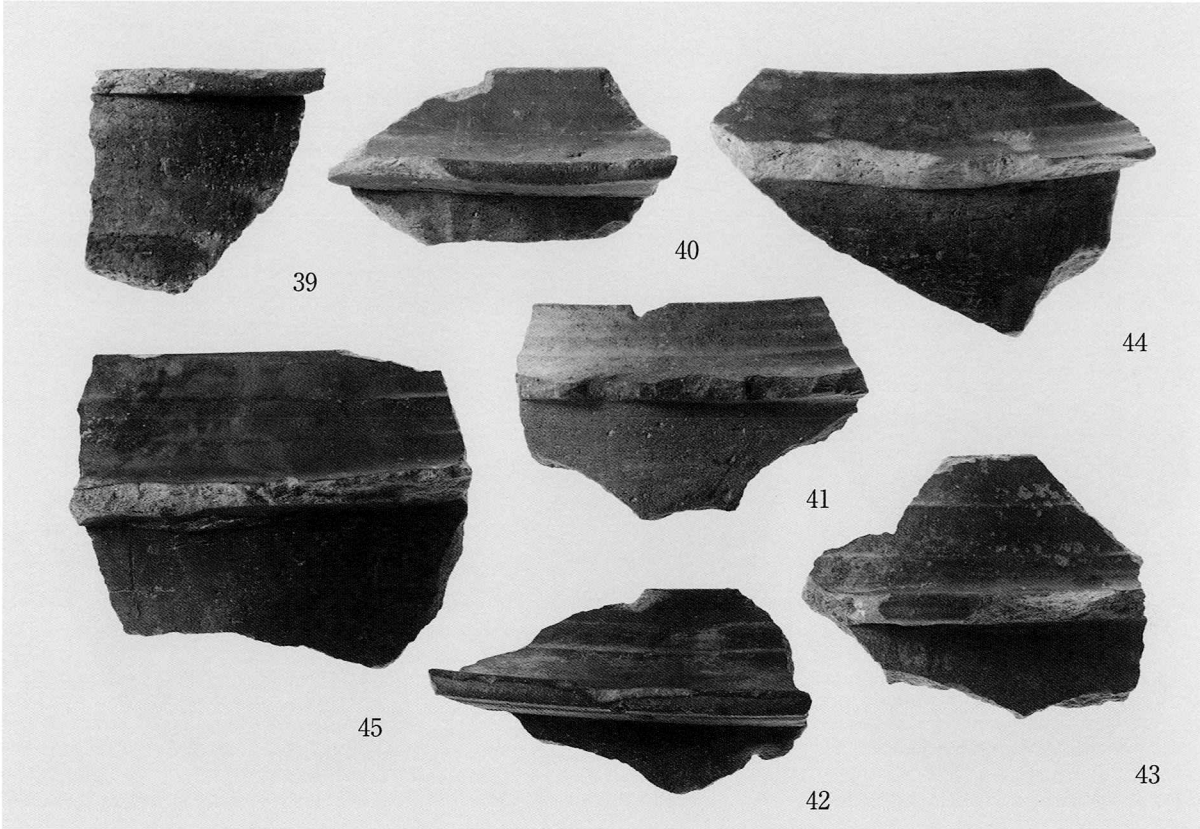


1．第3層出土　陶器、瓦質土器、須恵器

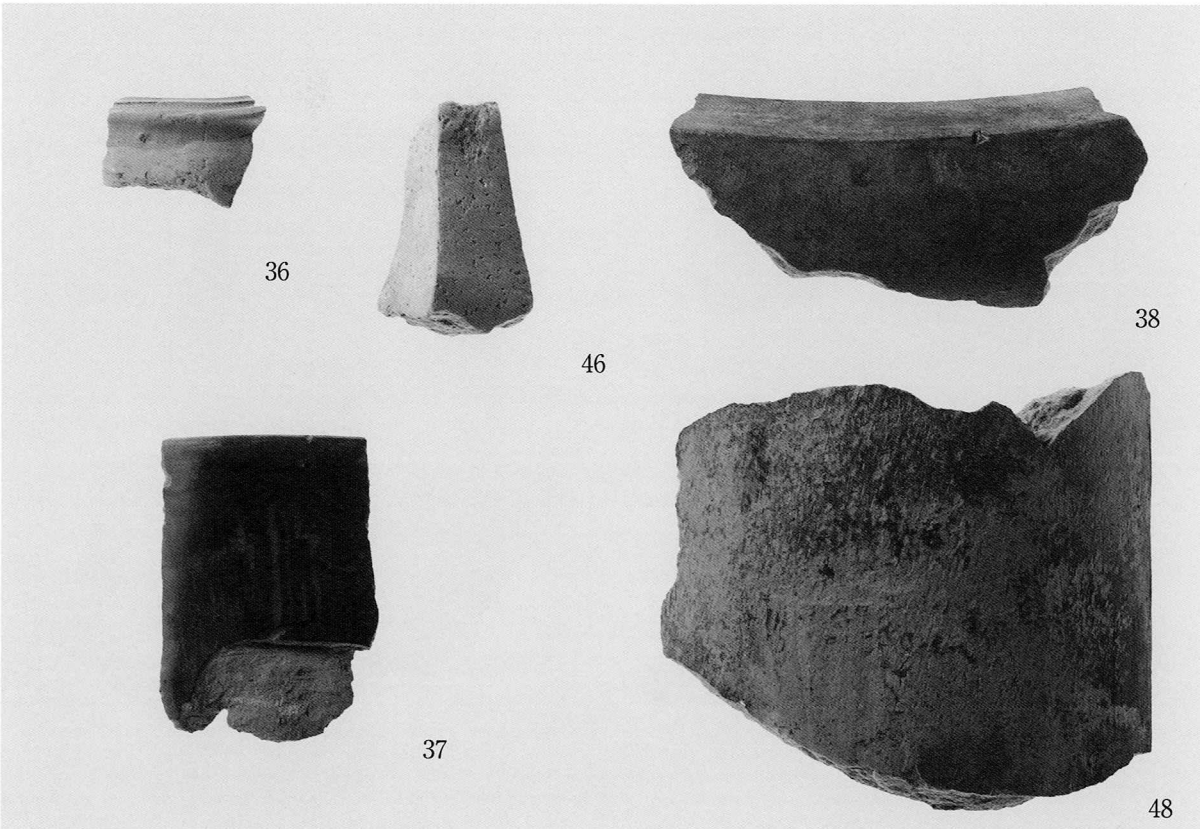


2．第3層出土　須恵器、瓦質土器

図版4　横沼遺跡第1次発掘調査　遺物



1．第3層出土　土師質土器、瓦質土器



2．第3層出土　瓦器、瓦質土器、砥石、瓦

第４章　若江遺跡第87（遺構編）・88次発掘調査

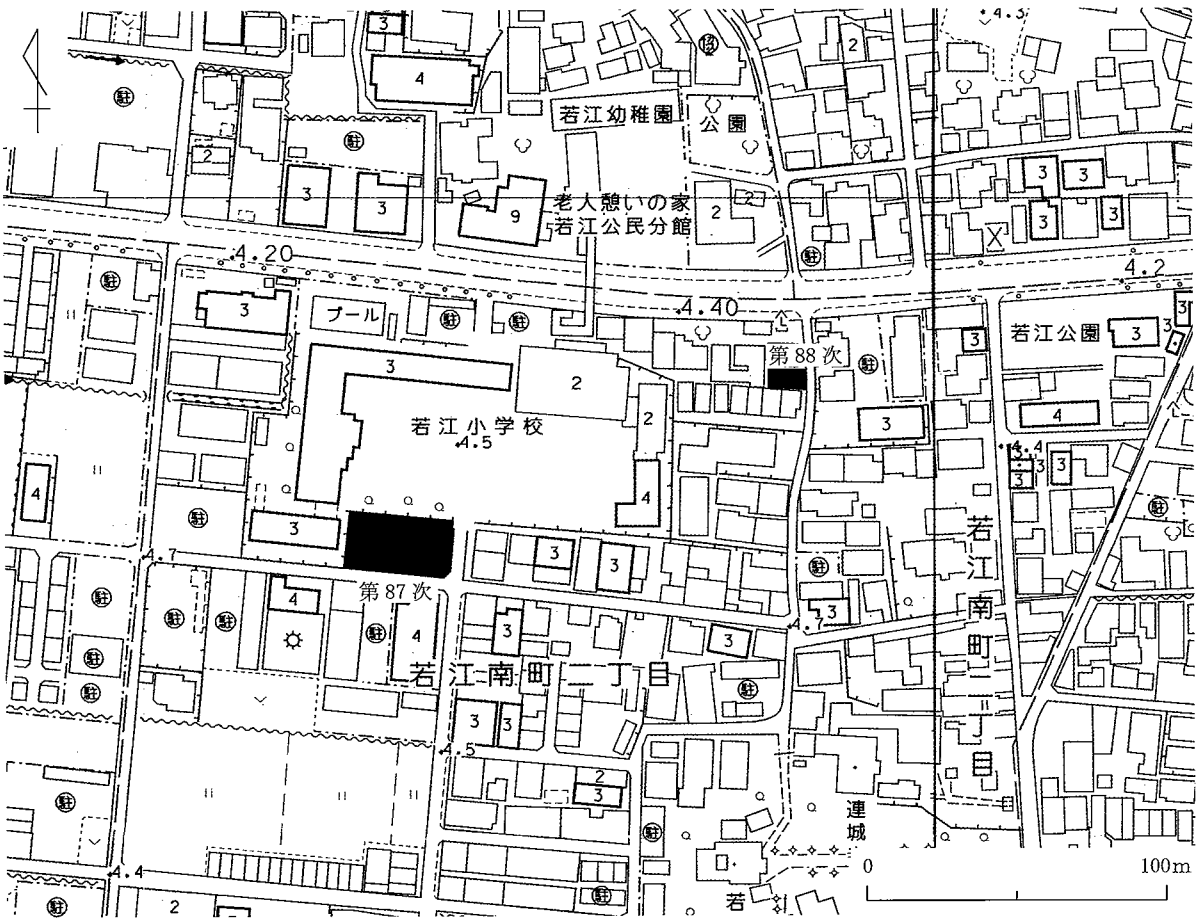
1) はじめに

若江遺跡は、東大阪市若江本町、若江北町及び若江南町にわたる弥生時代中期から江戸時代にかけての複合遺跡である。昭和９（1934）年に楠根川の改修工事に伴い、弥生土器、須恵器、土師器、瓦などが出土したことから、遺跡の存在が知られるようになった。昭和47（1972）年、東大阪市立若江小学校校舎増築に伴う第１次発掘調査が実施されて以降、今回の調査を含めて、88次の調査が行なわれてきた。遺跡は、東西約750m、南北約1,000mの範囲と推定され、現在の玉串川、楠根川やその旧河川の微高地上又は自然堤防上に位置していたと考えられている。

既往の発掘調査や文献史料によって、若江遺跡には各時代の集落跡のほか、奈良時代から平安時代の若江郡衙及び若江寺、室町時代から安土桃山時代にかけての若江城の存在が知られている。

若江寺は、飛鳥時代後期に創健され、室町時代まで存続したと考えられている古代寺院である。ただし、これまでの調査で寺域や建物に伴う遺構は確認されていない。

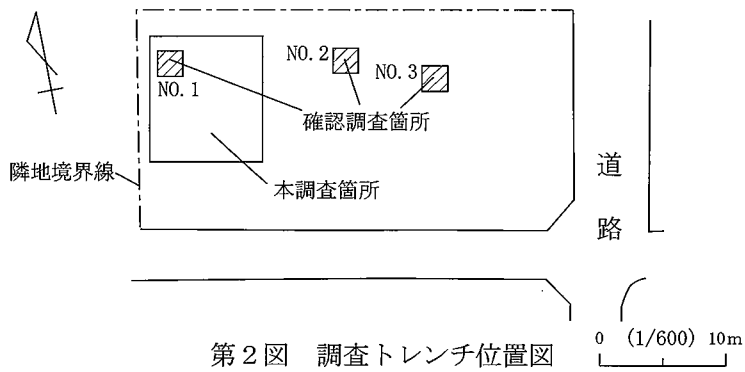
若江城は、室町時代初期に河内国守護、畠山基国によって築かれ、守護所とされていた時期（第１期）、安土桃山時代に三好義継によって築かれた城であった時期（第２期）、そして、その義継を滅ぼした織田信長が石山本願寺攻めの拠点としていた時期（第３期）に区分されている。第１期及び第２期の城館に関する遺構は、堀や井戸が見つかっているだけである。第３期の城は、現在の若江幼稚園を中心に東西約180m、南北約190mの主郭をもち、周囲に逆茂木の打たれた幅約15mから30m、深さ3.5m前後の内堀に囲まれていたことが、既往の発掘調査で判明している。いずれにしても、若江城は、織田信長が石山本願寺との和睦が成立した後に廃城となったようである。



第１図　調査位置図

2) 調査の経過

平成24年12月、東大阪市若江南町二丁目において、個人が施工する共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成25年12月17日に確認調査を実施した。調査の結果、確認調査トレンチNo.1のGL-1.0mから1.75mの間で土師器、瓦器椀、陶磁器、瓦、石製品を含む遺物包含層を検出した。この結果に基づき協議代理者と取扱いについての協議を行い、平成24年12月21日から翌平成25年1月26日にかけて発掘調査を行った。調査面積は、確認調査とトレンチと合わせて98㎡となった。



第2図　調査トレンチ位置図

3) 確認調査の結果

確認調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、確認調査トレンチ及び調査トレンチの位置は第2図、層位は以下のとおりである。

①確認調査トレンチNo.1

第0層　盛土。(GL- 0m～0.85m)

第1層　旧耕土。(～GL- 1m)

第2層　灰黄褐色（10YR4/2）細砂～5㎜程度の礫混じり粘土質シルト。(～GL-1.15m)

第3層　灰黄褐色（10YR5/2）中砂～2㎜の礫混じり粘土質シルト。炭化物含む。(～GL-1.25m)

第4層　にぶい黄褐色（10YR4/3）　粗砂混じり粘土質シルト。炭化物混じる。(～GL-1.3m)

第5層　褐灰色（10YR5/1）　粗砂～5㎜程度の礫混じり粘土質シルト。(～GL-1.5m)

第6層　褐灰色（10YR4/1）　細砂混じり粘土質シルト。7層からの遺構埋土。

第7層　黒色（10YR2/1）　粗砂～5㎜程度の礫混じり砂質粘土。(～GL-1.75m)

第8層　褐灰色（10YR5/1）　粘土質粗砂。(～GL-1.95m)

第9層　黄褐色（2.5Y 5/3）　粗砂（～GL-2.2m)

② 確認調査トレンチNo.2

第0層　盛土。(GL- 0m～-1.2m)

第1層　旧耕土。(～GL-1.25m)

第2層　褐灰色（10YR4/1）　細～粗砂混じり粘土質シルト。(～GL-1.45m)

第3層　灰黄褐色（10YR6/2）　粗砂。湧水。(～GL-1.75m)

第4層　灰黄色（2.5Y4/1）　細砂混じり粘土。(～GL-1.9m)

第5層　暗灰色（N3/1）　細砂混じり粘土。(～GL-2.0m)

第6層　暗オリーブ灰色（5GY4/1）　細砂混じり粘土。(～GL-2.3m)

③ 確認調査トレンチNo.3

第0層　盛土。(～GL-1.6m)

第1層　暗緑灰色（10GY4/1）　粘土。(～GL-2.0m)

第２層　緑黒色（10G1.7/1）　粘土。（～ GL-2.1m）
第３層　緑灰色（10G5/1）　細砂混じり粘土。（～ GL-2.3m）
第４層　緑灰色（5BG5/1）　粗～中砂。（～ GL-2.6m）

確認調査の結果、トレンチ No.1 で第２～８層で陶磁器、土師器、瓦器、瓦等、大量の遺物が出土したが、確認調査トレンチ No.2 及び No.3 では遺物及び遺構は検出されなかった。

発掘調査により、確認調査トレンチ No.1 は若江城に伴う堀跡の一部であることが判明した。第２層から４層は堀の埋土及び上面の整地層である。第７・８層は第４面遺構面を覆う砂層である。

確認調査により検出した遺物包含層は、中世から近世にかけての遺物を多く含んでいたことから、若江城関連の遺構等の存在が確認できた。このため、協議代理者と協議のうえ、埋蔵文化財の影響が考えられる範囲で南北 10m、東西９mで設定した。発掘調査期間は、平成 24 年 12 月 21 日～平成 25 年１月 26 日である。

4) 周辺地の調査状況

今回の調査は、市立若江小学校の南に接する土地で行われた。調査地は、若江城中心地と推定する若江幼稚園付近より南西へ約 1.5㎞の地点に位置する。付近の字切図によると、この若江小学校を含む調査地周辺は字「城」という名が残されていたことが分かっており、今回の調査でも、若江城に伴う遺構の存在が考えられた。

付近の発掘調査状況のうち、若江城の堀又は堀と考えられる遺構の検出状況をまず概観していく。調査区の南側道路を挟んだ土地で行われた第 35 次発掘調査では、弥生時代後期の水田畦畔、室町時代から江戸時代にかけての井戸と溝が検出されている。このうち東西方向の２条の溝は、16 世紀後半に埋没したとされ、若江城との関連が指摘された。

昭和 62 年に実施された、調査地の北方約 70mの地点で行われた若江小学校プール建設工事に伴う第 36 次調査では、南北方向に走る若江城に伴う堀跡が検出されており、堀の埋没時期は 16 世紀中頃と推定された。

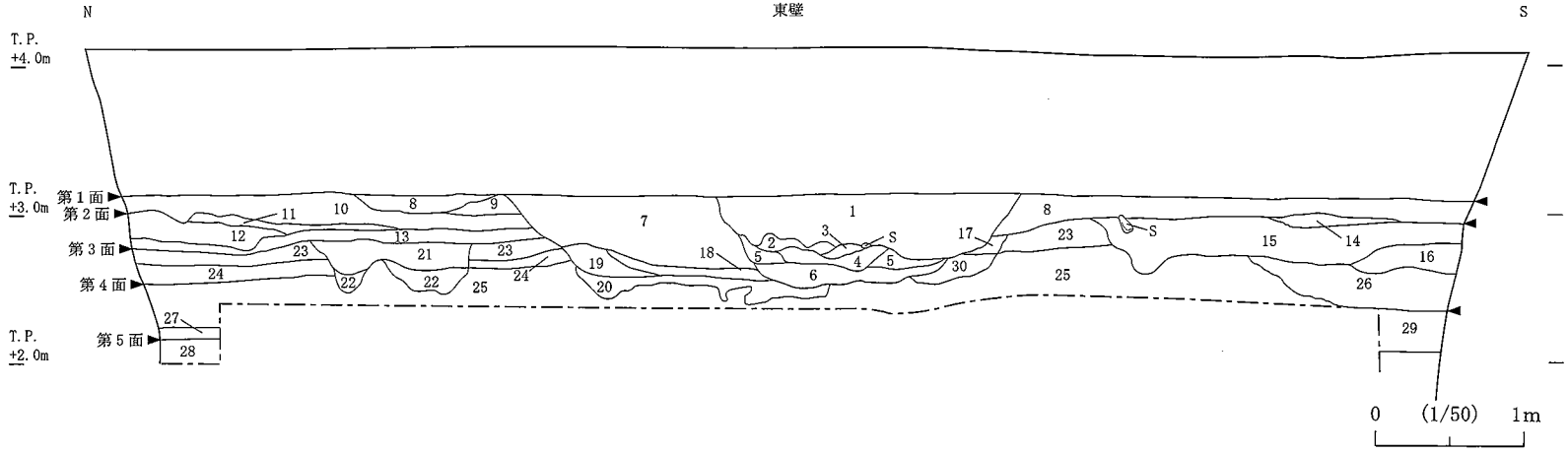
また、昭和 63 年に行われた府道四条長堂線拡張工事に伴う第 38 次発掘調査においては、第３期若江城主郭の四方を囲む内堀のうち、南西部分が検出された。この堀は、信長期の若江城の規模を考えるうえで重要な資料となっている。内堀の幅は 15 ～ 35mを測り、逆茂木をもっていたことが判明している。

5) 基本層序

今回の調査によって検出した基本層序は以下のとおりである。

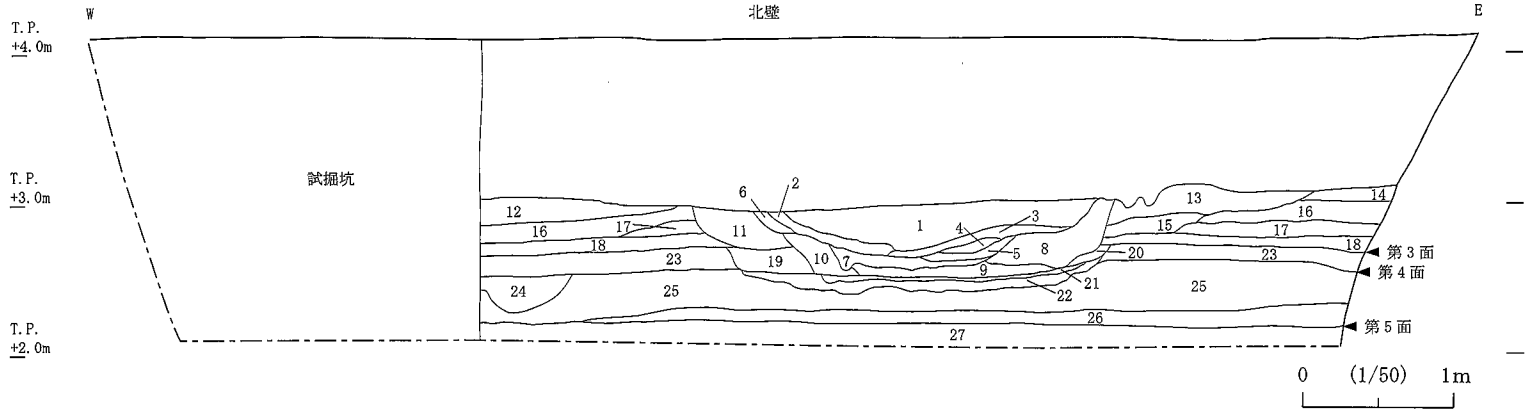
第Ⅰ層　現代の盛土及び旧耕土層直下の層を第Ⅰ層とした。第Ⅰ層は、暗灰黄色（2.5Y4/2）砂礫混じりシルト層（東壁８層、南壁１層、北壁 12・14 層）と暗褐色（10YR3/4）礫混じりシルト層（東壁 10 層）によって構成される。また、異なる時期に埋没した２条の溝（SD01 及び SD08）の同一遺構面で確認できることから、削平を受けたのち盛土が行われたことが分かる。堆積時期は、遺構埋土に含まれる遺物の時期から 16 世紀後半から 18 世紀にかけてである。第Ⅰ層上面を第１面とした。

第Ⅱ層　第Ⅰ層下の堆積層のうち、若江城の堀跡である SD10 及び落込み（SK11）と同一面をもつ層を第Ⅱ層とした。構成する堆積層は、北壁断面の 16 ～ 18 層及び東壁断面の 11 ～ 13 層である。室町時代後期の整地層で、シルトと砂層が交互又は断続的に堆積する状況がトレンチ



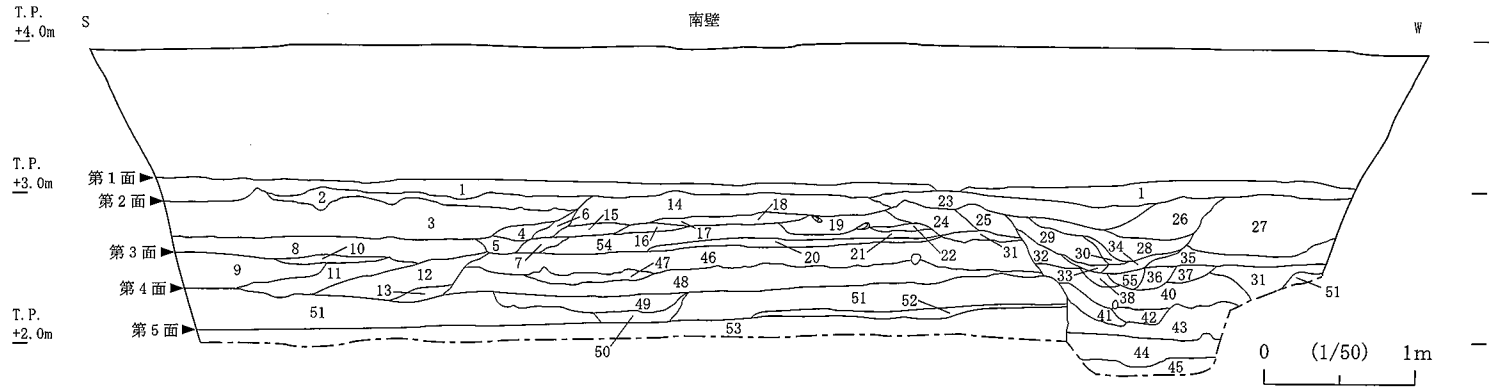
1．黒色(10YR2/1)中～粗砂混じり粘土質シルト　炭化物・土師器・焼土を全体に含む
2．灰オリーブ色(5Y4/2)中～粗砂混じり砂質シルト　炭化物含む
3．オリーブ黒色(5Y3/2)中～粗砂混じり砂質シルト　炭化物含む
4．暗オリーブ色(2.5Y 3/3)粗砂～3mm大の礫混じりシルト　炭化物含む
5．灰色(5Y4/1)細～粗砂混じり粘土質シルト　炭化物含む
6．灰オリーブ色(5Y4/2)粗砂～3mm大の礫含む　粘土質シルト　炭化物含む
7．黒褐色(10YR3/2)粗砂～2cm大の礫混じり粘土質シルト　土器含む
8．暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂～5mm大の礫混じり粘土質シルト
9．黒褐色(10YR3/2)粗砂混じり粘土質シルト
10．暗褐色(10YR3/4)5mm～1cm大の礫混じり粘土質シルト
11．暗褐色(10YR3/3)粗砂～5mm大の礫混じり粘土質シルト
12．灰黄褐色(10YR4/2)粘土質粗砂～中礫
13．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)1～3mm大の礫混じり粘土質シルト
14．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)1mm～1cm大の礫混じり砂質シルト
15．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)中～粗砂　灰オリーブ色(5Y4/2)細礫混じり粘土がブロック状に混入　土器含む
16．黒褐色(10YR3/1)中砂～2.3mm大の礫混じり粘土質シルト
17．黒褐色(2.5Y3/2)粘土質シルト
18．灰色(5Y4/1)粘土　炭含む
19．灰オリーブ色(5Y4/2)1～3mmの礫含む粘土質中～粗砂
20．暗灰黄色(2.5Y4/2)細～中砂混じり粘土
21．灰色(5Y4/1)細～中砂混じり粘土質シルト
22．黄灰色(2.5Y4/1)細～中砂
23．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘土質細砂
24．暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト質粘土　土師器片・炭化物少量含む
25．暗オリーブ色(5Y4/3)細～中砂
26．オリーブ黄色(5Y6/3)細～中砂
27．灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細砂　植物遺体含む
28．黒褐色(2.5Y3/1)粘土　上面に植物遺体残る
29．オリーブ黄色(5Y6/3)細～中砂
30．暗灰黄色(2.5Y4/2)2～3mmの礫混じり粘土質シルト　炭化物含む

第3図　東壁断面図



第4図　北壁断面図

1．黒色(10YR2/1)中～粗砂混じり粘土質シルト　炭化物・土師器・焼土を全体に含む　骨片含む
2．灰オリーブ色(5Y4/2)中～粗砂混じりシルト　炭化物・焼土含む
3．にぶい黄褐色(10YR4/3)細砂混じりシルト
4．灰黄褐色(10YR4/2)中砂混じり粘土質シルト
5．黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じりシルト　炭含む
6．暗灰黄色(2.5Y5/2)細～中砂混じりシルト　炭含む
7．黄灰色(2.5Y4/1)シルト
8．灰オリーブ色(5Y4/2)中～粗砂まじり細砂　シルト混じり　炭・焼土含む
9．にぶい黄褐色(10YR4/3)粗砂混じり粘土質シルト　骨片・炭含む
10．灰黄褐色(5YR4/2)粗砂混じりシルト　1～3cm大の礫・骨片・炭含む
11．暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混じりシルト　土師器含む
12．暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂混じりシルト
13．暗灰黄色(2.5Y4/2)5mm大の礫含む細砂混じりシルト
14．暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂混じりシルト　炭・焼土含む
15．暗オリーブ色(2.5Y 3/3)粗砂混じり細砂　やや粘土質
16．にぶい黄褐色(10YR4/3)シルト混じり中～粗砂
17．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)シルト
18．暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂を帯状に含むシルト
19．暗灰黄色(2.5Y5/2)中～粗砂わずかに含むシルト
20．黄褐色(2.5Y 5/4)細砂　シルト含む
21．黄灰色(2.5Y4/1)粘土質シルト　炭化物含む
22．灰色(5Y4/1)粘土質シルト　25をブロック状に含む
23．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粘土質細砂
24．灰色(5Y5/1)細砂混じりシルト　炭化物含む
25．暗オリーブ色(5Y4/3)細～中砂
26．灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細砂　植物遺体含む
27．黒褐色(2.5Y3/1)粘土　上面に植物遺体残る
28．黒色(5Y2/1)わずかに細砂含む粘土質シルト
29．オリーブ灰色(5GY5/1)細砂混じりシルト



1．暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂～5mm大の礫混じり　粘土質シルト
2．暗オリーブ色(2.5Y 3/3)中～粗砂
3．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)中～粗砂　灰オリーブ色(5Y4/2)細礫混じりがブロック状に混入　土器含む
4．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粗砂～3mm大の礫混じりシルト
5．黒褐色(2.5Y3/2)粗砂混じり粘土質シルト
6．黒褐色(2.5Y3/2)2～5mm大の礫混じり粘土質シルト
7．暗灰黄色(2.5Y4/2)細～中砂混じりシルト
8．黒褐色(10YR3/1)中砂～2.3mm大の礫混じり粘土質シルト
9．灰色(5Y4/1)2～5mm大の礫混じりシルト質中～細砂
10．灰色(5Y4/1)中～細砂混じり粘土質シルト
11．黒褐色(2.5Y3/1)細砂含む粘土
12．黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土
13．黄灰色(2.5Y4/1)細砂　51混じり
14．暗灰黄色(2.5Y4/2)細砂1～3cm大の礫混じり粘土質シルト
15．黒褐色(2.5Y3/2)1～2mmの礫混じり粘土質シルト
16．暗灰黄色(2.5Y4/2)0.5～1mmの礫混じり粘土質シルト
17．暗灰黄色(2.5Y4/2)1～2mmの礫混じり粘土質シルト
18．暗褐色(10YR3/3)1～2mmの礫混じりシルト　炭化物含む
19．暗灰黄色(2.5Y4/2)5mm～1cmの礫混じりシルト　炭化物含む
20．黒褐色(2.5Y3/2)1～3mmの礫混じり粘土質シルト
21．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)細砂　1～3mmの礫混じりシルト質
22．黒褐色(2.5Y3/2)細砂混じり粘土質シルト
23．暗灰黄色(2.5Y4/2)3mm～2cm大の礫混じり砂質シルト
24．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)粗砂～5mm大の礫混じりシルト
25．暗褐色(10YR3/3)粗砂～5mm大の礫混じりシルト
26．オリーブ褐色(2.5Y 4/3)3～5mm大の礫混じり粘土質シルト
27．灰オリーブ色(5Y4/2)2～5mm大の礫混じり粗砂～中礫
28．暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂～細礫混じり粘土質シルト　炭化物含む
29．黒褐色(10YR3/2)細礫混じり中～粗砂　炭化物含む
30．灰色(5Y5/1)粘土質細砂
31．オリーブ褐色(2.5Y 4/4)3～5mmの礫混じり粘土質シルト
32．灰色(5Y5/1)1～3mmの礫混じり粘土質細砂　炭化物含む
33．灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細砂　炭化物含む
34．灰色(5Y5/1)粘土質細砂
35．黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土
36．灰色(5Y5/1)細砂混じり粘土
37．灰オリーブ色(5Y5/2)細砂
38．灰色(5Y4/1)粘土
39．黒褐色(2.5Y3/2)粗砂～中礫
40．オリーブ黒色(5Y3/1)細～中砂混じり粘土
41．黒褐色(2.5Y3/2)細～中砂混じり粘土質シルト
42．黒褐色(2.5Y3/2)細～粗砂混じり粘土質シルト
43．灰オリーブ色(5Y4/2)細砂　暗青灰色(5B4/1)粘土混じり
44．暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土
45．暗緑灰色(5G4/1)粘土質細砂
46．灰色(5Y5/1)3～5mmの礫混じりシルト質粘土
47．灰色(5Y5/1)3～5mmの礫混じり砂質粘土
48．黄灰色(2.5Y4/1)5mm～2cm大の礫混じりシルト質細砂　粘土がブロック状に混入
49．暗緑灰色(7.5GY3/1)粘土質細砂
50．青灰色(5BG6/1)シルト質細砂
51．オリーブ黄色(5Y6/3)細～中砂
52．褐色(10YR4/4)粘土質細砂
53．黒褐色(2.5Y3/1)粘土　上面に植物遺体残る
54．黒褐色(10YR3/2)粗砂　2～5mmの礫混じり粘土質シルト
55．灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質粗砂

第5図　南壁断面図

内で確認できた。第Ⅱ層上面を第２面とした。

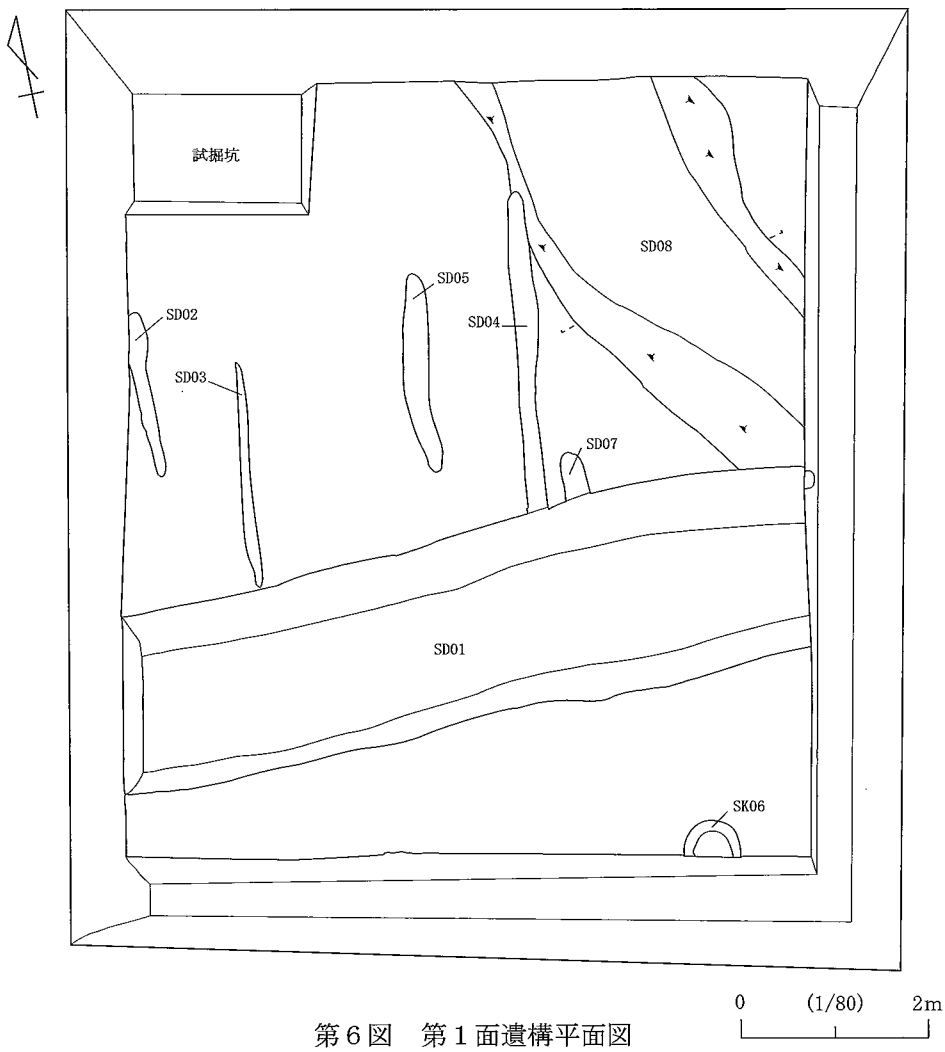
第Ⅲ層　第Ⅱ層下の、オリーブ褐色粘土質細砂層で構成される層を第Ⅲ層とし、その上面を第３面とした。確認された遺構は、溝（SD12、SD15）、落込み（SK13）、井戸（SK14）、ピット（SP15）である。

第Ⅳ層　暗オリーブ色（5Y4/3）細～中砂をベースとする層である。上面を第４面とした。若江遺跡内で多く確認できる堆積層で、庄内期～奈良時代の遺物が検出される。確認された遺構は、小規模な溝が２条と、５つのピットである。

第Ⅴ層　黒褐色（2.5Y3/1）粘土層を第Ⅴ層とした。確認調査では検出されなかったが、弥生時代後期の遺物が出土した。このため、追加調査トレンチを設定し、第５面とした。検出された遺構は、水田に伴う畦畔及び足跡状の遺構である。

6）遺構の概要

以下、各遺構面の状況を見ていく。なお、今回の調査で出土した遺物の報告は来年度に行う。



第６図　第１面遺構平面図

①第１面（近世）

検出した溝は、東西方向に延びる溝（SD01）とトレンチ北面からトレンチ東面へと南西方向に伸びる溝（SD08）である。

まず、調査区の盛土及び旧耕作土下の第１面では、溝、鋤溝及び土坑を検出した。

SD01は、トレンチ中央を東西に横断する、最大検出幅約2.2m、最大深度0.6mを測る。ただし、遺構上面は埋没後に削平を受けていることが東側及び西側壁断面より確認できた。

出土遺物は主に、中世から近世の瓦、陶磁器、土師器、瓦器、須恵器、弥生土器などである。出土遺物より、埋没時期は18世紀代と考えられる。

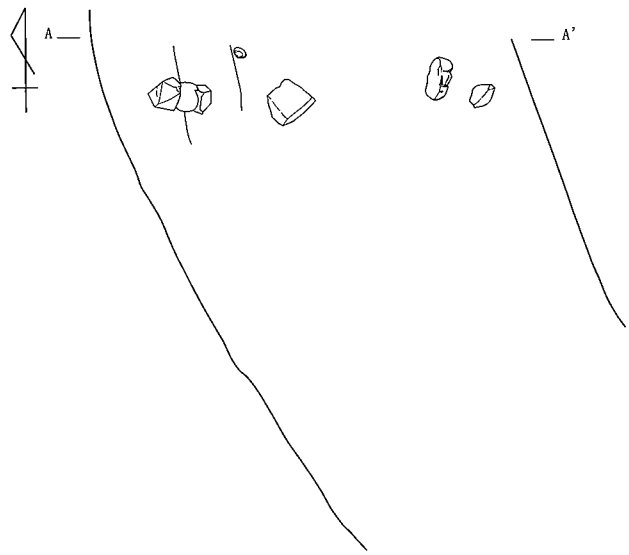
SD02～05・07はそれぞれ上面の耕作による鋤溝である。出土遺物は、SD02及び03から平瓦及び土師器の小片が出土しているが、いずれも時期を特定できるものではなかった。

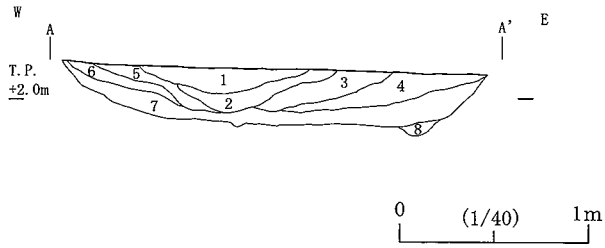
SD08は、トレンチ北壁中央付近を西肩として、トレンチ東壁へと伸びる溝である。最大検出幅は、2.15m、深度は0.3mである。

堆積状況により、７層に分層できた。

第１層は、灰色（5Y4/1）細～中粒砂混じりシルトで、焼土・炭化物・粘土をブロック状に含んだ層である。

第２層は、灰色（5Y5/1）細粒砂含む砂混じり粘土質シルトで、粘土をブロック状に含む。





1．灰色(5Y4/1)細～中粒砂　砂混じりシルト
　焼土・炭化物・粘土をブロック状に含む
2．灰色(5Y5/1)細粒砂含む　砂混じり粘土質シルト
　粘土をブロック状に含む
3．灰色(5Y5/1)シルト含む　砂混じり粘土質シルト
　粘土をブロック状に少量含む
4．暗灰黄色(2.5Y5/2)シルト～細　砂混じり粘土質シルト
　焼土を含む
5．暗灰黄色(2.5Y5/2)細～粗含む　砂混じり粘土質シルト
　粘土をブロック状に含む
6．灰色(5Y5/1)細～中砂　砂混じり粘土質シルト
　焼土を含む
7．暗灰黄色(2.5Y4/2)シルト～細砂混じり粘土質シルト
　炭化物・粘土をブロック状に全体含む

第７図　SD08遺構内遺物出土状況

第３層は、灰色（5Y5/1）砂混じり粘土質シルトで、粘土をブロック状に少量含んだ層である。

第４層は、焼土を含んだ暗灰黄色（2.5Y5/2）シルト～細砂混じり粘土質シルト層である。

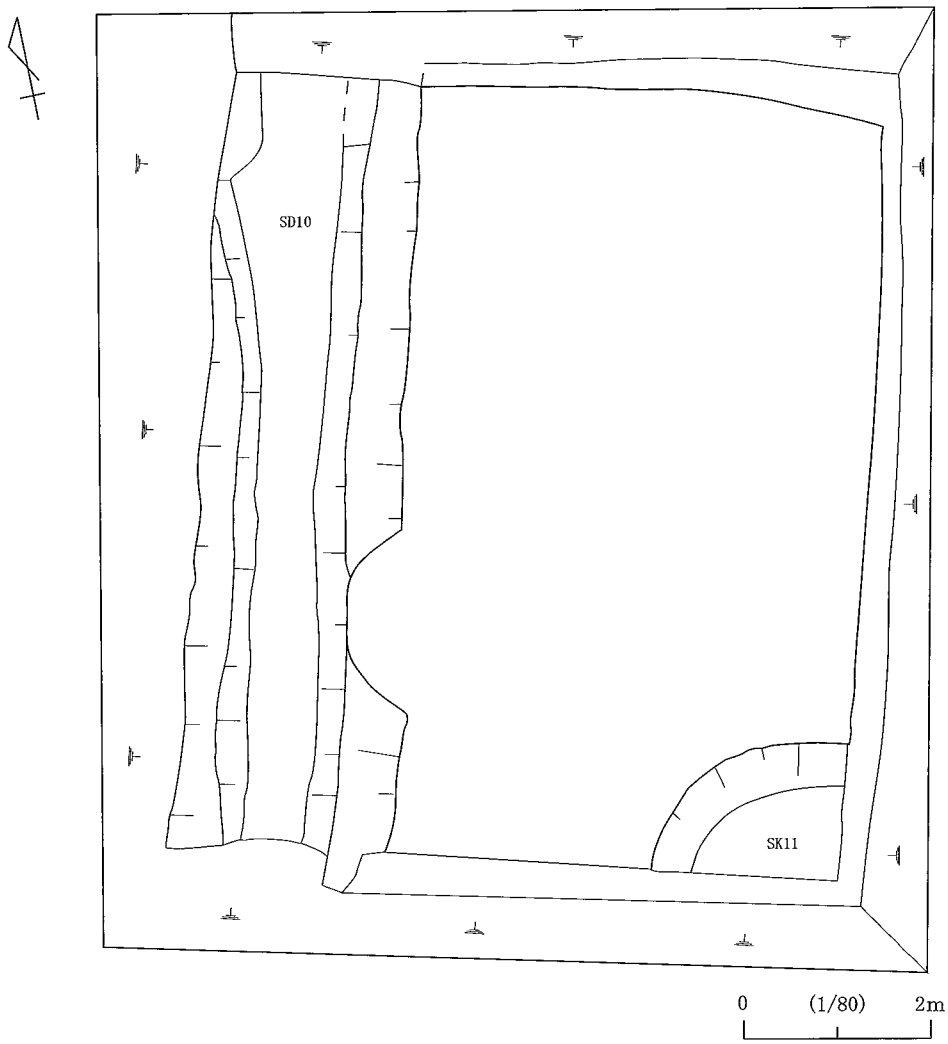
第５層は、暗灰黄色（2.5Y5/2）細～粗砂を含む砂混じり粘土質シルトに粘土をブロック状に含んだ層である。

第６層は、焼土を含んだ灰色（5Y5/1）細～中砂混じりの粘土質シルトである。

第７層は、全体に炭化物・粘土をブロック状に含んだ暗灰黄色（2.5Y4/2）細砂混じり粘土質シルト層である。SD08下面全体を覆う堆積層である。同層上面より五輪塔が２基出土した。

出土遺物は、五輪塔、瓦（平・丸瓦、軒丸瓦）、弥生土器壺・高坏、須恵器杯蓋・捏鉢、瓦器椀、土師器皿・羽釜、瓦質土器擂鉢、陶磁器等である。

軒丸瓦は巴文のものであったが時期は特定できなかった。近世の特徴をもつ土師器皿を確認したこ



第８図　第２面遺構平面図

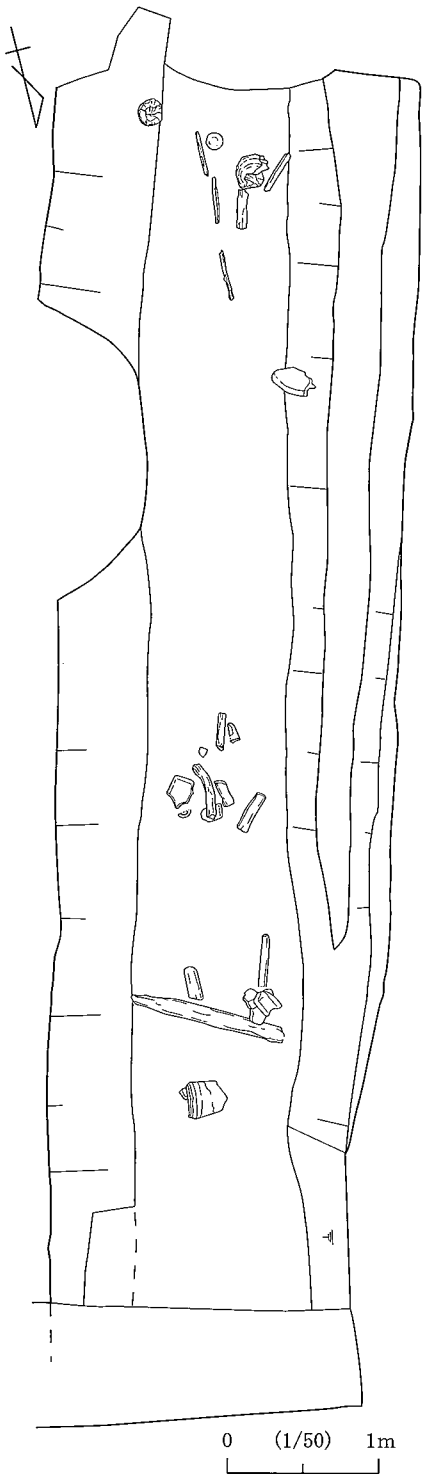
とから、SD08 は、17 世紀代には埋没していたと考えられる。

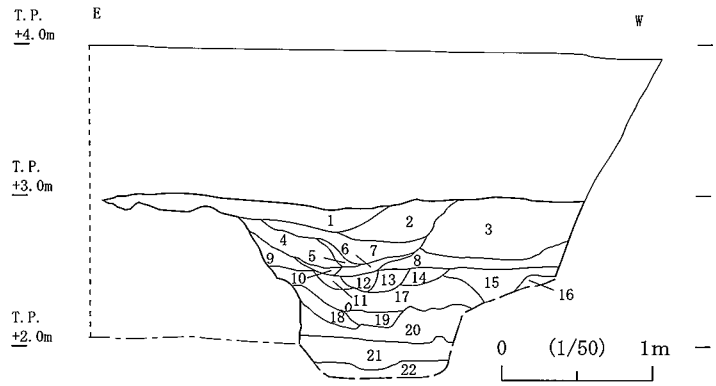
SD01 及び SD08 はいずれも後世の削平により遺構面が同一面であるが、切り合い関係により、SD08 埋没後に SD01 が掘られ利用されていたことを確認した。

②第２面（室町時代後期～近世）

北壁断面の 16 ～ 18 層及び東壁断面の 11 ～ 13 層により構成される面が第２面である。第２面を構成する層からの出土遺物は、弥生時代後期の甕、古墳～奈良時代の須恵器高坏、土師器皿・甕・羽釜、瓦器椀、瓦質土器火鉢・擂鉢、平・丸瓦、陶磁器である。このうち陶磁器は 17 世紀代の所産である。第２面で検出した遺構は、溝（SD10）及び落込み（SK11）である。

SD10 は調査トレンチ西端を南北に走る溝である。ただし、トレンチ北西隅付近で西に振れている。検出最大幅は、2.48m、深度は 1.1mを測る。掘り形は、西肩は２段で落ちている状況が確認できた。２段目の肩は、上面から約 0.7m下にあり、第Ⅳ層を構成する砂層を 40cm程度の平坦面として利用していた。ただし、肩の部分上面に何らかの施設を用いていたような痕跡は確認できなかった。想定で





1. 暗灰黄色(2.5Y4/2)3mm～2cm大の礫混じり砂質シルト
2. オリーブ褐色(2.5Y 4/3)3～5mm大の礫混じり粘土質シルト
3. 灰オリーブ色(5Y4/2)2～5mm大の礫混じり粗砂～中礫
4. 黒褐色(10YR3/2)細礫混じり中～粗砂　炭化物含む
5. 灰色(5Y5/1)粘土質細砂
6. 灰色(5Y5/1)粘土質細砂
7. 暗灰黄色(2.5Y4/2)粗砂～細礫混じり粘土質シルト　炭化物含む
8. 黄灰色(2.5Y4/1)粗砂混じり粘土
9. 灰色(5Y5/1)1～3mmの礫混じり粘土質細砂　炭化物含む
10. 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細砂　炭化物含む
11. 灰色(5Y4/1)粘土
12. 灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質粗砂
13. 灰色(5Y5/1)細砂混じり粘土
14. 灰オリーブ色(5Y5/2)細砂
15. オリーブ褐色(2.5Y 4/4)3～5mmの礫混じり粘土質シルト
16. オリーブ黄色(5Y6/3)細～中砂
17. オリーブ黒色(5Y3/1)細～中砂混じり粘土
18. 黒褐色(2.5Y3/2)細～中砂混じり粘土質シルト
19. 黒褐色(2.5Y3/2)細～粗砂混じり粘土質シルト
20. 灰オリーブ色(5Y4/2)細砂　暗青灰色(5B4/1)粘土混じり
21. 暗緑灰色(5G3/1)シルト質粘土
22. 暗緑灰色(5G4/1)細砂粘土質

第９図　SD10 遺構平面・南壁断面図

きる利用方法としては、溝の維持管理等の目的のために利用されたものであろうか。

SD10 の埋没は、大きく３時期に分けられる。遺構断面図より、掘り形当初の形が徐々に 21・22 層の砂層又は粘土層が堆積した時期。次いで、二段目西肩部分の砂層が崩落などにより混入されたと考えられる 18 ～ 20 層により埋没していった時期。そして、最終的に西肩の段を利用しない状態から、1 ～ 17 層を埋土として埋められた時期の三時期が確認できた。出土遺物より、最終的な埋没時期は、南壁の断面より出土した唐津陶器皿底部の年代観より、16 世紀後半～ 17 世紀前半と確認できた。出土遺物は、埋土より陶磁器、14 ～ 16 世紀代の土師器皿・羽釜、巴文軒丸瓦等が、堆積層より、12 ～ 13 世紀代の瓦器椀、瓦質土器擂鉢、飛鳥～奈良時代の重弧文軒平瓦、古墳時代の須恵器甕・高杯、弥生時代後期の高杯など出土した。遺物は、多種・多時期に及び、特に若江寺に関連すると考えられる軒平瓦が出土したことは若江寺の場所を考える上で重要な資料といえる。

また、トレンチ南壁断面図より、第７・14 ～ 22・54 層が SD10 の東側で第Ⅲ層上面に土塁状に積

まれていた状況が確認できた。これは、SD10を掘削した際の土を横に積み上げていったものと考えられる。したがって、南壁断面で第2面を構成する層は、第9～12層、第18～22層であると考えられる。

SK11は落ち込みである。検出最大幅は、2.1m、深度は0.27mである。トレンチ南東隅のため、遺構の詳細は不明である。

埋土は、南壁断面の第2層暗オリーブ色（2.5Y 3/3）中～粗砂、第3層オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中～粗砂、第8層黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト、第10層灰色（5Y4/1）中～細砂混じり粘土質シルトと、東壁断面の第14層オリーブ褐色（2.5Y 4/3）1㎜～1㎝大の礫混じり砂質シルト、第15層オリーブ褐色（2.5Y 4/3）中～粗砂（南壁第3層と同じ）、第16層黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト（南壁第8層と同じ）である。

出土遺物は、14世紀代の土師器皿・羽釜、12世紀から13世紀にかけての瓦器椀、平安時代～中世にかけての平瓦、弥生時代後期の壺・甕などが出土した。SK11は、先述した土塁状の堆積層を切る形で検出されたため、埋没時期はSD10と同時期かそれ以降と考えられるが、出土した遺物からは埋没時期を特定できなかった。

東及び南壁断面の観察より、SK11の下層にも落ち込み状の遺構があることが確認できた。両者は同一の遺構でほぼ同時期に埋没した可能性も考えられたが、下層遺構の埋土は、南壁断面の第Ⅲ層を構成する第46層と同一レベルで堆積するため、第Ⅲ層の時期にいったん埋没した後、土塁状の高まりに伴う落ち込みとして機能していたと考えられる。

SD10の性格を考える上で、参考となる調査が、先述の昭和62年に実施された、若江小学校プール建設工事に伴う第36次調査である。当調査では、D地区にて南北方向に走る溝1を検出しており、これが若江城に伴う堀であると考えられた。検出された堀は、東西幅3.5m、深度1.1mを測る。埋土は、下層の堆積土（暗黄灰色粘土質シルト及び暗緑灰色シルト質粘土）と上層の埋没土からなる。このうち、上層の埋没土からは、土師器皿・羽釜、瓦、備前擂鉢、磁器の小破片が出土している。また、堀は、両肩が2段で落ちる形を呈しており、上面から約0.8m下に段を形成している。地図上では、36次調査で検出されたD地区溝1は、今回の調査で検出されたSD10の延長線上にあり、両者は同一の溝である可能性も考えられる。

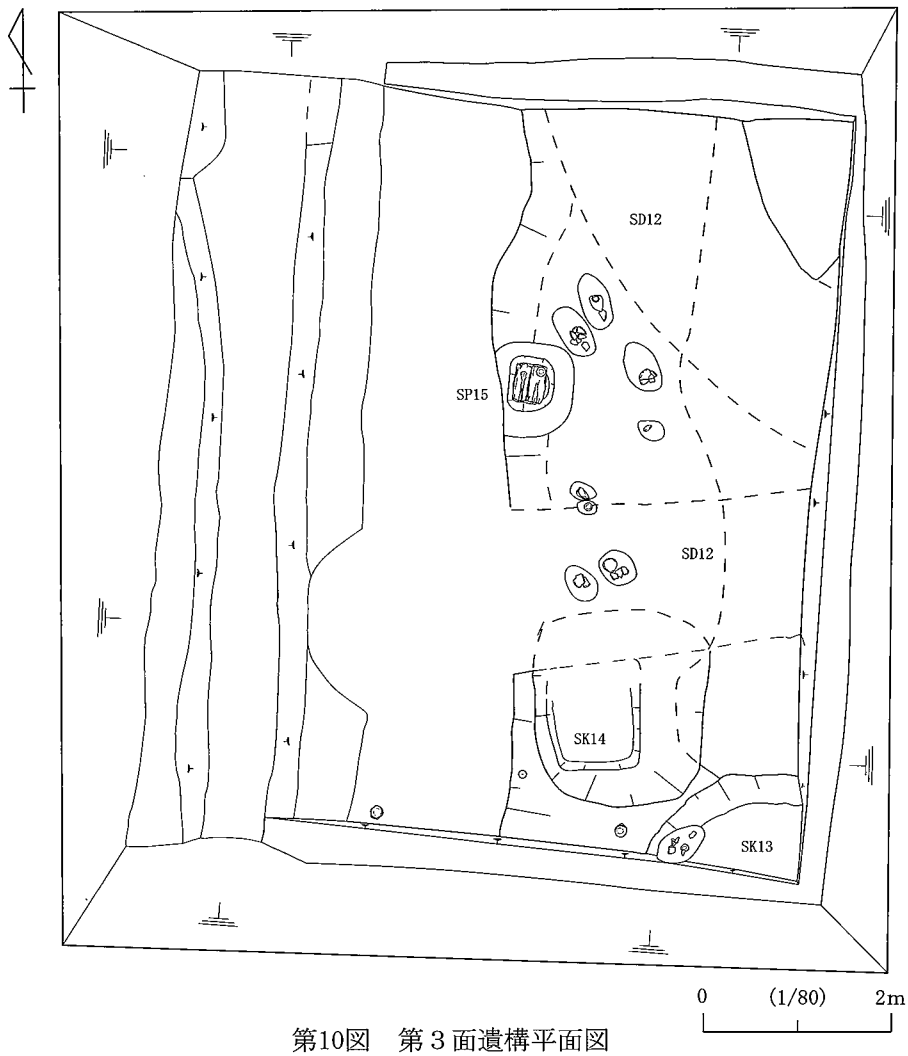
③第3面（鎌倉時代）

第3面は、鎌倉時代の遺構を伴う面である。検出された遺構は、溝が2条（SD12とSD16）、落込み（SK13）、井戸（SK14）、そして土坑（SP15）である。

SD12は、トレンチ中央部を南北に走る溝である。検出最大幅は、2.25m、深度は0.5mである。また、SD12は、埋没後に井戸（SK14）が掘られたことがわかった。

SD12からの出土遺物は、弥生土器の小破片、須恵器捏鉢、瓦器椀・皿、土師器皿・羽釜、瓦小破片などである。このうち、瓦器椀が12世紀後葉の和泉型瓦器椀の特徴を有していることから、埋没時期も同様の時期に求めることができる。

埋土は、SD12とSK14の切り合い部の断面（図11）より、第9層オリーブ色（5Y4/2）細粒砂～礫混じり粘土、第10層灰色（7.5Y4/1）砂質粘土、第11層灰色（7.5Y4/1）粘土、第13層灰オリーブ色（5Y4/2）細～中砂混じりシルト質粘土、第14層粘土ブロック状に混じる黄灰色（2.5Y4/1）細～中粒砂、第15層灰オリーブ色（5Y4/2）細粒砂混じり粘土質シルト、第16層オリーブ黒色（7.5Y3/2）細粒砂混じり粘土、第17層灰色（7.5Y4/1）細粒砂混じり粘土、第18層灰色（7.5Y4/1）粘土である。



第10図　第３面遺構平面図

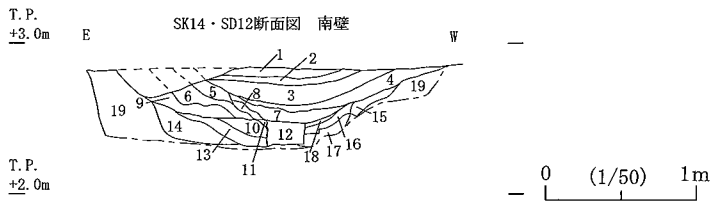
トレンチ北壁断面では、SD12の断面は確認できなかった。これは、SD08の開削に伴い、SD12の埋土が撹乱を受けたためである。

SD16は、トレンチ南辺を東西方向に走る溝である。検出されたのは北肩のみである。検出深度は、0.2mである。

断面観察によって確認した埋土は、灰色（5Y3/1）細砂混じりシルトである。埋土には、瓦小片が含まれたが、時期は不明である。また、トレンチ南壁断面図のうち、第46層灰色（5Y5/1）礫混じりシルト質粘土、第47層灰色（5Y5/1）３～５㎜の礫混じり砂質粘土、第48層黄灰色（2.5Y4/1）礫混じりシルト質細砂もSD16の埋土である。

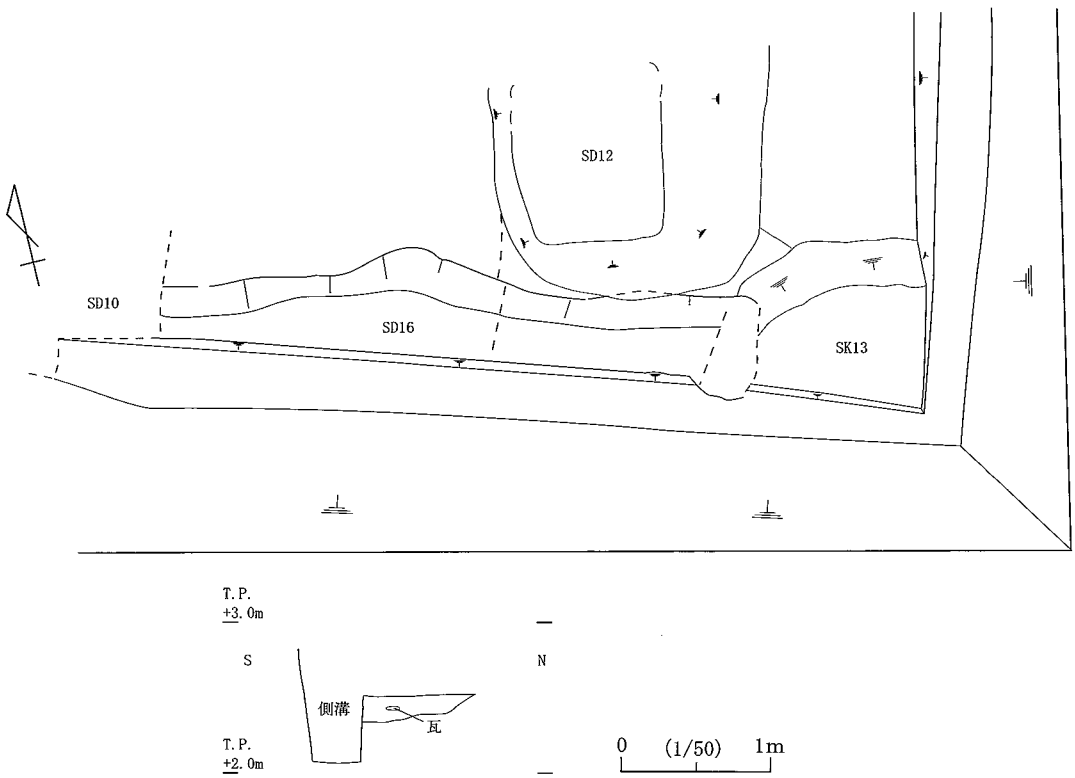
出土遺物は、須恵器壺・杯、土師器・羽釜、瓦器椀、平瓦の小破片である。埋没時期は、出土した瓦器椀の年代観より、12世紀後半～13世紀初頭と考えられる。

SD16は、SD12を切る形で検出されたが、東端がSD10に、西端がSK13によってそれぞれ切られている。また、SK16の検出は、第３面の遺構検出及び掘削の後であったため、平面図上は別図（第



1．灰色(5Y4/1)2～5mmの礫混じり砂質シルト
2．褐色(7.5YR4/3)極細～細粒砂混じり粘土質シルト
3．暗灰黄色(2.5Y4/2)5～10mm大の礫混じり粘土質細粒砂
4．灰色(5Y4/1)2～5mmの礫混じりシルト質粘土
　極細～細粒砂含む
5．灰色(7.5Y4/1)粘土質シルト　炭化物含む
6．黄灰色(2.5Y4/1)粘土質細粒砂
7．灰色(5Y4/1)粘土
8．灰色(5Y4/1)粘土
9．灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂～2mmの礫混じり粘土
10．灰色(7.5Y4/1)砂質粘土　細粒砂含む
11．灰色(7.5Y4/1)粘土
12．暗青灰色(5B4/1)粘土
13．灰オリーブ色(5Y4/2)細～中砂混じりシルト質粘土
14．黄灰色(2.5Y4/1)細～中粒砂　粘土ブロック状に混じる
15．灰オリーブ色(5Y4/2)細粒砂混じり粘土質シルト
16．オリーブ黒色(7.5Y3/2)細粒砂混じり粘土
17．灰色(7.5Y4/1)細粒砂混じり粘土
18．灰色(7.5Y4/1)粘土
19．灰色(7.5Y6/1)細～中粒砂　にぶい黄色(2.5Y 6/4)混じり
　第4面構成土

第11図　SK14・SD12断面図



オリーブ黒色(5Y3/1)細砂混じりシルト　瓦を含む　砂、シルトの互層

第12図　SD16平面・断面図

12図）とした。

SK13は落込み又は土坑である。検出幅は、1.85mで、深度は、0.33mである。埋土は、トレンチ南壁断面の第9層灰色（5Y4/1）シルト質中～細砂、第10層灰色（5Y4/1）中～細砂混じり粘土質シル

ト、第11層黒褐色（2.5Y3/1）細砂含む粘土、第12層黄灰色（2.5Y4/1）粗砂混じり粘土と、トレンチ東壁第26層オリーブ黄色（5Y6/3）細～中砂である。

出土遺物は、土師器皿、須恵器と平瓦の小破片である。このうち、土師器皿より、埋没時期は14世紀前半と考えられる。

SK14は前述のとおりSD12の埋没後に作られた井戸である。形は方形で、南北幅推定で1.1m、東西幅約1.0mを測る。

埋土は、断面図（第12図）のうち、第4層灰色（5Y4/1）砂礫混じりシルト質粘土、第5層炭化物含む灰色（7.5Y4/1）粘土質シルト、第6層黄灰色（2.5Y4/1）粘土質細粒砂、第7層灰色（5Y4/1）粘土、第8層灰色（5Y4/1）粘土、第12層暗青灰色（5B4/1）粘土である。

断面図（第12図）の第1～3層は、上層からの落込みであることが確認できた。また、第12層は台形を呈する粘土層で、井戸の排水等に伴う設備の埋土であったと考えられる。

出土遺物は、土師器皿と瓦器椀である。このうち、瓦器椀の年代観より、井戸は13世紀後半には埋没していたと考えられる。

また、井戸内からは、井戸枠や曲物に関する遺物は検出できなかった。

SK15は、ピットである。長方形を呈し、長辺0.55m、短辺0.49mを測る。

出土遺物は、瓦の小破片、土師器皿、板状木製品、銭である。銭は2点出土し、1点は「聖宋元寶」（初鋳は1101年）である。もう1点は判別不可能である。土師器皿は、SK13と同様の特徴を有するため、同時期の遺構と考えられる。楚板と考えられる板状木製品を土師器皿、銭とともに埋めていることから、儀礼的な意味をもつ遺構である。

③第4面（古墳時代～奈良時代）

第Ⅳ層は、トレンチ全体を覆う砂層である。既往の調査より、若江遺跡全体に見られる庄内期～奈良時代頃までの遺物を含んだ層であることが分かっている。

第4面では、2条の溝（SD19及びSD20）と5つのピットを検出した。

SP17は、トレンチ北西で検出したピットである。SD10に切られるため、検出部分は全体の4分の1程度と思われる。埋土は、炭化物を含む灰色（5Y5/1）細砂混じりシルトである。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。

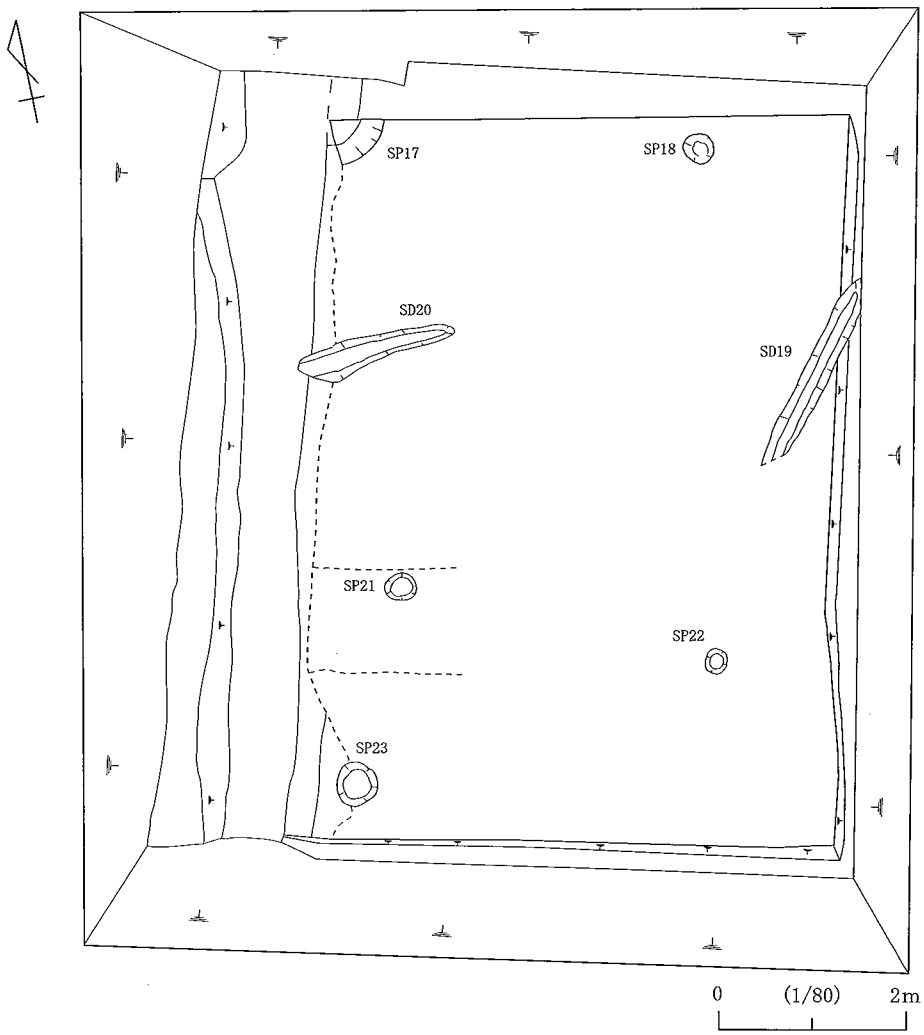
SP18は、長径0.34m、短径0.33mと円形に近い形を呈するピットである。埋土は、第1層が粘土・炭・焼土をブロック状に含む褐灰色（10YR5/1）粗～中砂混じりシルトで、第2層が灰白色（7.5Y7/1）中～細砂である。第1層の両端を第2層が覆う形で検出された。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。

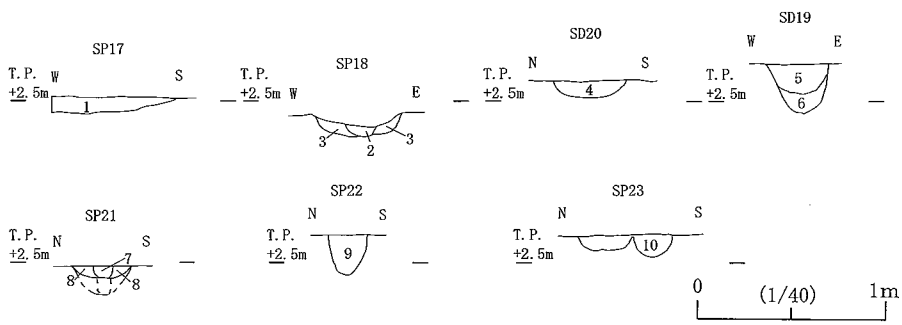
SD19は、幅0.29m、長さ2.25mの溝である。第1層は、細砂をブロック状に含む灰色（7.5Y5/1）粘土質シルトで、第2層は、灰色（10Y5/1）シルト～細砂である。第1層は第2層の上に堆積した状態で確認できた。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。

SD20は、最大幅0.39m、長さ1.69mを測る溝である。西端はSD10に切られる形で検出した。埋土は、灰色（7.5Y4/1）シルト～細砂である。出土遺物は、弥生土器の小破片である。

SP21は、長径0.33m、短径0.29mを測るピットである。埋土は、第1層が褐灰色（10YR5/1）粗～中砂混じりシルト、第2層が灰白色（7.5Y7/1）細～中砂である。第1層の両端で第2層が検出された。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。

SP22は、長径0.28m、短径0.26mを測るピットである。埋土は、シルトをブロック状に含む灰色





1．灰色(5Y5/1)細砂混じりシルト　炭化物含む
2．褐灰色(10YR5/1)粗～中砂混じりシルト
　粘土・炭・焼土をブロック状に含む
3．灰白色(7.5Y7/1)中～細砂
4．灰色(7.5Y4/1)シルト～細砂
5．灰色(7.5Y5/1)粘土質シルト
　細砂をブロック状に含む
6．灰色(10Y5/1)シルト～細砂
7．褐灰色(10YR5/1)粗～中砂混じりシルト
8．灰白色(7.5Y7/1)細～中砂
9．灰色(5Y4/1)シルト～細砂
　シルトをブロック状に含む
10．灰色(5Y5/1)細砂混じりシルト

第13図　第4面遺構平面・断面図

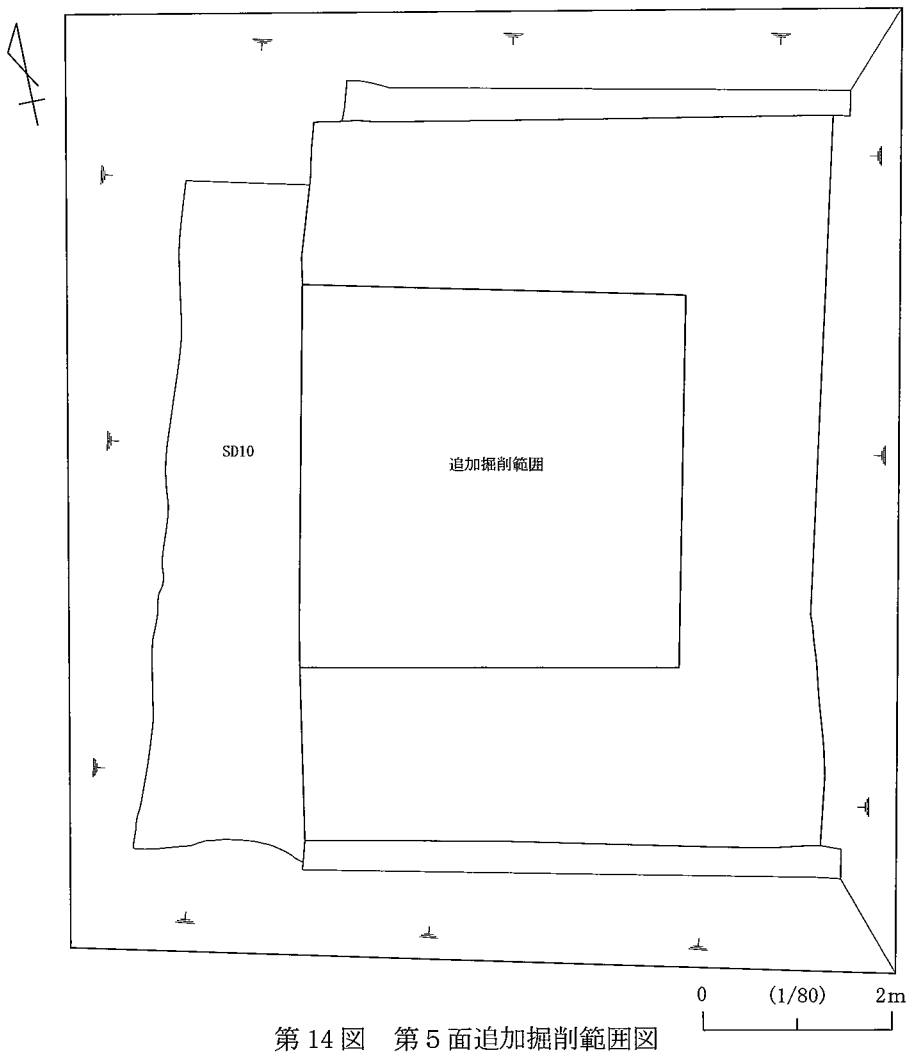
(5Y4/1) シルト～細砂である。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。
SP23 は、長径 0.33m、短径 0.47mを測るピットである。埋土は、灰色(5Y5/1)細砂混じりシルトである。遺物を伴わないため、埋没時期は不明である。

④第５面（弥生時代後期）

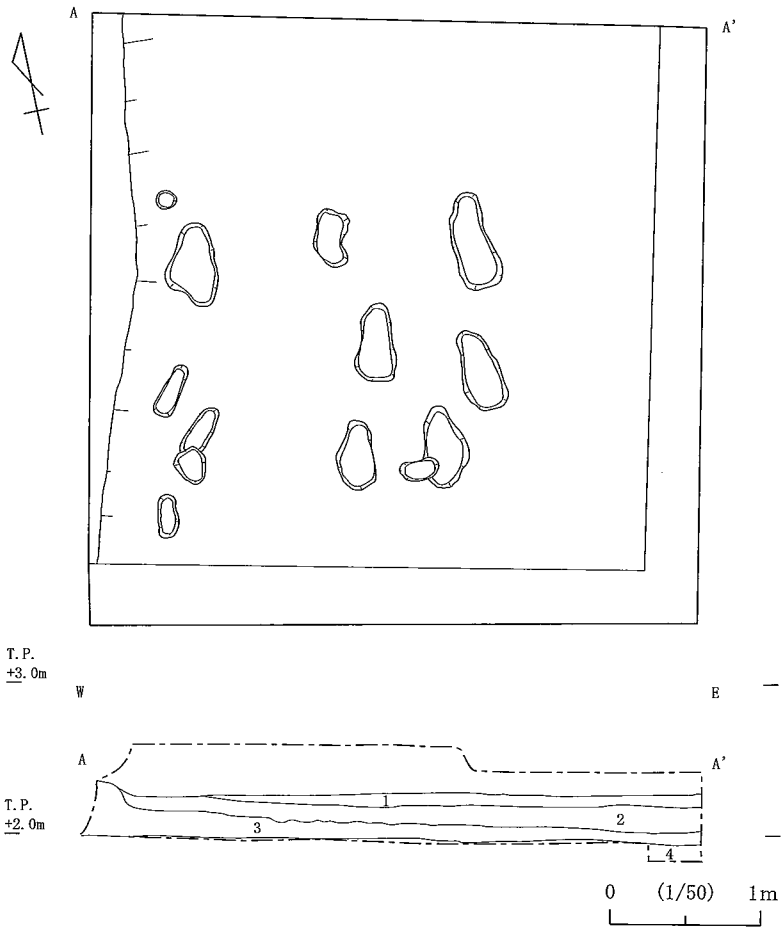
SD10 掘削時に、第４面下の黒褐色粘土層より、弥生時代後期の土器の破片が出土したことから、確認調査では検出できなかった弥生時代の堆積層の存在が確認された。このため、追加掘削トレンチを設定した。トレンチの幅は、４m 四方とした。

確認できた堆積層は、第１層植物遺体含む灰オリーブ色（5Y4/2）粘土質細砂、第２層上面に植物遺体が残る黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土、第３層黒色 (5Y2/1) わずかに細砂含む粘土質シルト、第４層オリーブ灰色（5GY5/1）細砂混じりシルトである。

第１層及び第２層から植物遺体が検出されている。また、第３層では、トレンチ西端で畦畔状の高まりが検出された。したがって、第１層及び第２層は水田跡と考えられる。出土遺物は多くないが、



第 14 図　第５面追加掘削範囲図



1．灰オリーブ色(5Y4/2)粘土質細砂　植物遺体含む
2．黒褐色(2.5Y3/1)粘土　上面に植物遺体残る
3．黒色(5Y2/1)わずかに細砂含む粘土質シルト
4．オリーブ灰色(5GY5/1)細砂混じりシルト

第15図　第５面平面・断面図

弥生時代後期の鉢・甕の口縁部、高坏の脚部が出土したことから、水田の時期は同時期と考えられる。

第５面を構成する層のうち、北壁断面より、畦畔と考えられる高まり検出した。このことより、第５面は、弥生時代後期の水田跡であると考えた。

畦畔の規模は、調査トレンチの制限により確定できなかったが、高さ15cm、基底幅約40cmと推定できる。

第５面上で検出した遺構は、田下駄によると考えられる足跡状の遺構である。全て第２層上面で検出されたものである。

足跡状の遺構の大きさは概ね50cmから60cm大の大きさで、楕円形又は長方形に近い形をもつ。検出した足跡状の遺構の中心間の距離は、概ね70cm～80cm程度であるが、それより近接しているものもある。

これまでのところ本市内の弥生時代を通じた水田跡からは田下駄に伴う足跡は検出されていない。

また、水田跡上面を覆う砂層上に踏み込まれた足跡は、水田の粘土層上面にも足跡に近似したくぼみとして現れる場合がある。また、この足跡に似たくぼみは、範囲が不明瞭で、実際の足跡よりも大きくなる。これを「アンダープリント」（文化庁文化財部記念物課2010『発掘調査のてびき－集落遺跡発掘編－』P114参照）と呼ぶが、今回の調査地の堆積状況と併せて考えれば、第Ⅳ層で検出できなかった足跡が、第５層上面にアンダープリントとして現れた可能性も排除できない。第５面で検出した足跡状の遺構が本当に田下駄による足跡かどうかを判断するには更なる検討や調査事例の増加が必要である。

7）第87次調査まとめ

今回の調査では、弥生時代後期から江戸時代かけての広い時期に渡る遺構及び遺物が検出された。まず、今回の調査で検出された弥生時代後期の水田畦畔については、調査地南で行われた第35次調

査で、同時期の遺構が検出されている。同調査で検出された畦畔は、基底幅0.2～0.3m、高さ3～5㎝と今回の調査で検出された畦畔よりも小規模ではある。水田の時期は同時期であることから、より大規模な区画に伴う畦畔の可能性も考えられる。

鎌倉時代の遺構は、溝2条と落込み、ピット、井戸をそれぞれ検出した。まず第3面で検出された遺構はすべて若江城築城以前のものであり、築城以前の城近辺の様相が明らかとなった。しかしながら、今回の調査を通じて、畠山期の若江城に伴う遺構は確認できなかった。

最後に、今回の発掘調査成果の最も大きな成果の一つは、若江城の堀であるSD10を検出したことである。

SD10は、若江遺跡第36次調査で検出した三好義継期の堀跡との関係性が、位置関係や堀の形状等から考えられることは既に述べた。

義継期の堀とされる第36次調査で検出された溝は、出土遺物より16世紀中頃には埋没したと報告されている。この溝は、さらに北方へと伸び、府道四条～長堂線拡張工事に伴う第14次調査で検出された南北方向に走る溝18へとつながると考えられている。

その第14次調査で検出された溝18は、現在の府道北部で直角に曲がり西方向へと伸びる。南北方向の溝の幅は約2.1～2.4m、深さ0.5～0.6mを測り、第36次調査の溝と同様に16世紀中頃には埋没したとされている。一方、直角に曲がる東西方向の溝（幅2.4m、深さ0.6m、検出長31m）の埋没時期それよりも遅く、出土遺物から16世紀後半頃と考えられている。

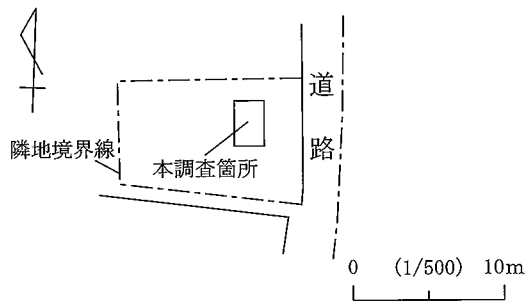
また、調査地南部で行われた第35次調査の結果、東西方向に走る溝が検出されている。B5地区～A5地区で検出された溝15である。検出最大幅は5m、最大深度は0.74mを測り、埋没時期は、出土遺物より16世紀後半と報告されている。

以上のことから、SD10の性格及び時期についてまとめる。まず、SD10は義継期の若江城に伴う堀であった可能性が、第36次調査D地区で検出された溝1との位置関係等により指摘できる。堀は調査地をさらに南へと伸び、第35次調査で検出された溝15へと接続する可能性が高い。

第36次調査で検出された堀北部は、織田信長による石山本願寺攻めの拠点とされた時期には既に埋没していた。しかし、現在の若江小学校をはさんだ堀南部、すなわちSD10及び第35次調査溝16はその後も利用され、石山本願寺との和議が成立した後の若江城廃城に伴い埋められたと考えられる。

8）第88次調査の経過

平成25年2月15日、東大阪市若江南町二丁目において、個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘の届出が提出された。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念された。このため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。協議代理者との協議の結果、今回の調査地は、付近の既往の調査状況より、若江城に関連する遺構が存在する可能性が非常に高かったため、平成25年2月5日に調査地内に発掘調査トレンチを設定し、発掘調査を実施した。



第16図　調査トレンチ位置図

9) 付近の調査状況

調査地の西地点では、昭和62年に共同住宅建設に伴う第37次調査が行われている。

当該調査において、若江城の堀が検出された。検出された堀は、南から東へと曲がるコーナー部分であった。検出幅は東西9.4mで、深さ1.8mと大規模な堀であった。

堀は、15世紀前半には既に開削されていた。調査では、15世紀前半から16世紀中頃までの堆積層、若江城廃城直前の16世紀後半までの堆積層がそれぞれ検出され、廃城後は、整地土で覆われていたとされている。

10) 調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、調査トレンチは東西2m、南北3mで、トレンチ位置は第1図のとおりである。発掘調査は2月15日に完了した。

まずは、調査トレンチの堆積状況を見ていく。

調査トレンチ

第0層　盛土

第1層　灰黄褐色（10YR4/2）5㎜～2㎝大の礫混じり粘土質細～中砂。近世～近代の整地層。

第2層　暗褐色（10YR3/3）2～3㎜の礫混じり中砂。

第3層　黄灰色（2.5Y4/1）2～3㎜の礫混じり粘土質中砂。

第4層　黄灰色（2.5Y4/1）粘土質細～中砂。灰黄褐色（10YR4/2）の中砂がラミナ状に堆積する。

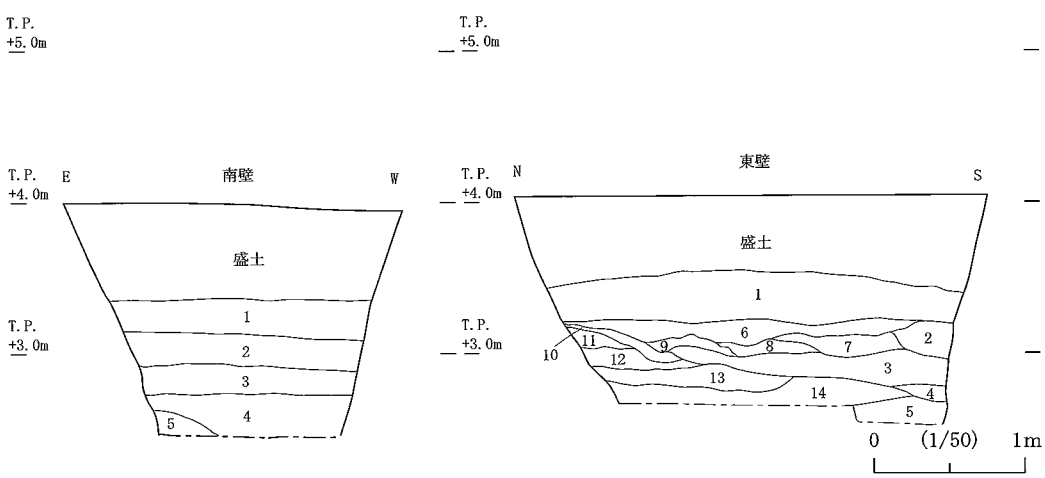
第5層　暗灰黄色（2.5Y4/2）中砂。

第6層　褐色（10YR3/2）2㎜～1㎝大の礫混じり粘土質シルト。

第7層　褐灰色（7.5YR4/1）粗砂～5㎜大の礫混じりシルト。

第8層　黄灰色（2.5Y4/1）粗砂～細砂混じり粘土質シルト。

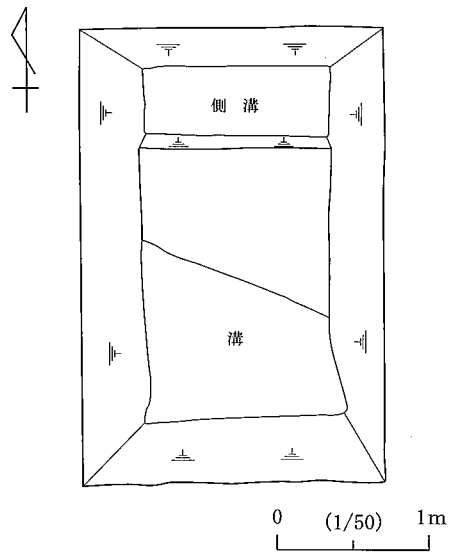
第9層　黒褐色（7.5YR3/2）粘土質中砂。



1．灰黄褐色（10YR4/2）5㎜～2㎝大の礫混じり粘土質シルト　細～中砂　近世～近代の整地層
2．暗褐色（10YR3/3）2～3㎜の礫混じり　中砂
3．黄灰色（2.5Y4/1）2～3㎜の礫混じり粘土質　中砂
4．黄灰色（2.5Y4/1）粘土質　細～中砂　灰黄褐色(10YR4/2)中砂がラミナ状に堆積
5．暗灰黄色（2.5Y4/2）中砂
6．黒褐色（10YR3/2）2㎜～1㎝大の礫混じり粘土質シルト
7．褐灰色(7.5YR4/1)粗砂～5㎜大の礫混じりシルト
8．黄灰色(2.5Y4/1)粗砂～細砂混じり粘土質シルト
9．黒褐色(7.5YR3/2)粘土質中砂
10．褐灰色(10YR4/1)中～粗砂
11．黒褐色(2.5Y3/2)粗砂～2・3㎜大の礫混じり粘土質シルト
12．黒褐色(10YR3/2)細～中砂混じり粘土質シルト
13．褐灰色(10YR4/1)粗砂混じり粘土質シルト
14．オリーブ褐色(2.5Y4/4)中～粗砂

第17図　本調査箇所南壁・東壁断面

第10層　灰色（10YR4/1）中～粗砂。
第11層　黒褐色（2.5Y3/2）２～３㎜の礫～粗砂混じり粘土質シルト。
第12層　黒褐色（10YR3/2）細～中砂混じり粘土質シルト。
第13層　褐灰色（10YR4/1）粗砂混じり粘土質シルト。
第14層　オリーブ褐色（2.5Y4/4）中～粗砂。



第18図 第２層上面遺構平面図

第１層は、近世から近代にかけての整地層である。同時期にかけての陶磁器などが出土した。

第２～４層及び第６～10層は、溝の堆積層である。出土遺物は、木製品、陶磁器、瓦器などである。第１層より出土した遺物との時期差は離れていない。

第11～14層は堀の肩を形成すると考えられる層である。遺物は検出できなかった。

第５層は粗砂層で、第４層に切られる形で検出された。

溝は、トレンチ東西断面中央付近を北肩として、やや南東方向へ伸びる。トレンチ内で確認できた北肩のレベルはT.P. +2.95mである。調査トレンチ内での検出最大幅は、1.2mで、検出深度は0.68mである。

第４層、第５層及び第14層の堆積状況より、第５層→第14層→第４層の順での堆積が認められた。調査トレンチの範囲の関係で確認はできていないが、第11～14層を埋土として溝を埋めた後、規模を縮小した流路として再利用された可能性も指摘できる。

11）まとめ

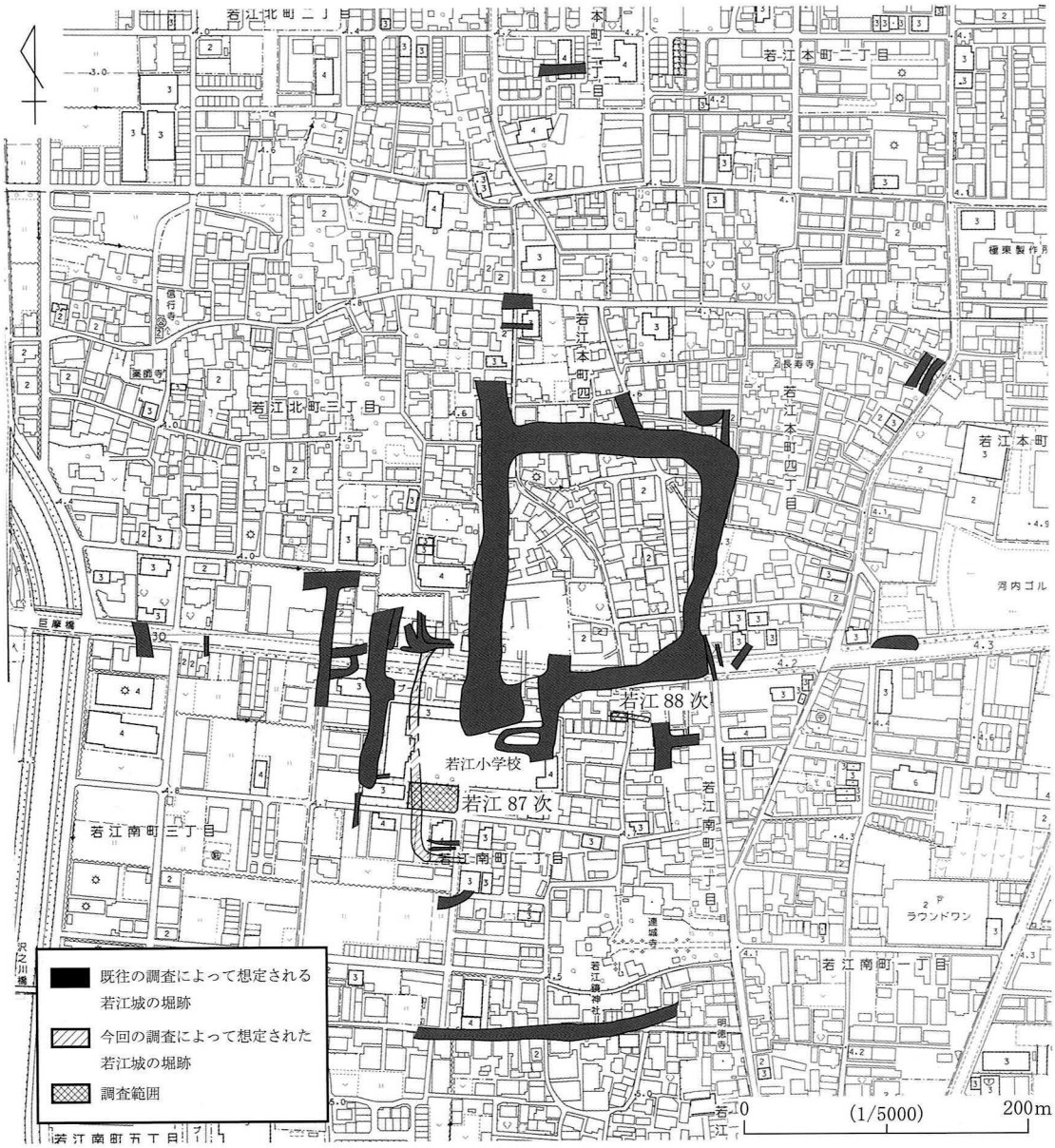
第88次調査の結果、南北方向へと伸びる溝が検出された。調査トレンチの制約で、溝は両肩を検出できなかったため断言はできないものの、検出した範囲が本来の溝の半分程度であったとすれば、溝の想定幅は２mとなる。また、第37次調査で検出された堀と近接した位置関係を考慮すると、今回検出した溝が接続していた可能性も考えられる。したがって、溝は東西方向を南へと振れながら走る若江城の堀であった可能性も考えられる。

しかし、南西地点の37次調査で検出された堀の幅が10m弱であったことを考えると、同規模の堀の延長部であったとは考えにくい。

また、溝埋土からの出土遺物は、中世の遺物を含んではいるものの、概ね近世以降のものであったことから、今回検出した溝は近世以降も耕作等に伴い利用されていた。

12）まとめに代えて

今回の調査により、若江城南部及び南東部に新たな知見が加えられたため、若江城の堀に関する図を次頁の第19図として作成した。



第 19 図　若江城関係堀検出位置図（大阪府文化財調査研究センター 1996 に加筆）

【参考文献】

財団法人東大阪市文化財協会 1988『若江遺跡第 35 次発掘調査報告』
財団法人東大阪市文化財協会 1988『若江遺跡第 27 次発掘調査報告』
東大阪市教育委員会 1999『埋蔵文化財調査概報集－ 1998 年度（2）－』
東大阪市遺跡保護調査会 1982『若江遺跡発掘調査報告Ⅰ遺構編』
財団法人東大阪市文化財協会 1988『若江遺跡第 38 次発掘調査報告』
永井久美男編 1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』兵庫県埋蔵銭調査会

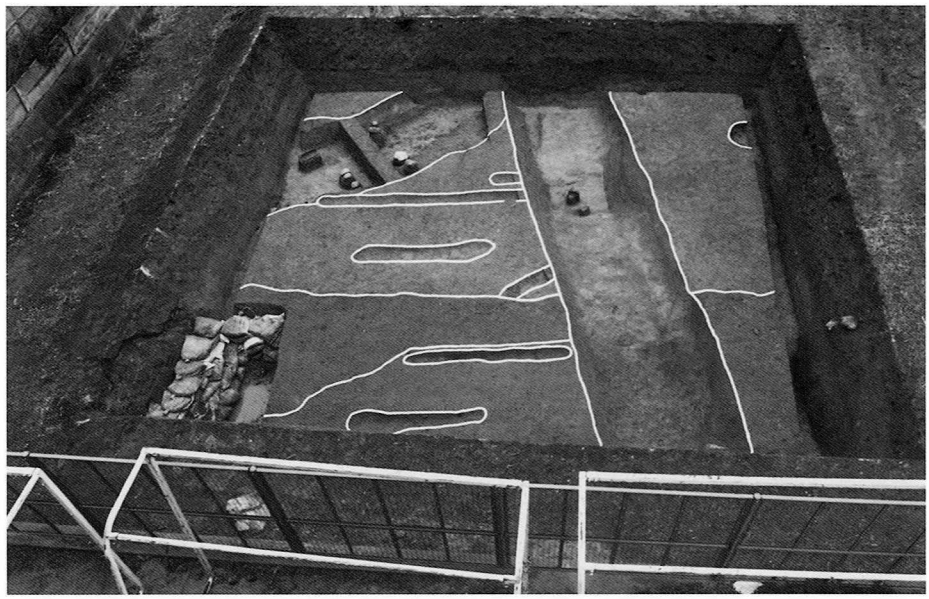
図版1　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
調査前風景
（南より）

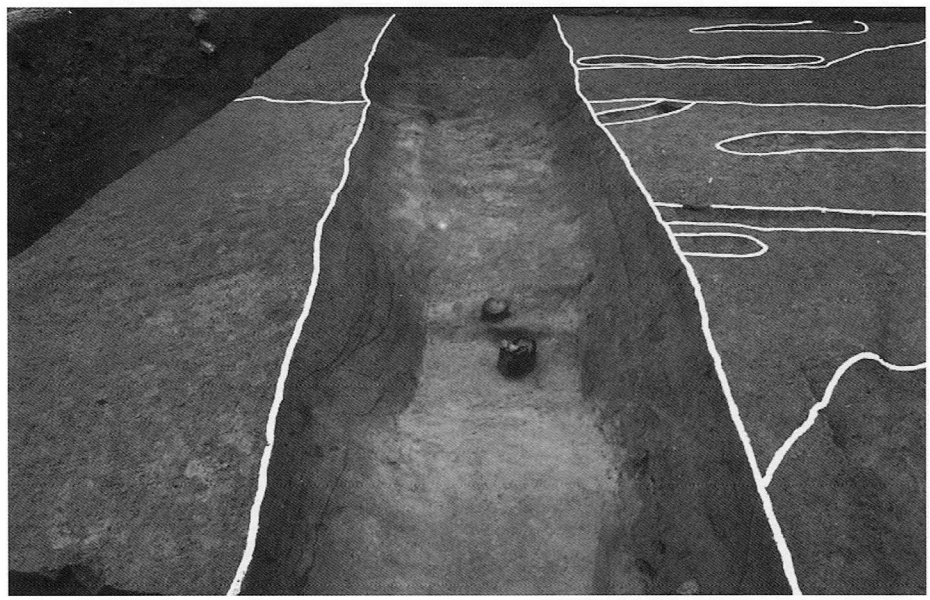
2．本調査箇所
機械掘削
（南より）

3．本調査箇所
調査風景
（南東より）

図版2　若江遺跡第87次発掘調査　遺構



1．本調査箇所
第1面完掘状況
（西より）



2．本調査箇所
SD01 完掘状況
（東より）

3．本調査箇所
SD08 遺物
検出状況
（南より）

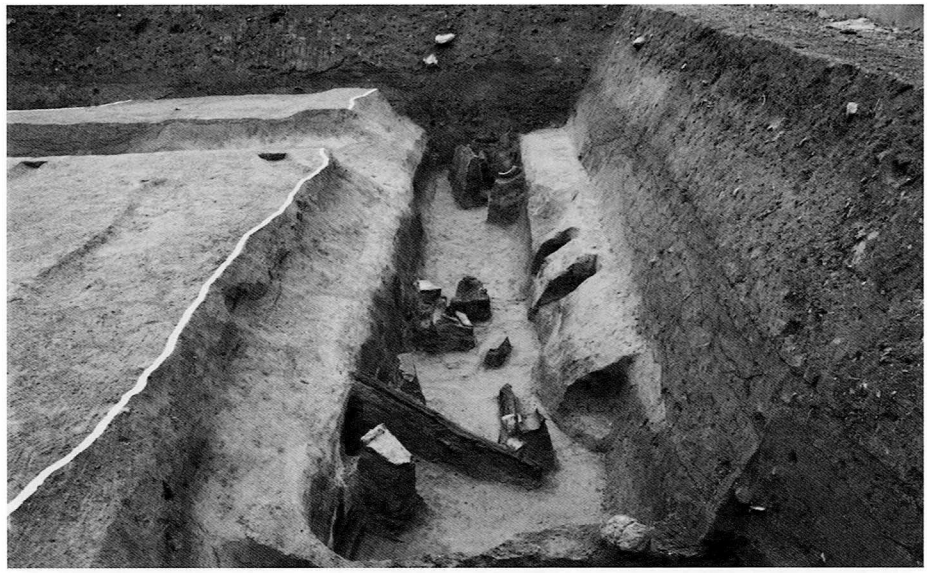
図版3　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
SD08 壁断面
（南より）

2．本調査箇所
第 2 面完掘
（西より）

3．本調査箇所
SK11
（東より）

図版4　若江遺跡第87次発掘調査　遺構



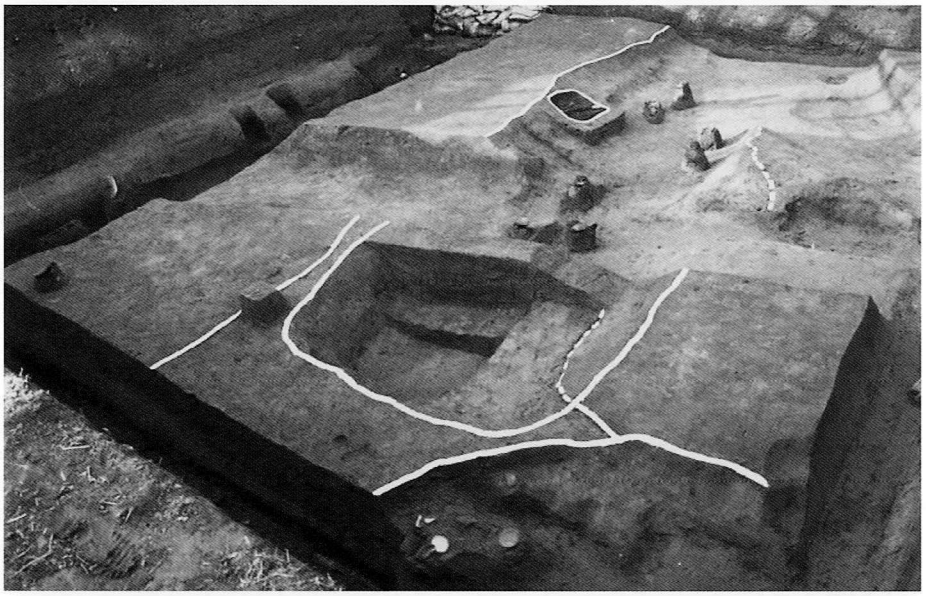
1．本調査箇所
SD10
（北より）

2．本調査箇所
SD10
（南より）

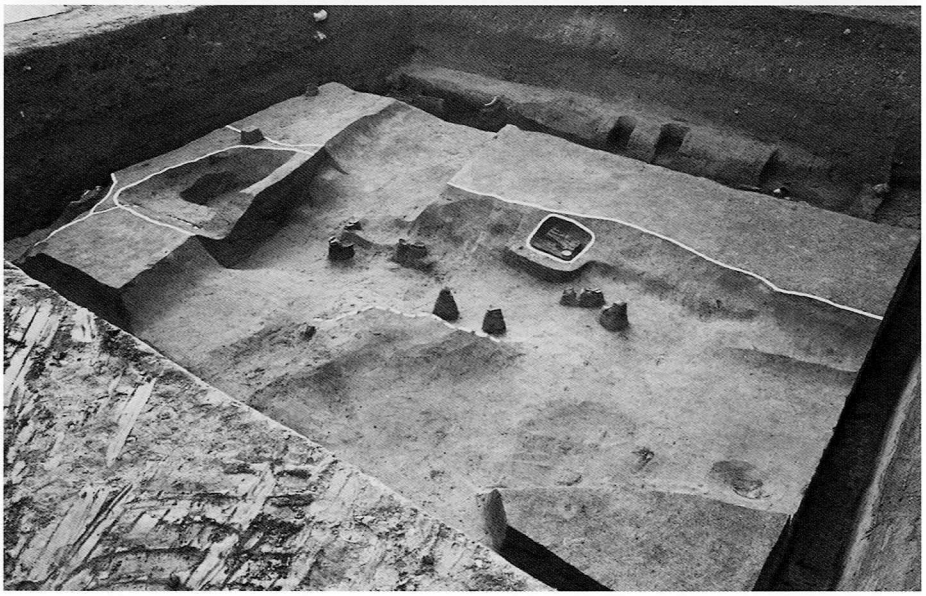
3．本調査箇所
SD10 遺物
出土状況
（北東より）

図版5　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
第3面遺構検出
状況
（西より）



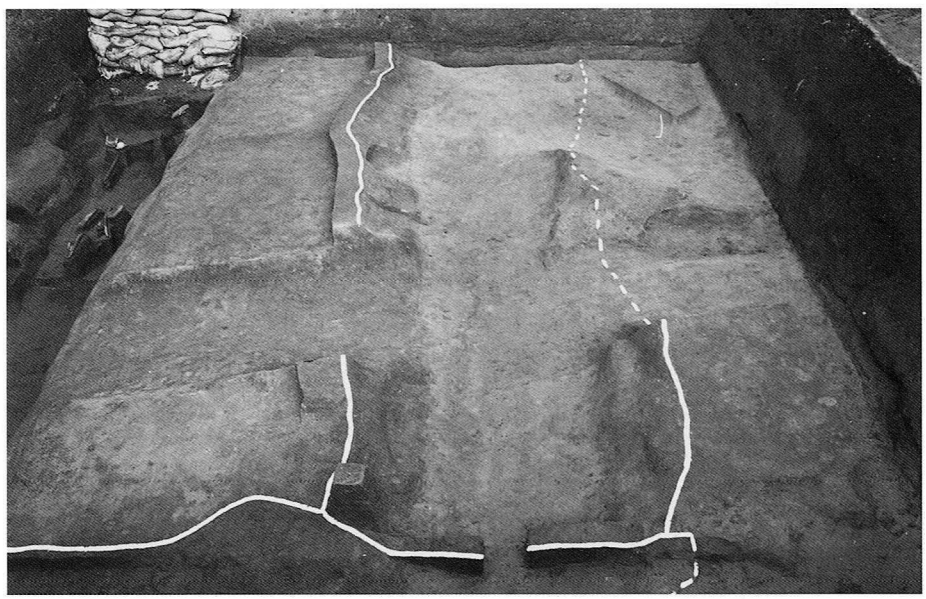
2．本調査箇所
第3面完掘遺構
検出状況
（南東より）



3．本調査箇所
第3面完掘遺構
検出状況
（北東より）

図版6　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

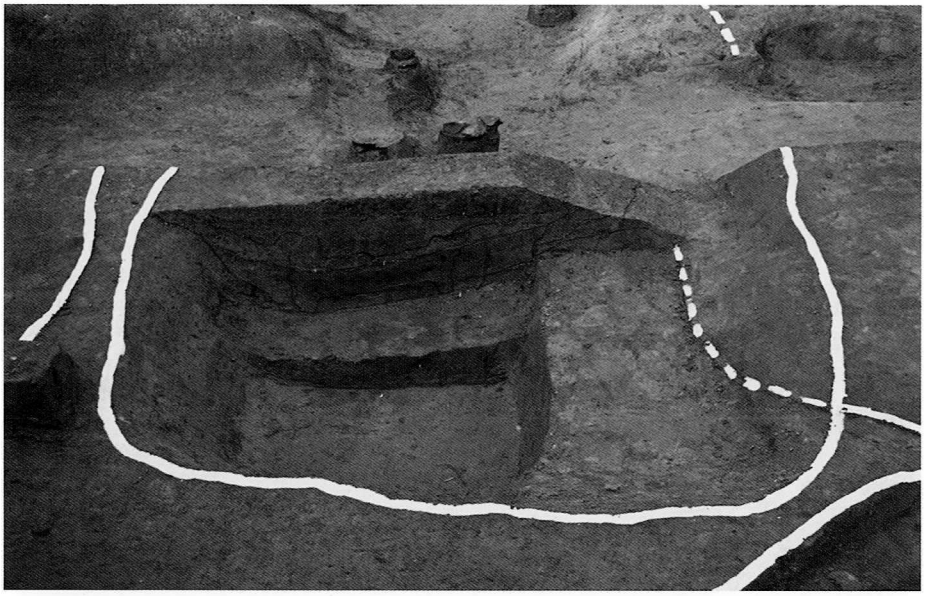
1．本調査箇所
SD12 遺物
出土状況
（南西より）



2．本調査箇所
SD12 完掘状況
（南より）

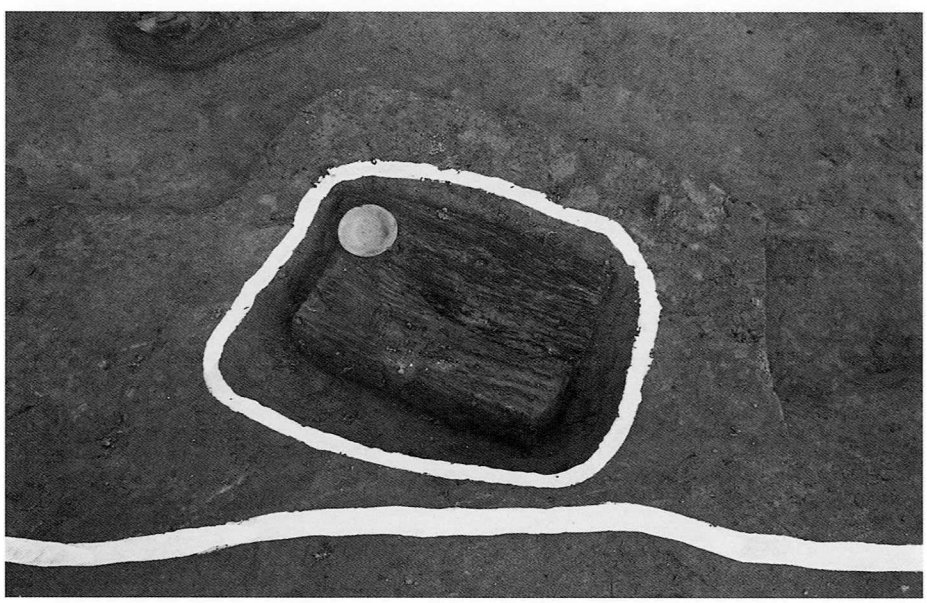
3．本調査箇所
SK13 遺物
検出状況
（南より）

図版7　若江遺跡第87次発掘調査　遺構



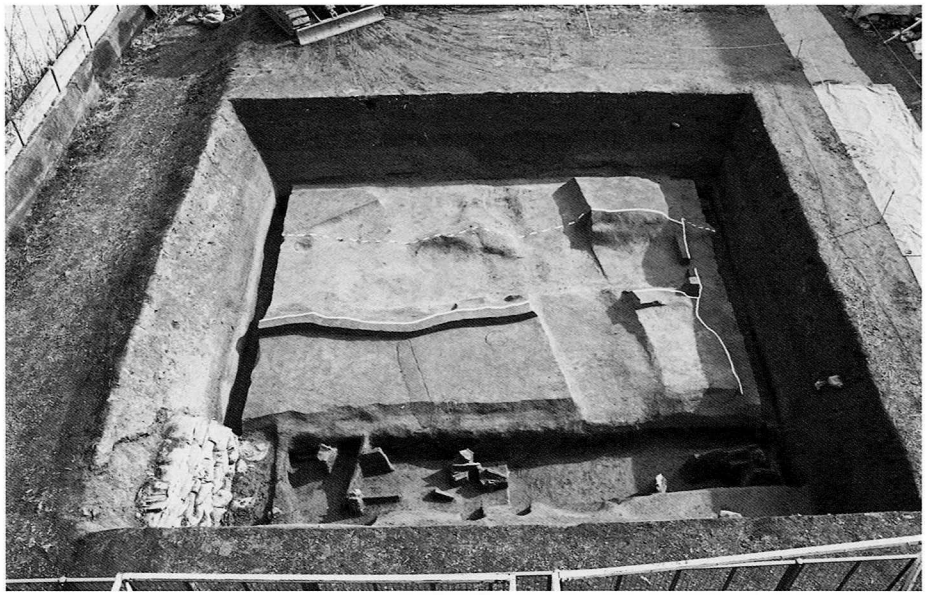
1．本調査箇所
SK14
（南より）

2．本調査箇所
SD12・SK14 断面
（北より）

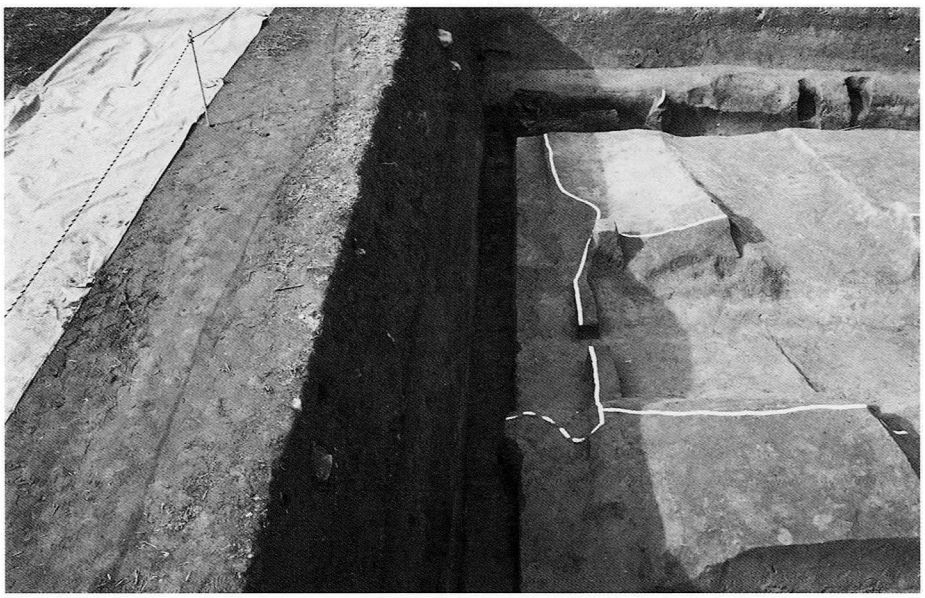


3．本調査箇所
SP15
（西より）

図版8　若江遺跡第87次発掘調査　遺構



1．本調査箇所
第3面完掘状況
（西より）



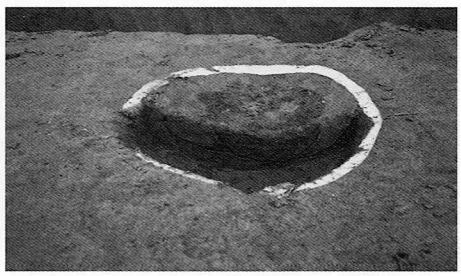
2．本調査箇所
SD16 完掘状況
（東より）

3．本調査箇所
SD16 断面
（東より）

図版9　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

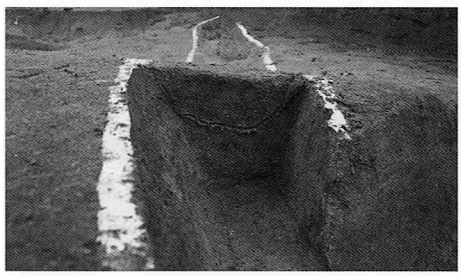
1．本調査箇所
第4面完掘状況
（西より）

2．SP17断面
（南より）



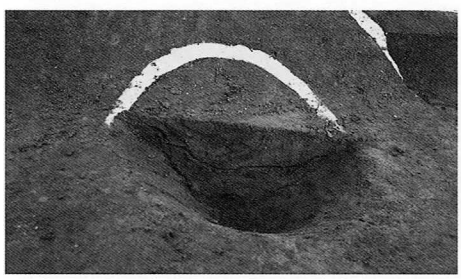
3．SP18断面
（南より）

2～7．本調査箇所
第3面遺構
断面



4．SD19断面
（南より）

5．SD20断面
（東より）

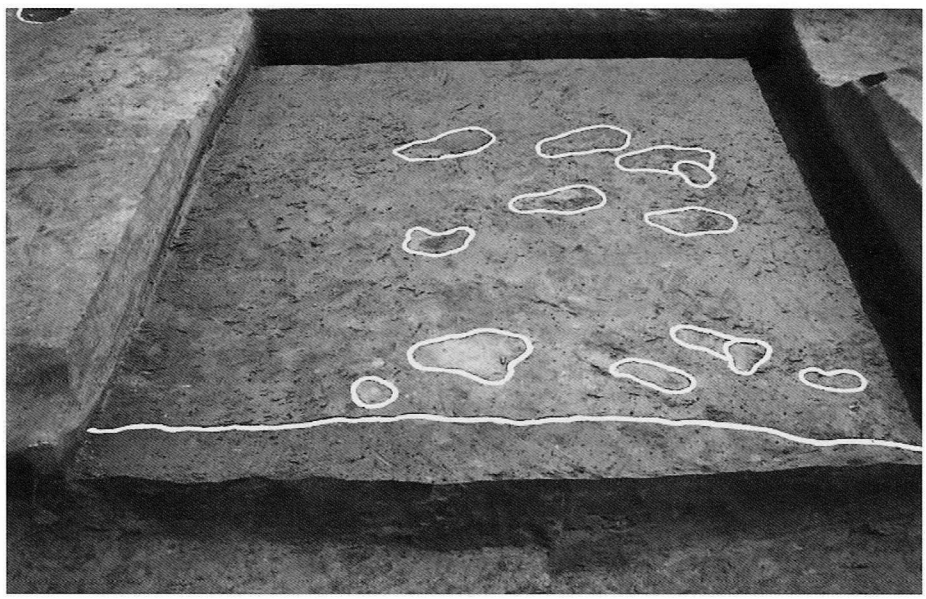


6．SP21断面
（西より）

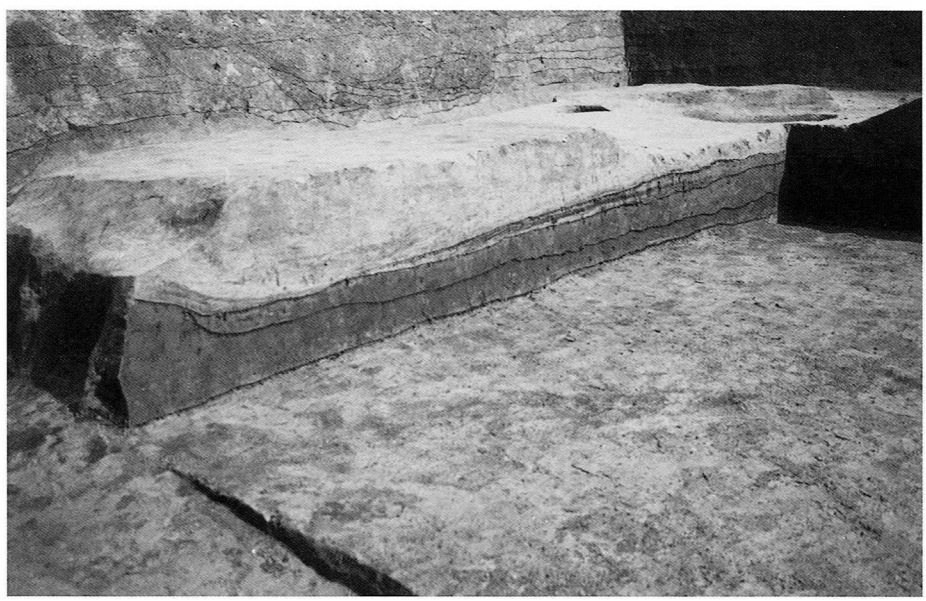
7．SP23断面
（西より）

図版10　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
第５面完掘状況
（西より）



2．本調査箇所
第５面遺構
検出状況
（西より）



3．本調査箇所
第５面北壁断面
（南西より）

図版11　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
東壁断面1
（西より）

2．本調査箇所
東壁断面2
（西より）

3．本調査箇所
東壁断面3
（西より）

図版12　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
西壁断面１
（東より）

2．本調査箇所
西壁断面２
（東より）

3．本調査箇所
西壁断面３
（東より）

図版13　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
南壁断面１
（北より）

2．本調査箇所
南壁断面２
（北より）

3．本調査箇所
南壁断面３
（北より）

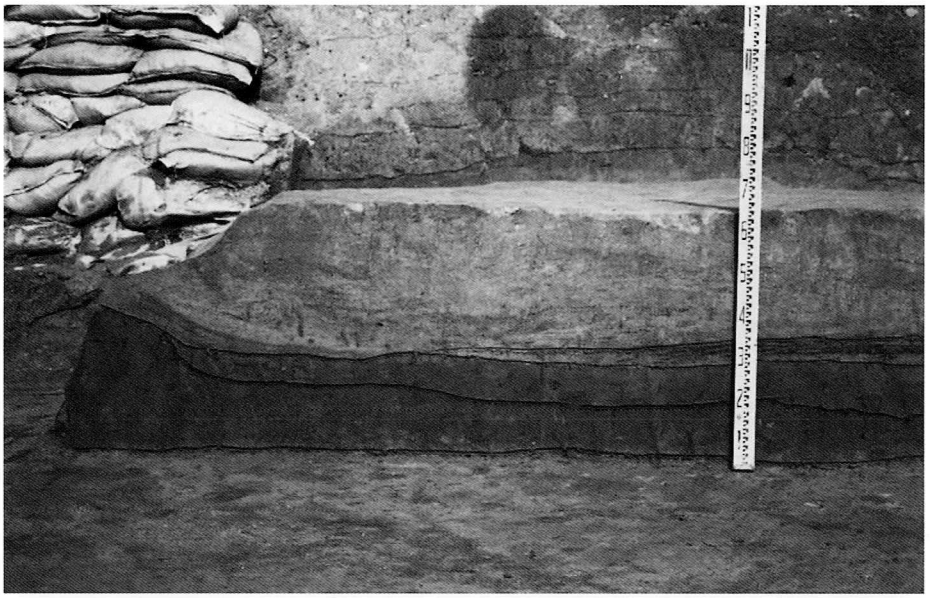
図版14　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
北壁断面１
（南より）

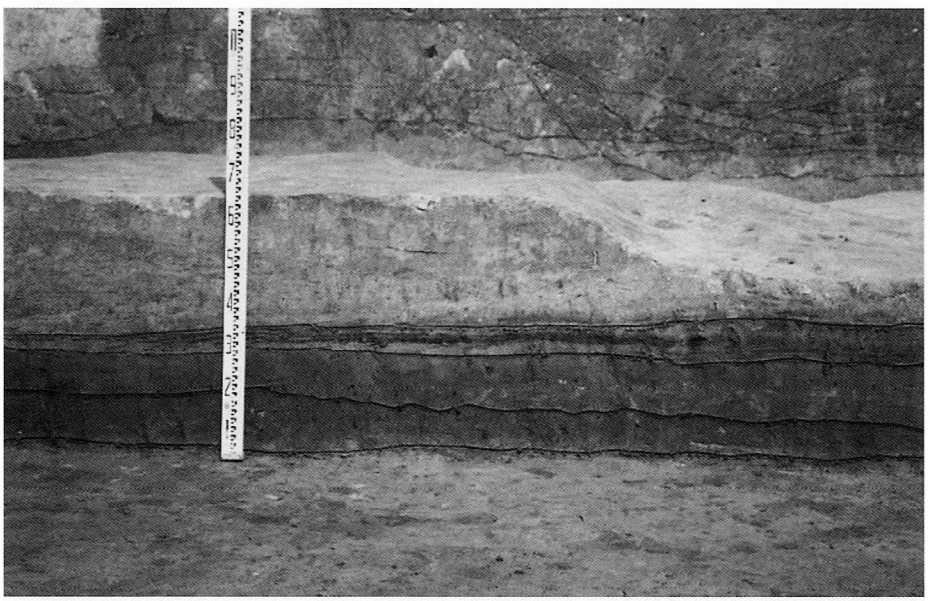
2．本調査箇所
北壁断面２
（南より）

3．本調査箇所
北壁断面３
（南より）

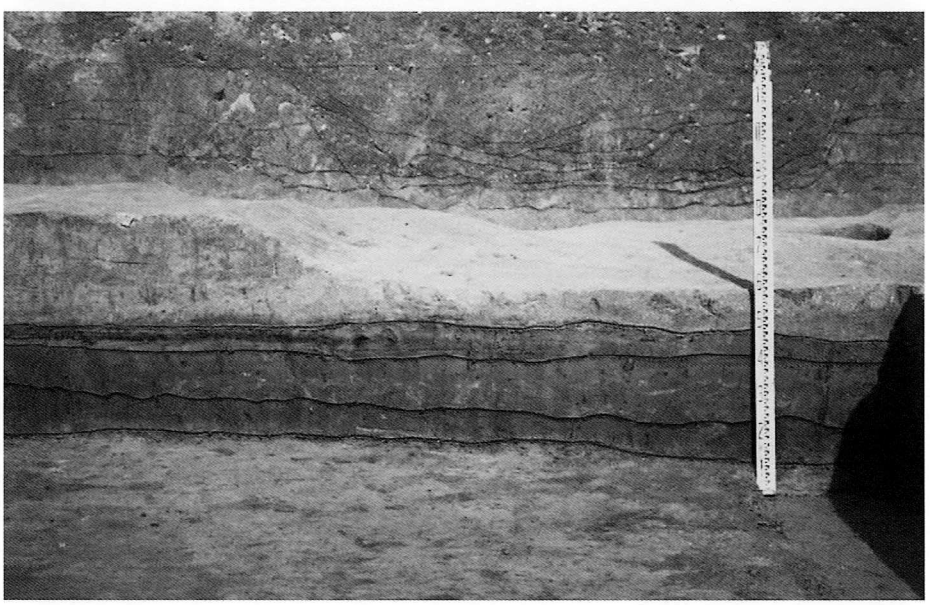
図版15　若江遺跡第87次発掘調査　遺構



1．本調査箇所
北壁断面４
（南より）



2．本調査箇所
北壁断面５
（南より）



3．本調査箇所
北壁断面６
（南より）

図版16　若江遺跡第87次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
埋め戻し状況１
（南東より）

2．本調査箇所
埋め戻し状況２
（南西より）

3．本調査箇所
埋め戻し完了
（南東より）

図版17　若江遺跡第88次発掘調査　遺構

1．本調査箇所
調査前風景
（南西より）

2．本調査箇所
東壁断面
（北西より）

3．本調査箇所
完掘状況
（北より）

第５章　岩田遺跡第3次発掘調査

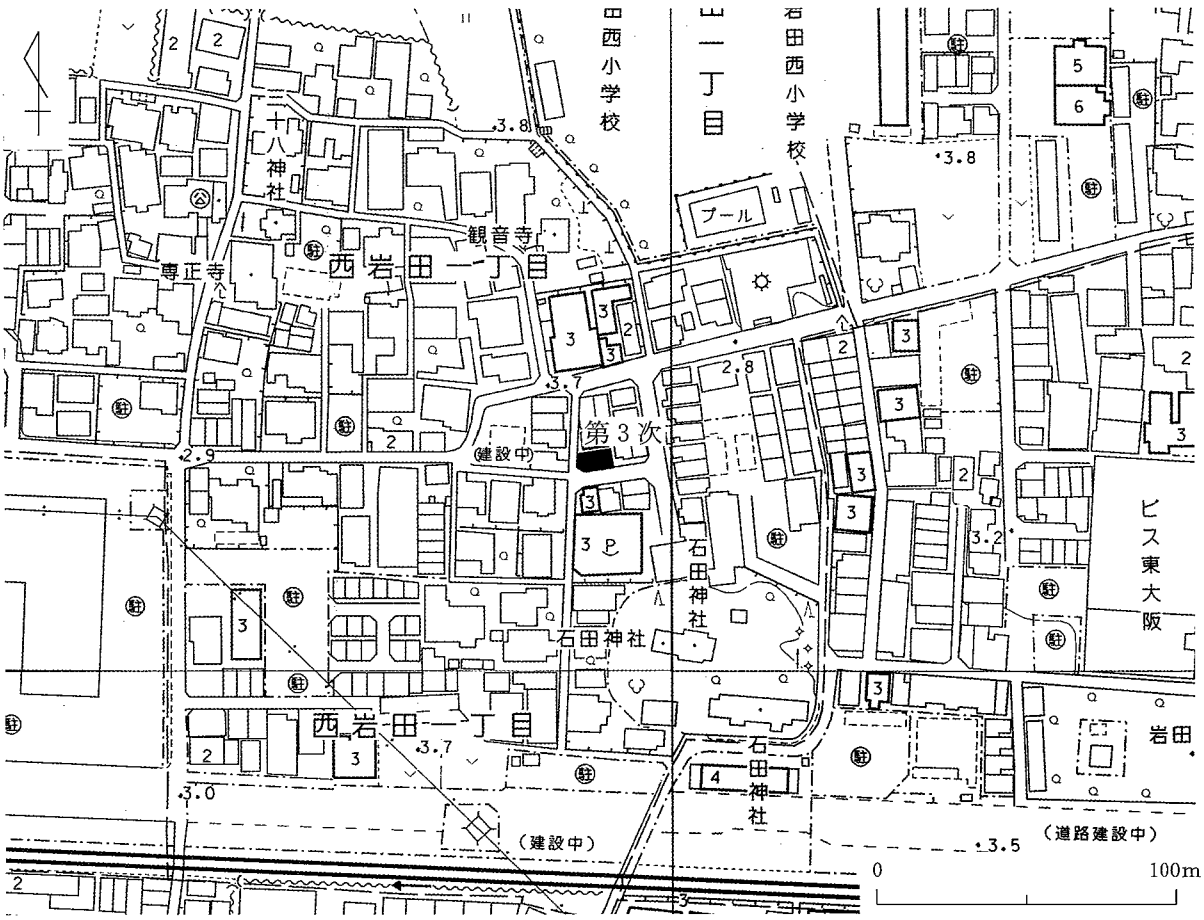
1）はじめに

岩田遺跡は、東大阪市西岩田一丁目を中心とし、岩田墓地から式内社の石田神社にかけて広がる古墳時代から中世にかけての集落跡である。昭和48（1973）年に市立岩田西小学校新築工事に伴い遺跡が発見された。その後、平成13年に下水道工事に伴う発掘調査が実施され、中世の土器片及び中世～近世の井戸が検出されている。

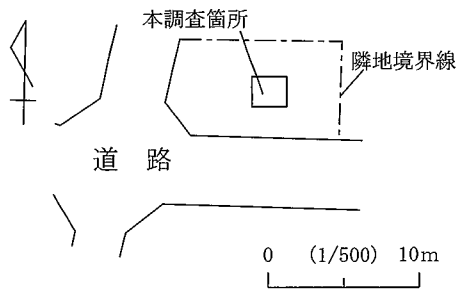
平成15～16年度に実施された近鉄奈良線連続立体交差推進事業に伴う発掘調査により、奈良時代中期～平安時代前期にかけての遺構が検出された。検出された遺構は、井戸、土坑、溝、柱穴等であった。近接する瓜生堂遺跡の第45次調査では同時期の集落跡が検出されていることから、岩田遺跡の遺構はその延長上にあると考えられている。

2）調査の経過

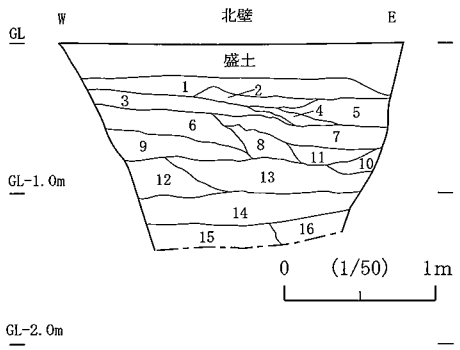
平成25年１月、東大阪市岩田一丁目において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建築物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成25年２月７日に確認調査を実施した。調査の結果、確認調査トレンチで中世の瓦器椀片等を含む遺物包含層を検出したため、現場にて協議代理者と協議を行い、同日に調査トレンチを拡大して発掘調査を行った。調査面積は、５㎡となった。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図



1．暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細～中礫混じり細砂
2．オリーブ褐色(2.5Y4/3)
細～中礫混じり砂質シルト
3．暗褐色(10YR3/4)細～中礫混じり砂質シルト
4．にぶい黄褐色(10YR4/3)
粗砂～中礫混じり砂質シルト
5．暗褐色（10YR3/3)中礫混じり砂質シルト
にぶい赤褐色(2.5YR4/4)
焼土・粘土がブロック状に入る
6．暗褐色(10YR3/4)細～中礫混じり砂質シルト
7．暗褐色(10YR3/4)細礫砂質シルト　炭化物含む
8．にぶい黄褐色(10YR4/3)細～中礫混じり砂質シルト
にぶい黄褐色(10YR5/4)シルトがブロック状に混入
9．暗褐色(10YR3/3)細～中礫混じり砂質シルト
10．暗褐色(10YR3/4)粗～細礫混じりシルト
11．暗褐色(10YR3/3)細砂混じりシルト
12．黒褐色(10YR3/2)細～中礫混じりシルト
13．暗褐色(10YR3/3)粗～中礫混じりシルト
炭化物含む
14．黒褐色(10YR2/2)粗～中礫混じりシルト
15．暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)
細～中礫混じりシルト質粗砂
16．黒褐色(2.5Y3/2)細礫混じり砂質シルト

第３図　本調査箇所北壁断面

3）調査の概要

調査は重機を使用し、遺物が採集できるよう、慎重に行った。また、調査トレンチは東西 2.5m、南北２ｍで、トレンチ位置は第２図のとおりである。

調査トレンチの層位は以下のとおりである。

第０層　盛土層。

第１層　暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)細～中礫混じり細砂。

第２層　オリーブ褐色（2.5Y4/3）細～中礫混じり砂質シルト。

第３層　暗褐色（10YR3/4）細～中礫まじり砂質シルト。

第４層　にぶい黄褐色（10YR4/3）粗砂～中礫混じり砂質シルト。

第５層　暗褐色（10YR3/3）中礫混じり砂質シルト。にぶい赤褐色（2.5YR4/4）焼土・粘土がブロック状に入る。

第６層　暗褐色（10YR3/4）細～中礫混じり砂質シルト。

第７層　暗褐色（10YR3/4）細礫混じり砂質シルト。炭化物含む。

第８層　にぶい黄褐色（10YR4/3）細～中礫混じり砂質シルト。にぶい黄褐色（10YR5/4）シルトがブロック状に混入。

第９層　暗褐色（10YR3/3）細～中礫混じり砂質シルト。

第10層　暗褐色（10YR3/4）粗～細礫混じりシルト。

第11層　暗褐色（10YR3/3）細砂混じりシルト。

第12層　黒褐色（10YR3/2）細～中礫混じりシルト。

第13層　暗褐色（10YR3/3）粗～中礫混じりシルト。炭化物含む。

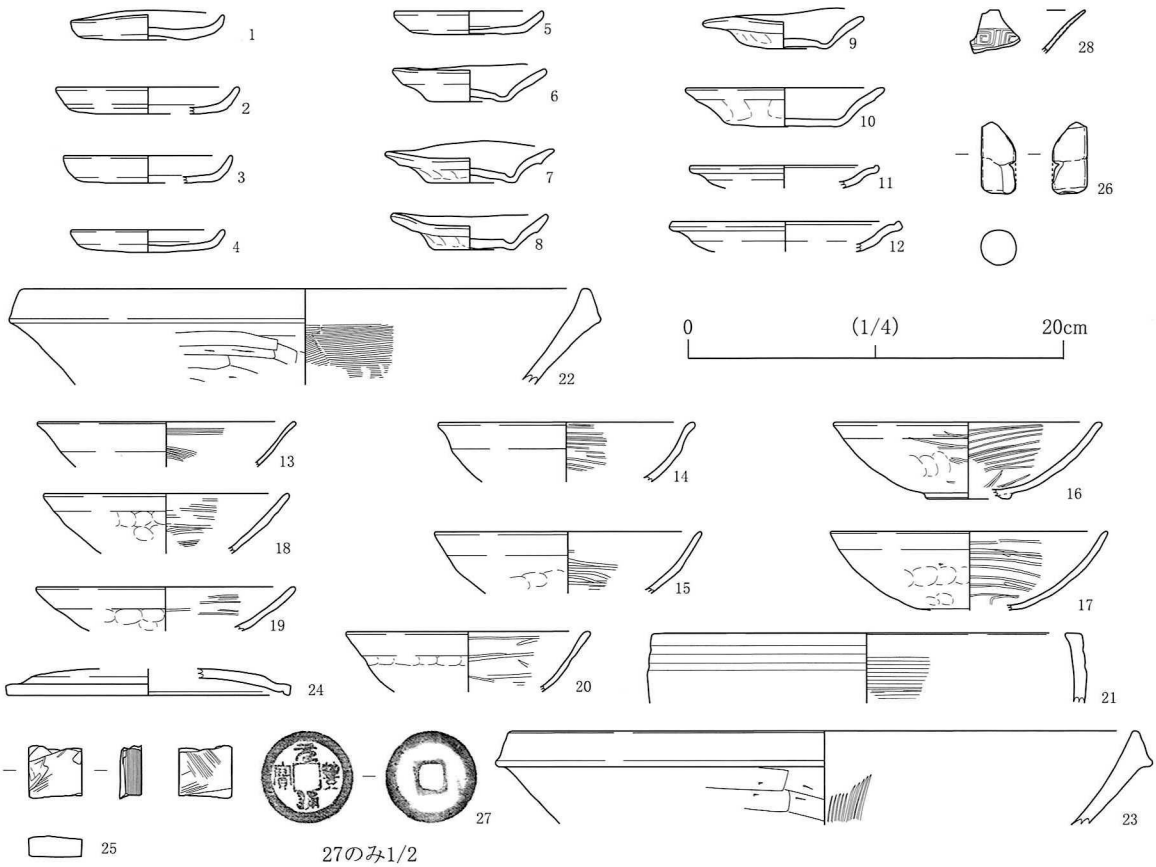
第14層　黒褐色（10YR2/2）粗～中礫混じりシルト。

第15層　暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）細～中礫混じりシルト質粗砂。

第16層　黒褐色（2.5Y3/2）細礫混じり砂質シルト。

堆積状況を確認していく。第３～11層は16世紀以降の整地層である。トレンチ北壁の第７・８・10・11層は、溝又は土坑と考えられる遺構の埋土である。第５層には焼土が含まれる。

下層では、第12層から第14層と第16層が中世のより古い時期の遺物を包含する層である。第13層は第12層を切込み堆積する溝又は土坑と考えられる遺構の埋土である。黄灰色粘土がブロック状に混入する第13層の状況は、東壁、南壁でも同様に確認できた。直下の第14層は、黒褐色の砂礫混じりシルトが均質に堆積しており、上面の第13層からの切込みは確認できなかった。第15層は地山層である。第15層を切込む形で第16層が堆積している。遺構の性格、広がりは不明である。



第４図　岩田遺跡第３次調査出土遺物実測図

4）出土遺物（第４図）

①土師器皿

１～12は土師器皿である。

１～５は、底部は平底を呈し、口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部を指押さえし、口縁部内外面はヨコナデ調整を行う。１～４は上層、５は先行トレンチ出土。12世紀後半の所産である。

６～９は、底部は上げ底を呈し、体部は逆八の字型に開く。口縁部はやや肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。７・９は体部と口縁部の間に稜線をもつ。６・７は上層、８・９は先行トレンチ出土。全て15世紀前半の所産である。

10は、底部は平底を呈し、体部は逆八の字型に開く。口縁部はやや肥厚し外反する。口縁端部は丸く終わる。体部と口縁部の間に稜線をもつ。上層出土。16世紀前半の所産である。

11・12は、口縁部は外反し、口縁端部を内側に巻き込む。風化により調整方法は不明である。下層出土。11世紀代の所産である。

②瓦器椀

13～20は、瓦器椀である。

13・14は、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。下層出土。15は、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。先行トレンチ出土。いずれも12世紀後半。

16は、高台は台形を呈し、体部は内湾気味に立ち上がる。口縁部は外反する。見込みには平行線状の暗文が残る。下層出土。13世紀中葉の所産である。

17は、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はやや外反する。下層出土。13世紀中葉。

18･19は、体部は外上方に立ち上がる。口縁部は、やや外反し、体部との間に段をもつ。下層出土。13世紀後半の所産である。

20は、体部はやや内湾気味に立ち上がり、口縁部は肥厚し、外反する。体部と口縁部の間に段をもつ。下層出土。13世紀後半の所産である。

③瓦質土器

21は羽釜である。口縁部は内傾し、外面に2条の段をもつ。15世紀中葉の所産である。先行トレンチ出土。22は、鉢である。体部は逆八の字形に開き口縁部につづき、口縁端部は丸く終わる。上層出土。26は、擂鉢である。体部は逆八の字形に開き口縁部につづき、口縁端部は面をもつ。体部内面に擂目が10本残る。下層出土。それぞれ14世紀代の所産である。

④その他の出土遺物

24は須恵器杯蓋である。天井部はほとんど立ち上がらない。口縁端部は、つまみ気味に終わる。内外面をヨコナデ調整する。下層出土。8～9世紀代。25は砥石である。色は灰赤色(2.5YR5/2)で、材質は粘板岩である。上下面及び側面2面が残る。先行トレンチ出土。26は土製品である。円筒状を呈し、径は1.8cmを測る。下層出土。27は銭である。「元豊通寶」である。初鋳は1078年である。字体は篆書である。先行トレンチ出土。28は、白磁椀である。体部から口縁部にかけて外上方に伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。体部内面に雷文が残る。下層出土。12世紀後半か。

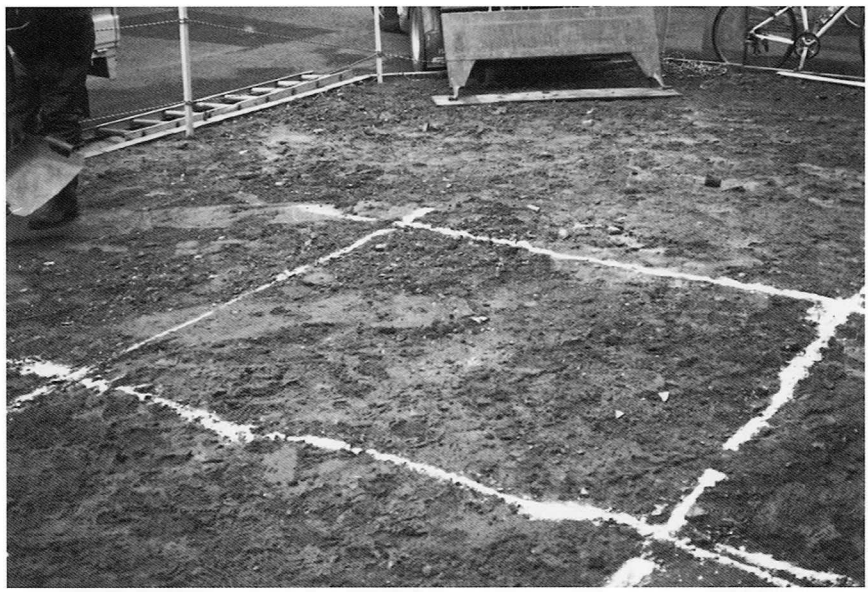
5) まとめ

今回の調査によって、石田神社北西には中世以降の人間活動の痕跡が残されていることが分かった。昭和17年に撮影された航空写真及び昭和36年に作成された地形図によれば、今回の調査地は、石田神社北西に広がる集落の南東隅に位置することが分かる。今回調査で出土した遺物は、中世のみならず、近世以降の継続的な遺物も出土していることから、当集落は少なくとも中世の段階で営まれ、その後現在に至ることが今回の調査で明らかになったといえる。

【参考文献】

東大阪市教育委員会 1975『東大阪市文化財調査報告書　第2冊』
東大阪市遺跡保護調査会 1982『若江遺跡発掘調査報告Ⅰ遺物編』
兵庫県埋蔵銭調査会　永井久美男編 1994『中世の出土銭－出土銭の調査と分類－』
東大阪市教育委員会 2002『東大阪市下水道事業関係発掘調査概要報告 －平成13年度－』

図版1　岩田遺跡第3次発掘調査　遺構

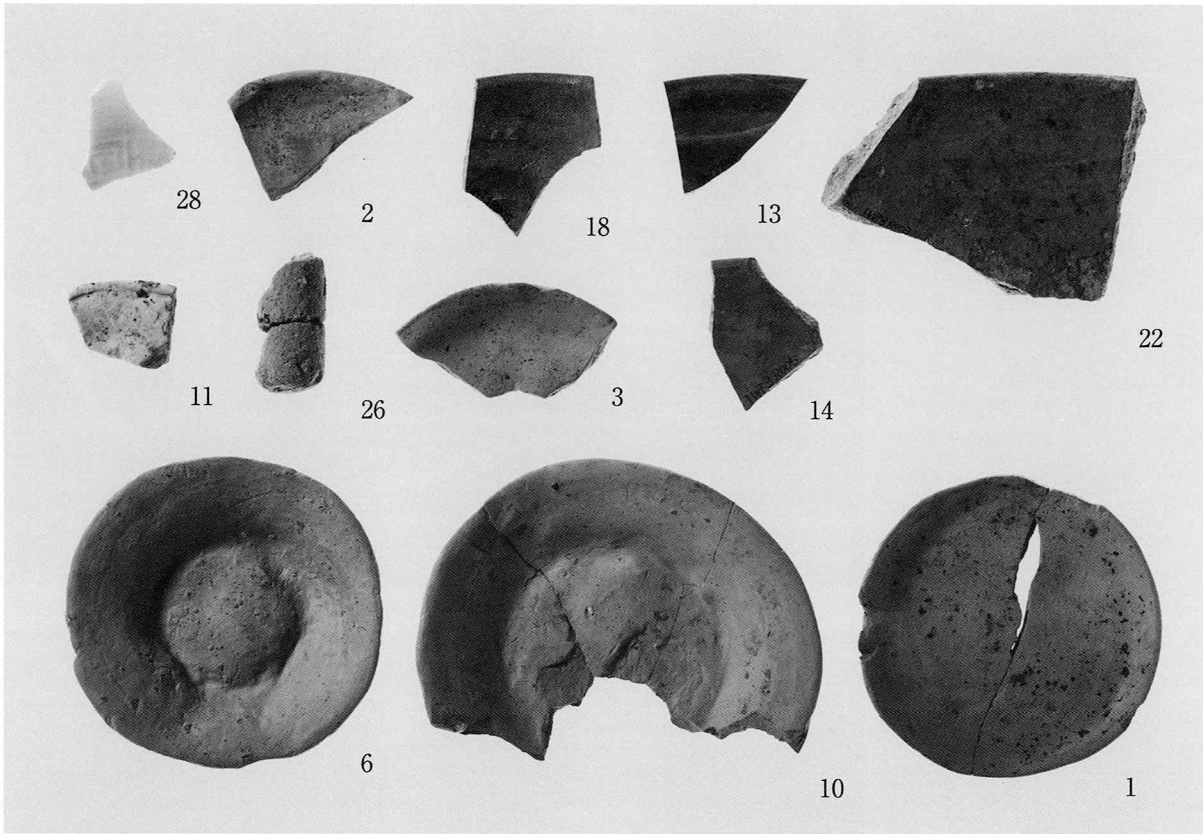


1．本調査箇所
調査区全景
（東より）

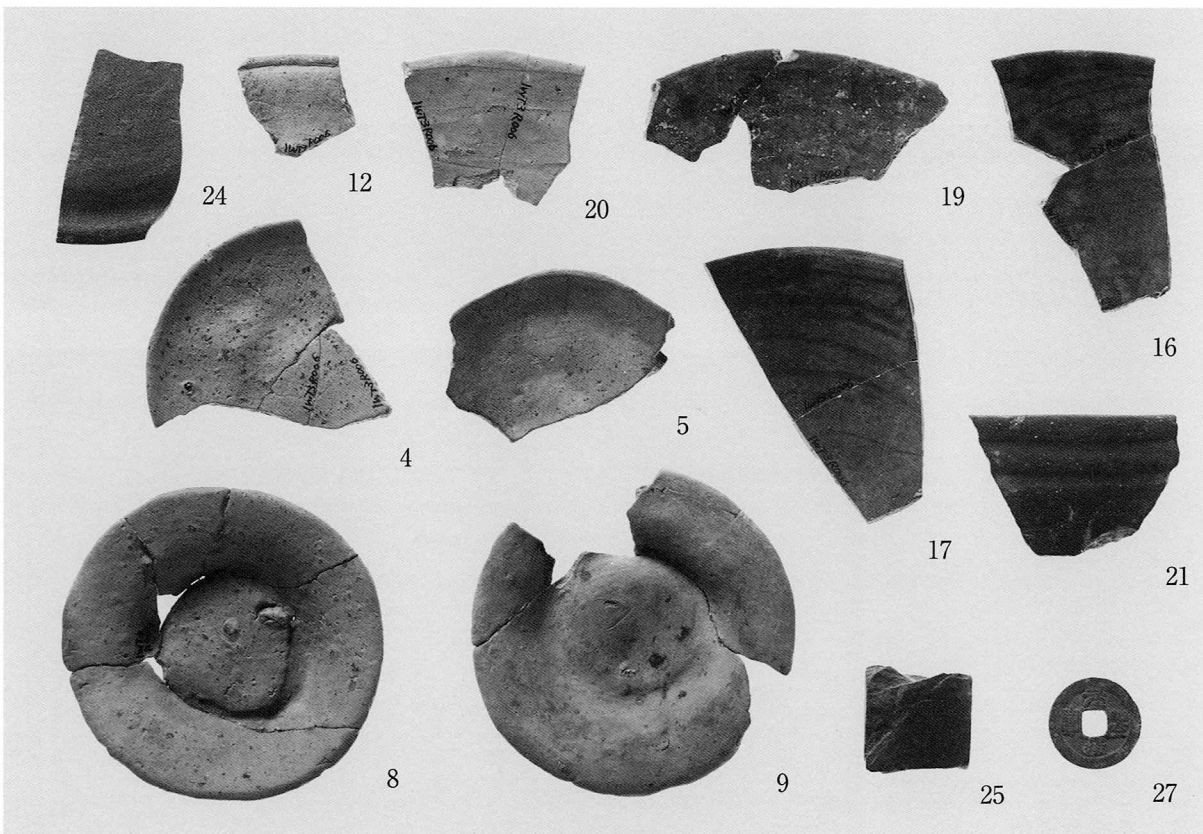
2．本調査箇所
北壁断面
（南より）

3．本調査箇所
完掘状況
（南西より）

図版2　岩田遺跡第3次発掘調査　遺物



1．各層位出土　瓦器・白磁・土師器・土製品



2．各層位出土　瓦器・土師器・須恵器・石製品・銭

第６章　山畑古墳群第34次発掘調査

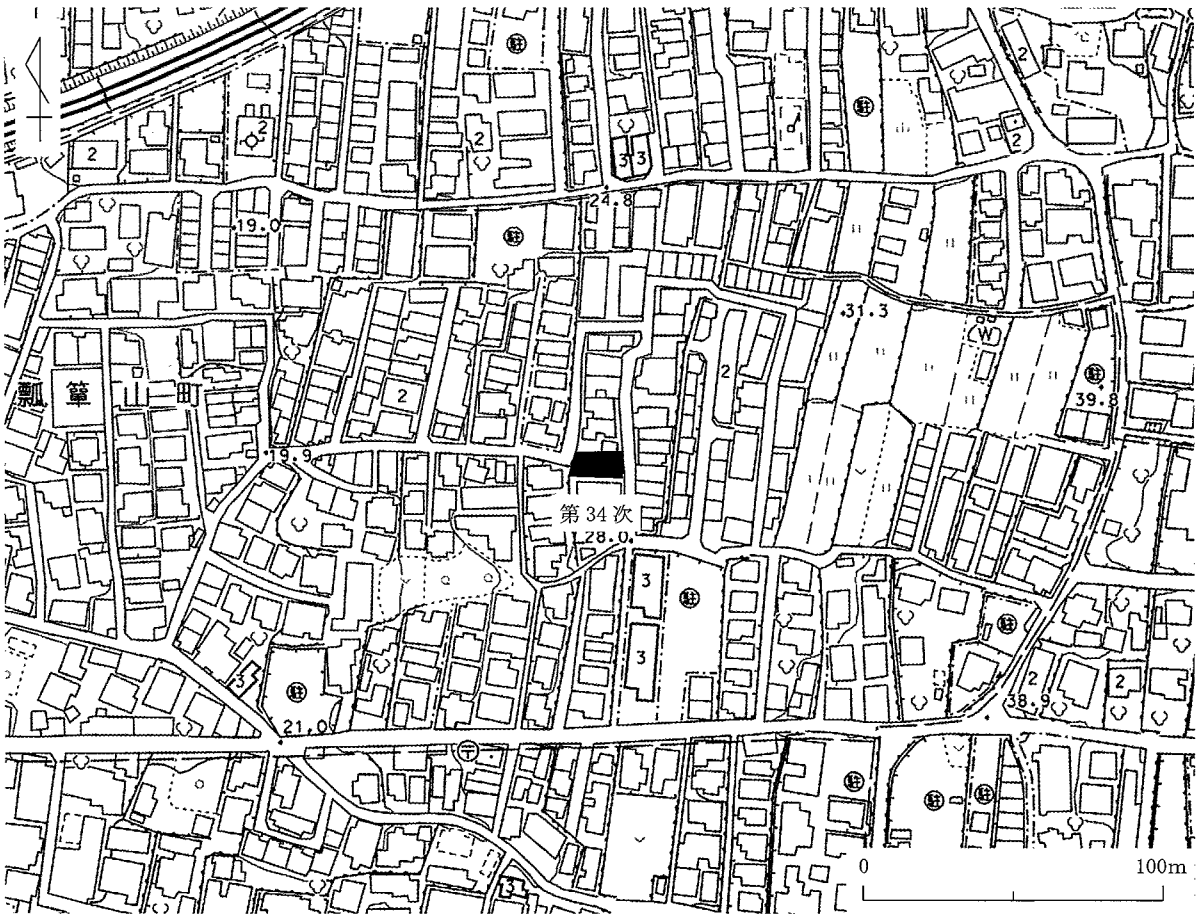
１）はじめに

山畑古墳群は、東大阪市瓢箪山町、上四条町及び客坊町にわたる6世紀前半から7世紀初頭にかけての群集墳である。

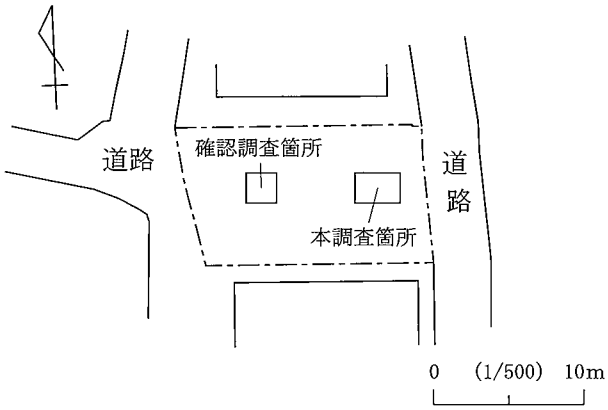
これまでに確認されている古墳は68基を数え、市内最大の群集墳である。ただし、近代以降の開墾などによりその多くは破壊又は欠損を受け、現存している古墳は半数以下の約20基に減少している。昭和30年代より、枚岡市教育委員会（現東大阪市教育委員会）によって、山畑古墳群の発掘調査が進められ、古墳群は直径10m～15m程度の円墳、方墳又は双円墳であったことが確認された。

２）調査の経過

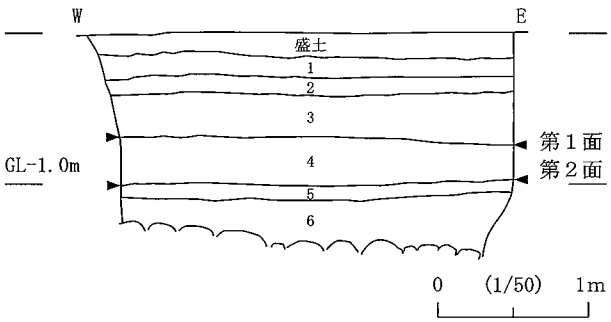
平成25年2月、東大阪市瓢箪山町30番10の一部において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成25年2月25日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、GL-0.4mから-2.0mの間で弥生土器、須恵器、土師器が出土した。この結果に基づき協議代理者との取り扱いについて協議を行い、平成25年2月25日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で10㎡である（第２図）。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図



1. にぶい褐色（7.5YR6/3）小礫～粗砂混じり砂質シルト
2. 褐灰色（10YR4/1）中礫～粗砂混じり粘質シルト
3. にぶい黄褐色（10YR4/3）中礫～粗砂混じり粘質シルト
4. 黒褐色（10YR3/2）大礫～細砂混じり粘質シルト
5. 暗青灰色（5B4/1）粗～中砂混じり粘質シルト
6. 青灰色（5B6/1）粗～中砂混じり粘質シルト

第３図　本調査箇所北壁断面

３）調査の概要

層序（第３図）

盛土。

第１層　にぶい褐色（7.5YR6/3）
　　小礫～粗砂混じり砂質シルト。

第２層　褐灰色（10YR4/1）
　　中礫～粗砂混じり粘質シルト。

第３層　にぶい黄褐色（10YR4/3）
　　中礫～粗砂混じり粘質シルト。

第４層　黒褐色（10YR3/2）
　　大礫～細砂混じり粘質シルト。

第５層　暗青灰色（5B4/1）
　　粗～中砂混じり粘質シルト。

第６層　青灰色（5B6/1）
　　粗～中砂混じり粘質シルト。

第１層は、近世の耕作土と考えられる。第２層も耕作土と考えられるが時期は不明である。第３～６層は扇状地堆積層である。遺物は第３～６層から出土した。第５層は土壌化層である。第６層の下には、人頭大の巨礫が広がっていた。第６層は弥生時代後期と考えられることから、それ以前の土石流堆積と考えられる。

第４層上面を第１面、第５層上面を第２面として調査を行ったが、遺構を検出することはできなかった。

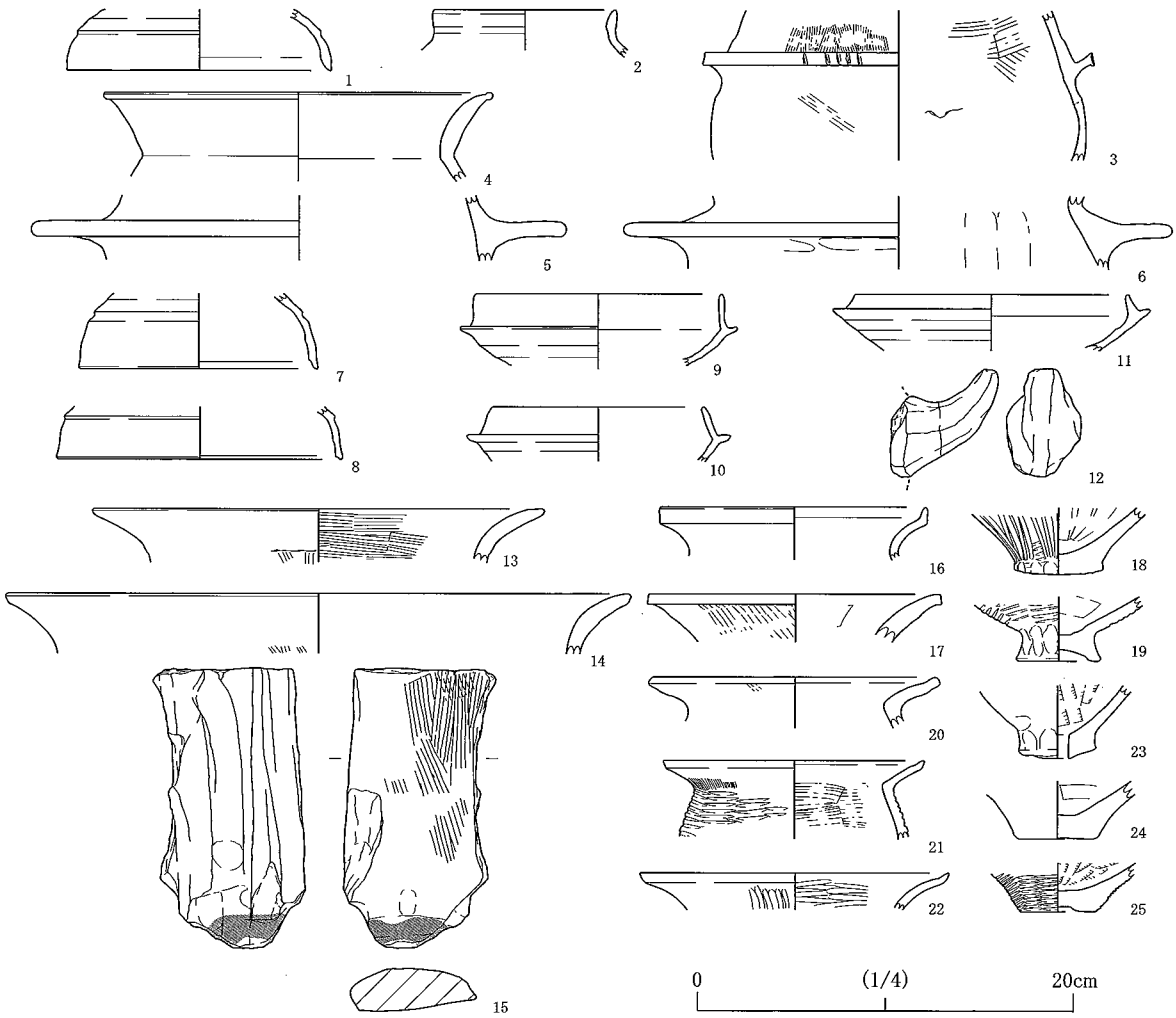
４）出土遺物（第４図）

第３層

１は須恵器杯蓋である。口縁部と体部の境の稜は緩やかで口縁部は丸くおさめる。２は須恵器無頸壺である。いずれもTK10型式。３は弥生土器手焙型土器である。体部から蔽部にかけての破片で突帯に刻みが施される。内外面にハケメ調整が残る。４は土師器甕である。「く」の字に屈曲させ口縁部を外反させる。５・６は土師器羽釜である。いずれも長い鍔を持ち、端部を丸くおさめる。土師器は６世紀前半のものであろう。

第４層

７・８は須恵器杯蓋である。いずれも口縁部と体部の境は緩やかで、口縁部内面に段を有する。９～11は須恵器杯身である。７・９はMT15型式、８・10・11はTK10型式である。12は甑の把手である。13・14は土師器甕である。大きく外反させる口縁部を持つ。いずれもハケメ調整を施す。15は竈の一部である。粗いハケメが残る。下部には被熱による変色が認められる。いずれも６世紀前半であろう。16～19は弥生土器である。16・17は壺の口縁部、18は壺の底部、19は鉢の底部である。弥生時代後期後葉。



第４図　山畑古墳群第 34 次調査出土遺物実測図

第５層

20～24は弥生土器である。20・21は甕である。21は口縁部を「く」の字に屈曲され、端部をわずかにつまみ上げる。外面にタタキ、内面にハケメ調整が施される。22は壺の口縁部である。内外面ともにミガキが施される。23は鉢の底部である。穿孔が施される。24は壺の底部である。いずれも弥生時代後期後葉。

第６層

25は弥生土器甕の底部である。外面は細かなタタキが下部まで残り凹底となる。弥生時代後期後葉。

５）まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後葉、古墳時代後期前半の包含層を確認するにとどまった。平成元年７月に調査地点よりも西側で確認調査を行った際にも、弥生時代後期の土器を検出しており、付近に後期の集落があったと推測される。

古墳時代後期の土器は、山畑古墳群と同時期のものであり、古墳に関連したものであろう。

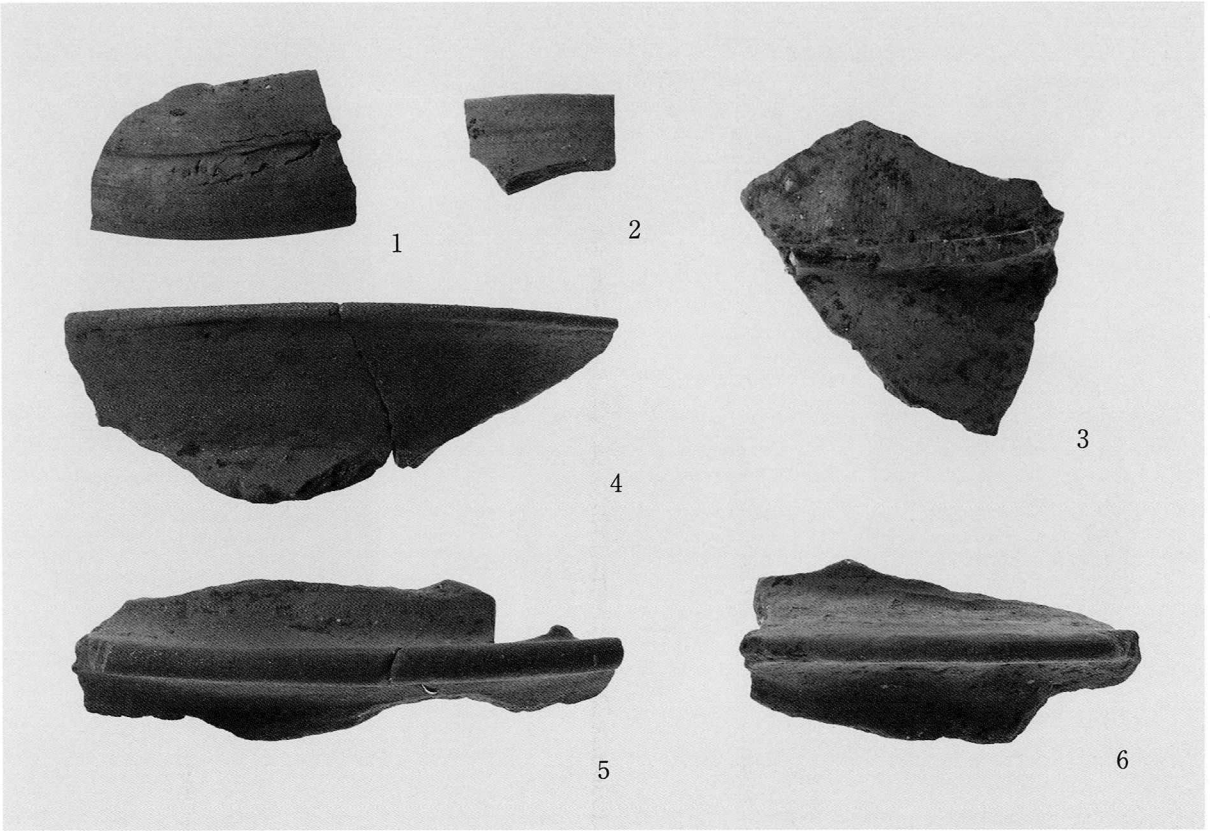
図版1　山畑古墳群第34次発掘調査　遺構

1．調査風景
（南西より）

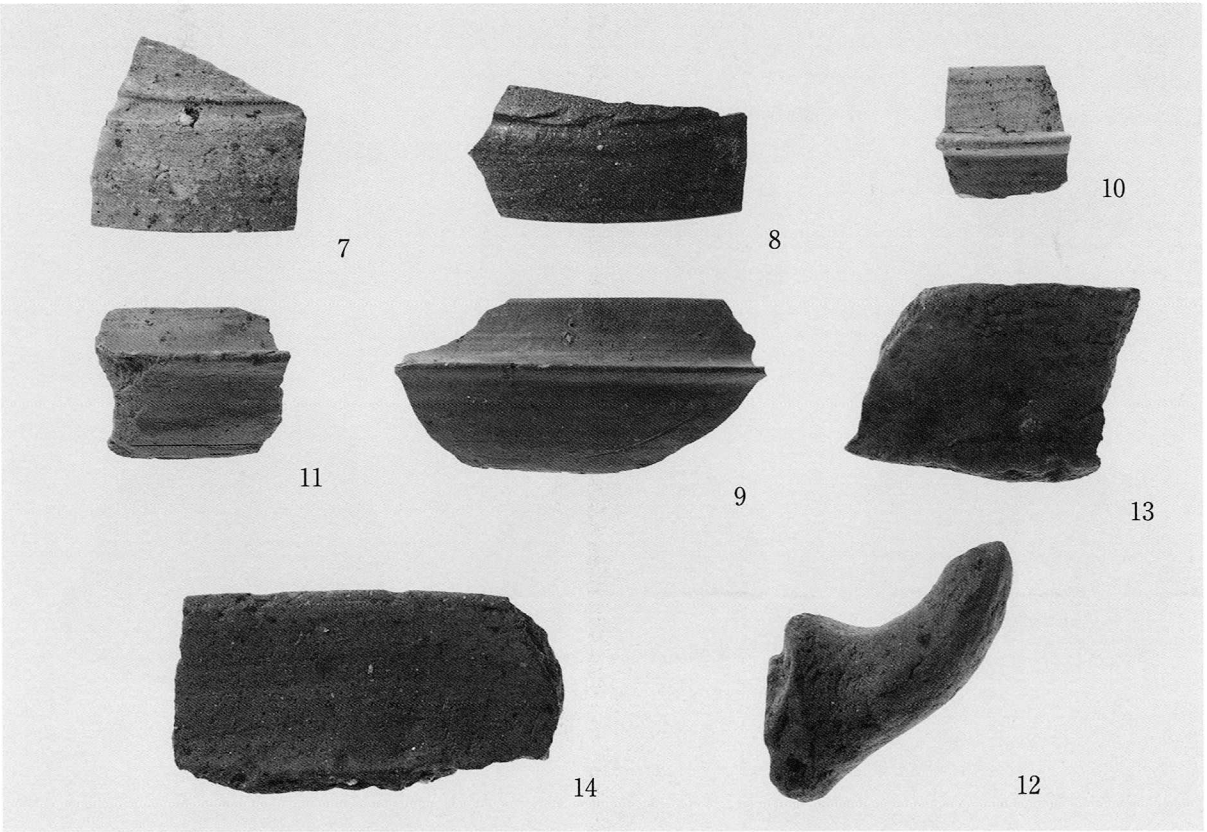
2．本調査箇所
第２面
（西より）

3．本調査箇所
北壁断面
（南より）

図版2　山畑古墳群第34次発掘調査　遺物

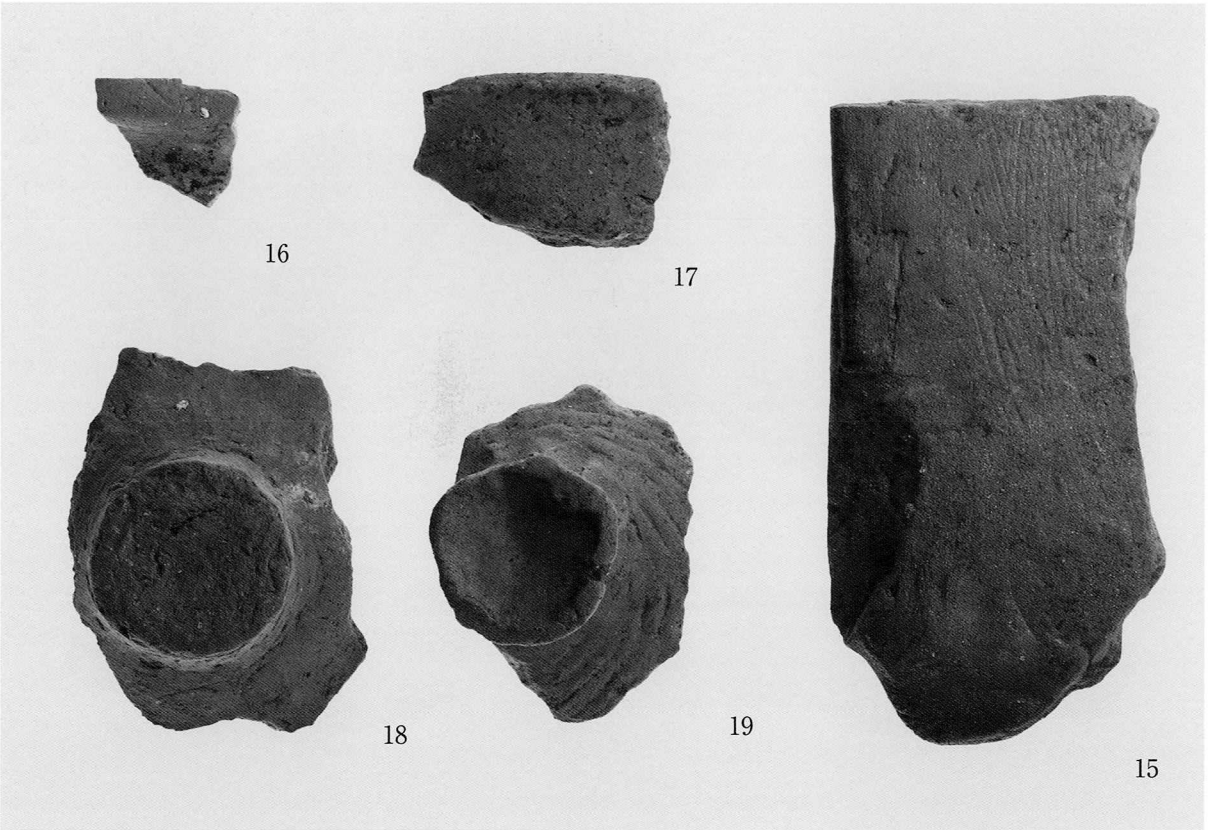


1．第3層出土　須恵器、土師器、弥生土器

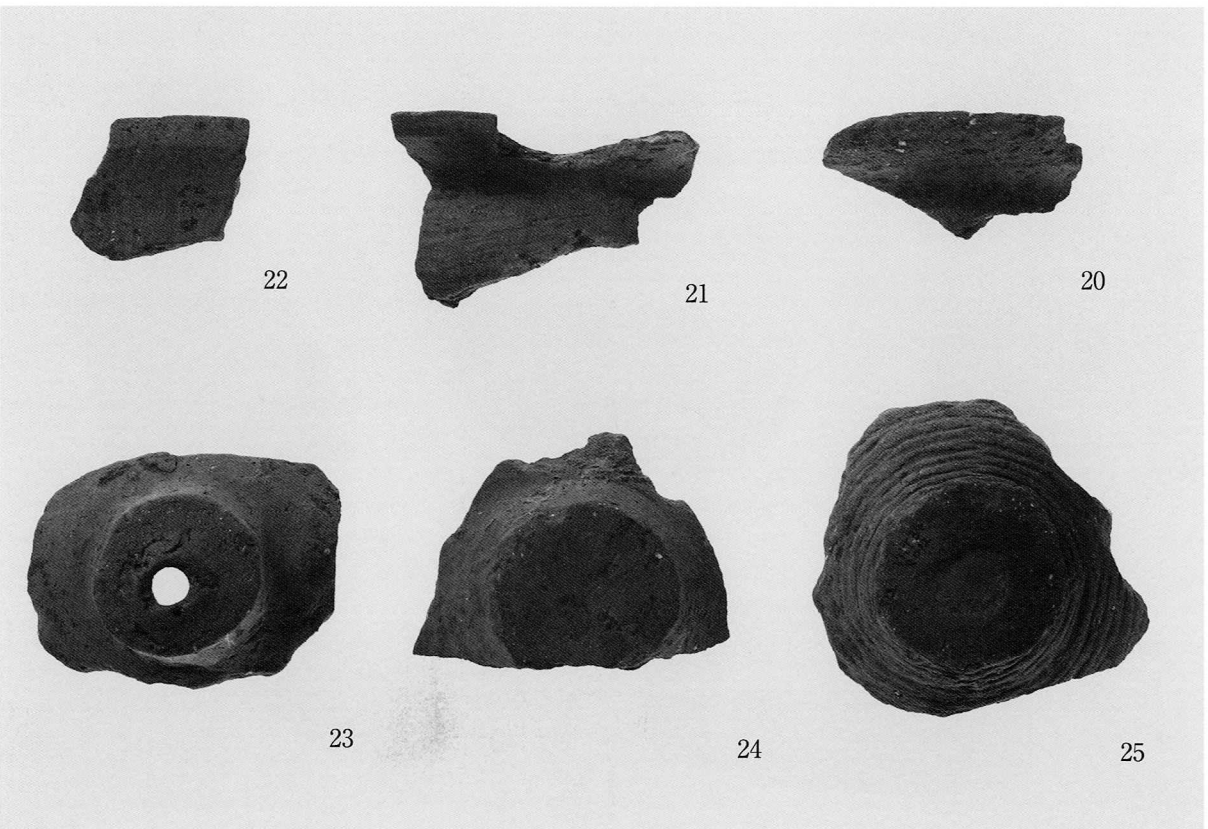


2．第4層出土　須恵器、土師器

図版3　山畑古墳群第34次発掘調査　遺物



1．第４層出土　土師器、弥生土器



2．第５・６層出土　弥生土器

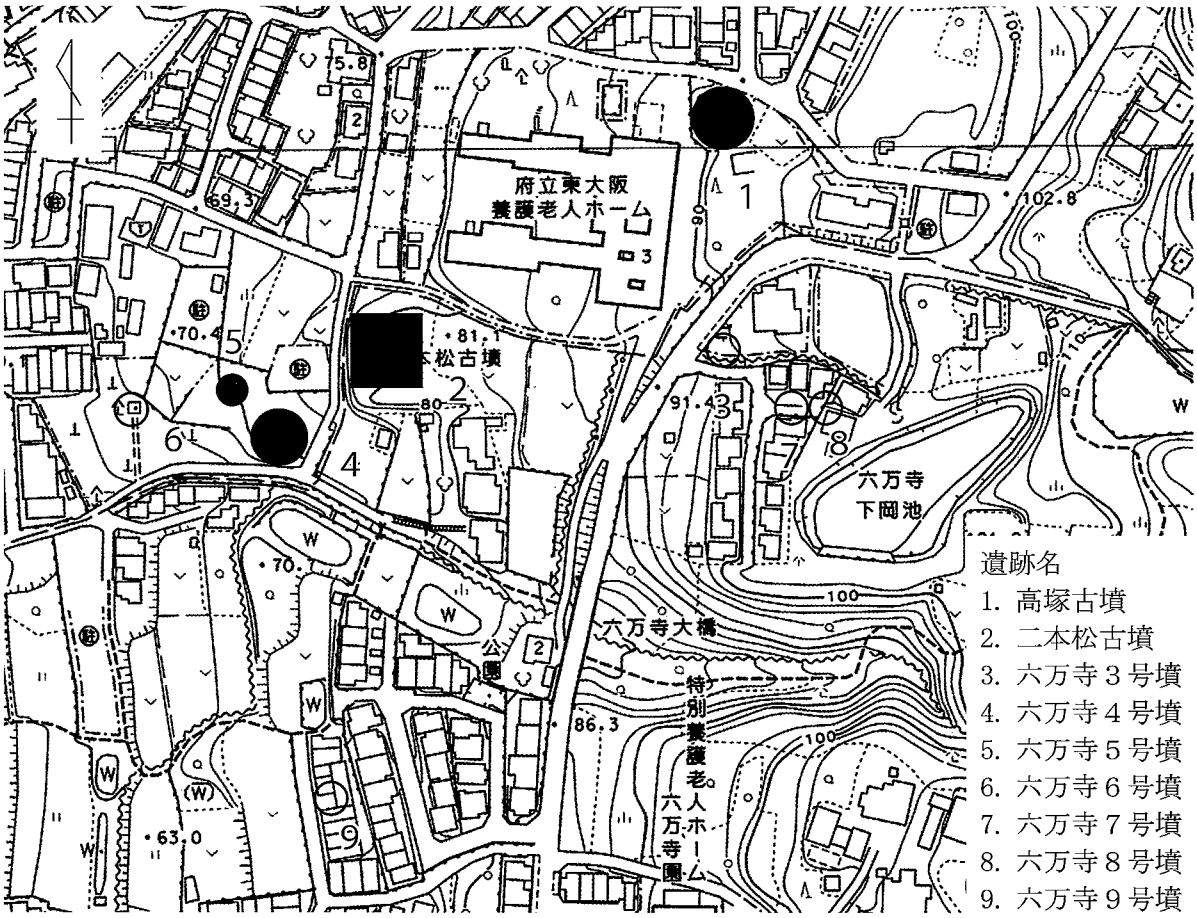
第７章　岩滝山遺跡第11次発掘調査（平成24年度高塚古墳調査）

１）はじめに

高塚古墳（六万寺１号墳）は、二本松古墳（２号墳）などを含めた六万寺古墳群の一つである（第１図）。二本松古墳は、昭和 39（1964）年に調査が行われており、両袖式の横穴式石室を持つ方墳であることが判明している。３号墳は、道路工事の際に発見されたが調査されることなく破壊された。二本松古墳の南西に位置する共同墓地内に３基の古墳（４・５・６号墳）がある。近年では、宅地造成の際に新たに７・８号墳が発見された。７号墳は墳丘上部が削平されていたが、無袖式の横穴式石室の下半部が残されていた。８号墳は小石室であり、石室内からは鉄釘が発見され、木棺を用いた古墳であったと考えられている。９号墳は、浄化槽設置に伴う調査の際に横穴式石室の一部が検出された。工事が横穴式石室に影響が及ばないことを確認して、現状保存とした。６世紀半ば～７世紀初頭にかけて築造された古墳群である。

２）これまでの調査成果

これまで高塚古墳の調査は行われておらず、今回が初めての調査となる。しかし、いくつか高塚古墳に関する資料が公表されており、ここで紹介する。



第１図　高塚古墳位置図　(1/2,500)

・枚岡市教育委員会 1965『枚岡市二本松古墳の調査』

昭和 40（1965）年に刊行された報告書に下記の記載がある。

「また北東約 0.2㎞のぶどう畑の中に高塚古墳と呼ばれる円墳がある。石室は埋まっているが墳丘は完全に残っており美しい稜線の流れがよくわかる。」

・四条史編さん委員会 1977『河内四条史』第２冊　史料編Ⅰ

須恵器の杯が高塚古墳の出土遺物として掲載されている。掲載の経緯に関して詳細は不明であるが、掲載された資料は TK209～TK217 型式に相当し、高塚古墳の時期を知る資料である。

・東大阪養護老人ホーム 1992「高塚古墳」

平成４（1992）年に設置された看板で、現在も墳丘の西側に設置されている。

「墳丘の形態は円墳で、直径 22m、高さは北側で約 2.5mである。買収以前はブドウ畑に利用され、内部主体の横穴式石室が開口していましたが、埋められて石室の形式や規模、遺物の出土等については、まったく不明です。」

・藤城泰 1996「高塚古墳付近採取の須恵器」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.6, No.4（財）東大阪市文化財協会

高塚古墳の付近で採取された遺物として須恵器の高杯が紹介されている。TK47～MT15 型式に相当するもので、６世紀初頭の所産である。（秋山・池谷 2000）の指摘にもあるようにこの須恵器は、一般的な群集墳の盛行時期に比べると時期が古く、直接伴う遺物である可能性は低い。

以上が高塚古墳に関するすべての資料である。これまでの知見についてまとめると、墳丘の直径 22m、高さ 2.5mを測る円墳であり、横穴式石室を内部主体とする。かつては石室が開口していたが、今は閉塞されており、周辺で６世紀初頭にまで遡る須恵器が採取されたが古墳に伴う可能性は低く、別の機会に採取された須恵器から７世紀初頭の古墳といえる。

３）調査の経過

今回の調査は現状保存を目的とした調査であり、高塚古墳の規模と埋葬施設の位置を確認することを目的とした。

先述のとおりこれまで発掘調査は行われておらず、断片的な内容しか判明していない。そのため、まず測量調査を行うことにより、古墳の現況記録を作成した（第２図）。次に、墳丘の規模と埋葬施設を確認するための調査区を２箇所設定して発掘調査を行った。調査区の設定は、既存の建物や樹木を避ける形で最も効果的な場所を選定した。調査区の配置は第３図のとおりである。

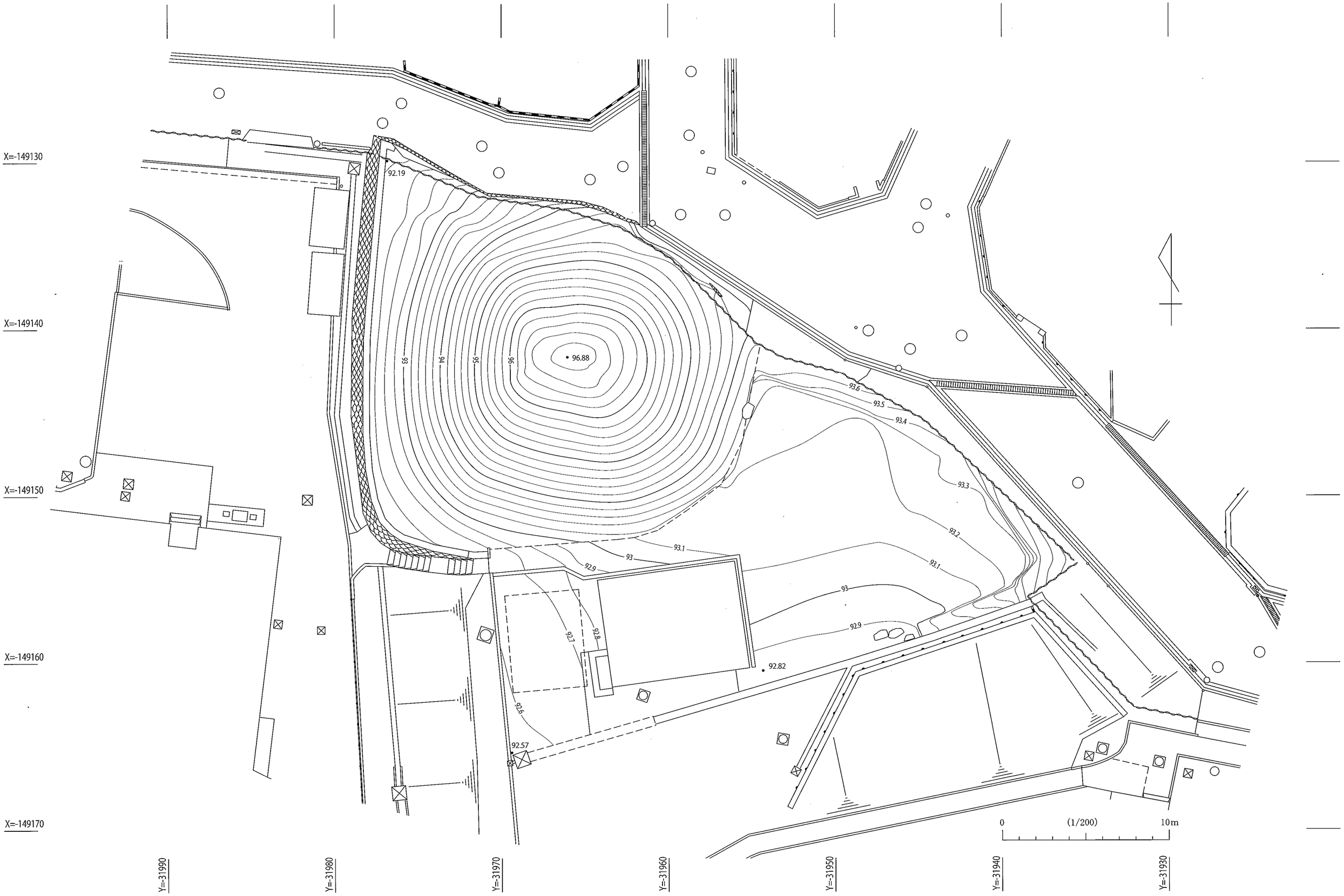
４）調査成果

第１トレンチ（第４図）

墳丘南端と埋葬施設の位置を確認する目的で設定したＴ字状のトレンチである。南北方向は長さ 13.9m、幅１m、北側部分は 1.8m×５mの幅をとった。面積は約 40㎡である。

層位

調査はまず、表土を除去した段階で精査を行った。表土直下に墳丘が残されている可能性を考慮し


X=-149130
X=-149140
X=-149150
X=-149160
X=-149170
Y=-31990
Y=-31980
Y=-31970
Y=-31960
Y=-31950
Y=-31940
Y=-31930
92.19
96.88
93
94
95
96
93.6
93.5
93.4
93.3
93.2
93.1
93
92.9
93.1
93
92.9
92.8
92.7
92.6
92.82
92.57
0
(1/200)
10m

第２図　高塚古墳現況図

第３図　調査トレンチ配置図

て、慎重に調査を開始したが、しまりが弱い土が一面にあらわれるのみであった。古墳築造の際に成された盛土や基盤層とは明らかに異なる印象を受けた。そのため、下層の堆積状況を確認する側溝を人力によってスコップや手ガリなどを使用して慎重に掘削した。側溝を掘削中に、土師器皿・羽釜の破片が出土したことから、表土直下の土は古墳築造に伴う盛土ではないと判断した。結果的に基盤層に達するまで３層の堆積層を確認したが、最下層である第３層から瓦器が出土したことから、これらの層は後世の造成土であることが判明した。第３層を掘削後、一面に基盤層があらわれた。基盤層は、赤褐色を呈し、花崗岩が風化して砂や粘土に変化したものである。

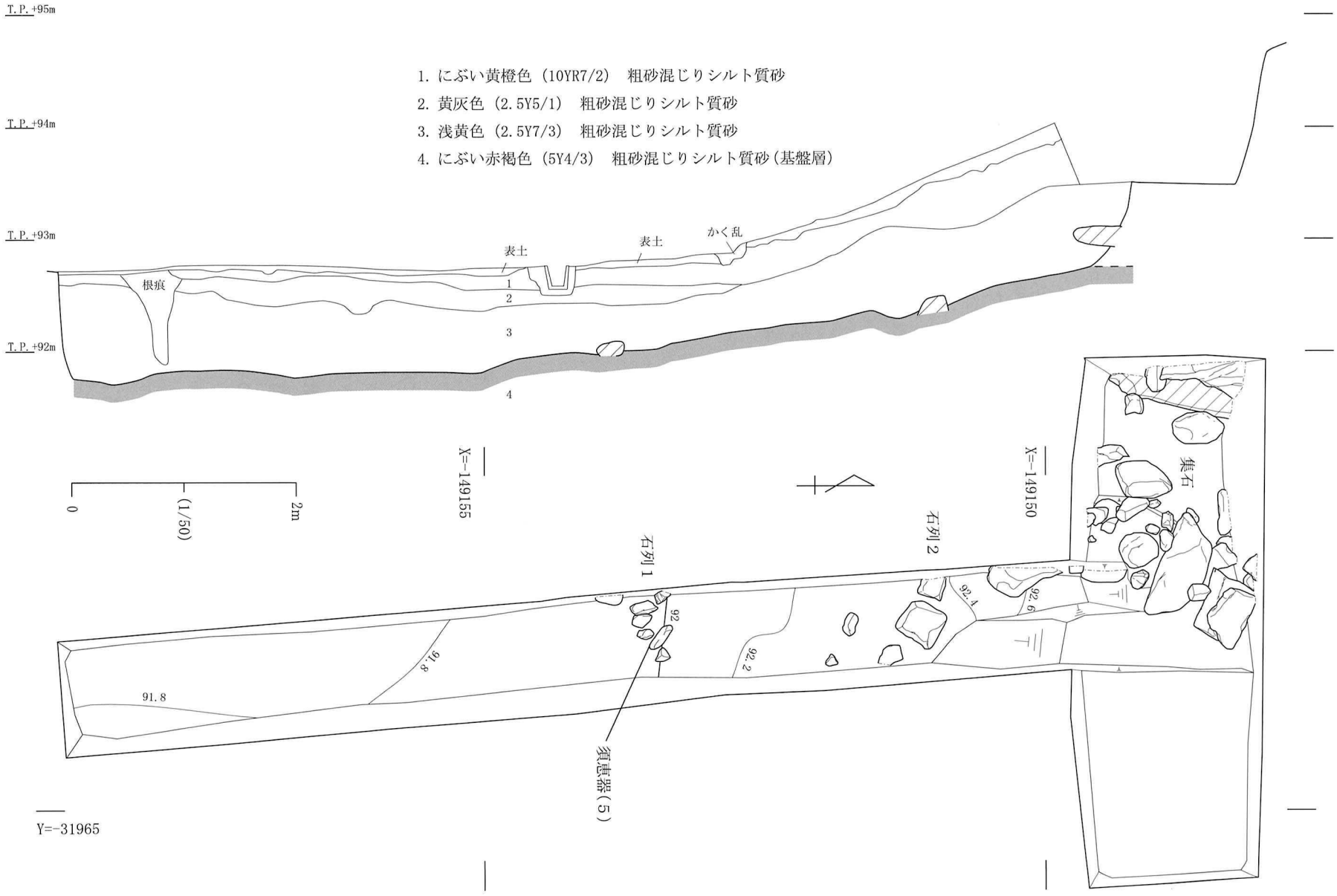
遺構

石列

基盤層上面の２箇所で石列を検出した。

石列１は拳大の河原石を並べたもので、石と接するように須恵器の台付壺（第５図５）が出土した。石列１を境として北側で基盤層が高くなっており、傾斜変換点に石列１が存在する。この石列１が古墳の葺石であるのか判然としないが、古墳の墳丘裾部の名残りと考える。

石列２は、30cm大の矩形を呈する石が２つ並んでおり、東西方向に平坦面をそろえている。古墳に



第4図　第1トレンチ平面・断面図

伴うものかは不明である。

集石

北西部分で集石を検出した。いずれの石も先述した造成土の内に含まれており、後世の改変によるものであると判断した。ただし、集石を除去していくと巨大な石（第４図平面斜線部分）を T.P. ＋93m の地点で検出できた。この石は、長方形を呈し軸を南北にする。石の大きさや平坦面を持つ特徴から、横穴式石室を構成する石の一つである可能性が高い。

出土遺物（第５図）

１・２は須恵器杯蓋である。２は口縁部と体部の境の稜は緩く、端部は丸くおさめる。いずれも TK209 ～ TK217 型式。３は土師器の甕の口縁部である。外反する口縁部は、さらに端部を屈曲させ、上部に平坦面をつくりだす。６世紀の所産である。４・５は須恵器の台付長頸壺の脚部である。４は外面にハケメを施したのちナデによって消されている。５は、カキメを施す。いずれも TK209 ～ TK217 型式であろう。６～８は土師器の皿である。いずれも 14 世紀代であろう。１・２・３・６・７は第２層、４は第３層、５は石列１と基盤層との隙間から出土した。この他にも小片のため図化していないが、瓦器・土師器・須恵器・弥生土器が出土した。

第２トレンチ（第６図）

墳丘東端を確認する目的で設定したトレンチである。当初は１m×８mのトレンチを設定して調査を開始したが、墳丘上部が後世の造成土であることが判明したため、古墳本来の形状を確認するため墳丘頂部までトレンチを拡張し、最終的には 1.25m×13m、面積 16.25㎡となった。

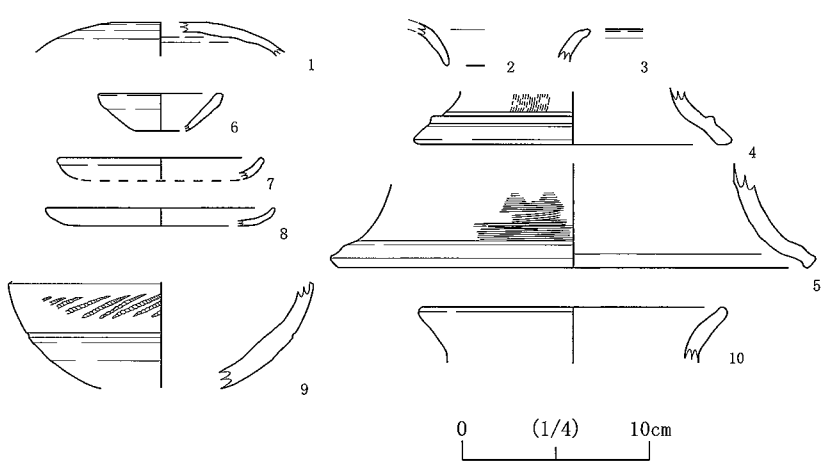
層位

第１トレンチと同様に表土を掘削し、基盤層上面まで人力による掘削を行った。東半において、表土直下より第１トレンチと同様に３層の堆積層を確認した。

トレンチ東端から 10.3m、T.P.+94.8mの地点で基盤層が平坦になっている部分があり、それより上部は第７層が覆っている。このことから現在の墳丘はそのほとんどが後世の造成によってなされてものであることを確認できた。

遺構

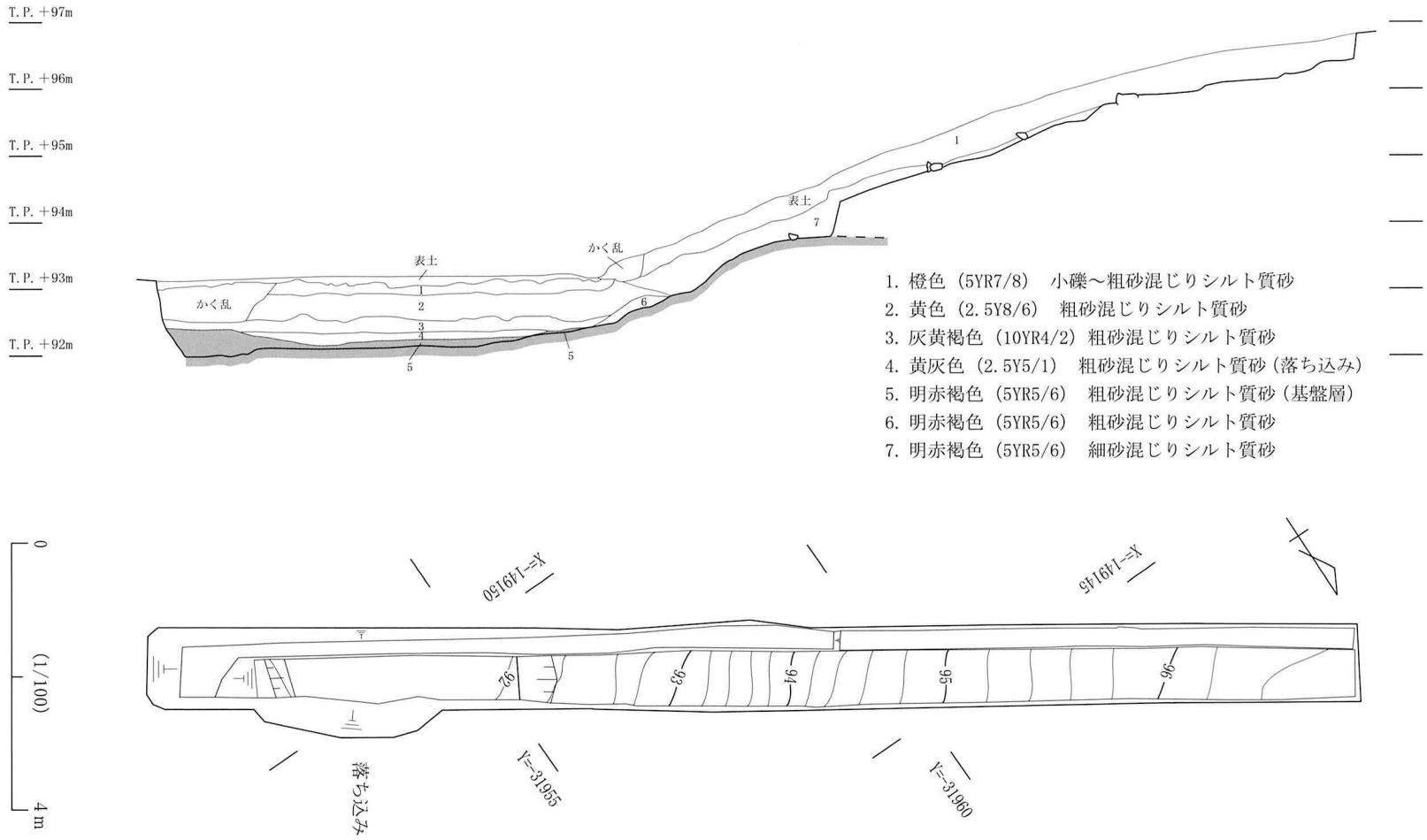
基盤層上面で落ち込みを検出した。トレンチの幅が狭く全形を知ることはできないが、深さは 20 cmを測る。埋土からは瓦器の破片が出土した。この落ち込みは墳丘裾部を掘削することにより形成されたものと考えられるが、それがどの程度の規模であったのかトレンチの幅が狭く判断できない。墳丘裾部に関して明示するものはなく、明確な裾部は不明である。



第５図　岩滝山遺跡第 11 次調査出土遺物実測図

出土遺物

９は須恵器の台付長頸壺の体部である。２条の沈線の間



第６図　第２トレンチ平面・断面図

X=-149130
X=-149140
X=-149150
X=-149160
X=-149170
Y=-31990
Y=-31980
Y=-31970
Y=-31960
Y=-31950
Y=-31940
Y=-31930
0
(1/200)
10m

第７図　高塚古墳平面図

に列点文がめぐる。TK209～TK217 型式であろう。10 は土師器の羽釜である。口縁端部内面に緩やかなナデがめぐる。6 世紀代であろう。9・10 は第 3 層から出土した。その他に陶器・瓦器・土師器・須恵器が第 1 ～ 3 層より出土した。

5）まとめ

中世以降の改変によって古墳本来の墳丘は大きく掘削されており、墳丘規模を決める明確な手掛かりを検出することはできなかった。葺石や周溝といった外表施設の有無も不明であり、さらなる調査によって確定していきたい。

墳丘自体は、現在の墳丘がある東から南にかけての基盤層を掘削し、その土を用いて構築していたと考えられる。

埋葬施設については、第 1 トレンチで横穴式石室の一部と考えられる石を検出した。過去の記述のとおり、横穴式石室があったと考えられる。

出土遺物はほとんどが中世に属するものであるが、古墳時代後期後葉に属する土器が出土した。出土した遺物は、『河内四条史』に掲載されている遺物と同時期であり、TK209～TK217 型式である。

今後の課題は、横穴式石室の規模とその構造の解明である。さらに調査を進め高塚古墳の実態について把握していきたい。

【参考文献】

秋山浩三・池谷梓 2000「五里山古墳群・花草山古墳群と採取資料の検討」『大阪文化財研究』第 19 号　財団法人大阪府文化財調査研究センター

表 1　六万寺古墳群の調査成果

名称	墳形（規模m）	石室構造	出土遺物	築造時期	文献
六万寺 1 号墳（高塚古墳）	円（22）	不明	須恵器	TK209 ～ TK217	本書
六万寺 2 号墳（二本松古墳）	方（15）	両袖	須恵器・土師器・耳環	MT85	枚岡市教育委員会 1965『枚岡市六万寺町二本松古墳の調査』
六万寺 3 号墳	不明	不明			東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳（改訂版）』
六万寺 4 号墳	円（17）	両袖			東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳（改訂版）』
六万寺 5 号墳	不明	不明			東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳（改訂版）』
六万寺 6 号墳	不明	不明			東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳（改訂版）』
六万寺 7 号墳	不明	無袖	須恵器・土師器・鉄鏃・鉄釘	飛鳥Ⅰ式以降	財団法人東大阪市文化財協会 2000『岩滝山遺跡第 6 次発掘調査報告書』
六万寺 8 号墳	不明	小石室	鉄釘	飛鳥Ⅱ式以降	財団法人東大阪市文化財協会 2000『岩滝山遺跡第 6 次発掘調査報告書』
六万寺 9 号墳	不明	不明			東大阪市教育委員会 2001『東大阪市の古墳（改訂版）』

図版1　岩滝山遺跡第11次発掘調査　遺構

1．高塚古墳全景
（南東より）

2．第1トレンチ
調査箇所
（南より）

3．第1トレンチ
全景
（南より）

図版2　岩滝山遺跡第11次発掘調査　遺構

1．第1トレンチ
石列1
（南より）

2．第1トレンチ
石列2
（南より）

3．第1トレンチ
集石
（南西より）

図版3　岩滝山遺跡第11次発掘調査　遺構

1．第2トレンチ
全景
（南東より）

2．第2トレンチ
傾斜変換点
（南より）

3．第2トレンチ
基盤層と造成土の境
（北より）

第８章　薬師寺跡第１次発掘調査

１）はじめに

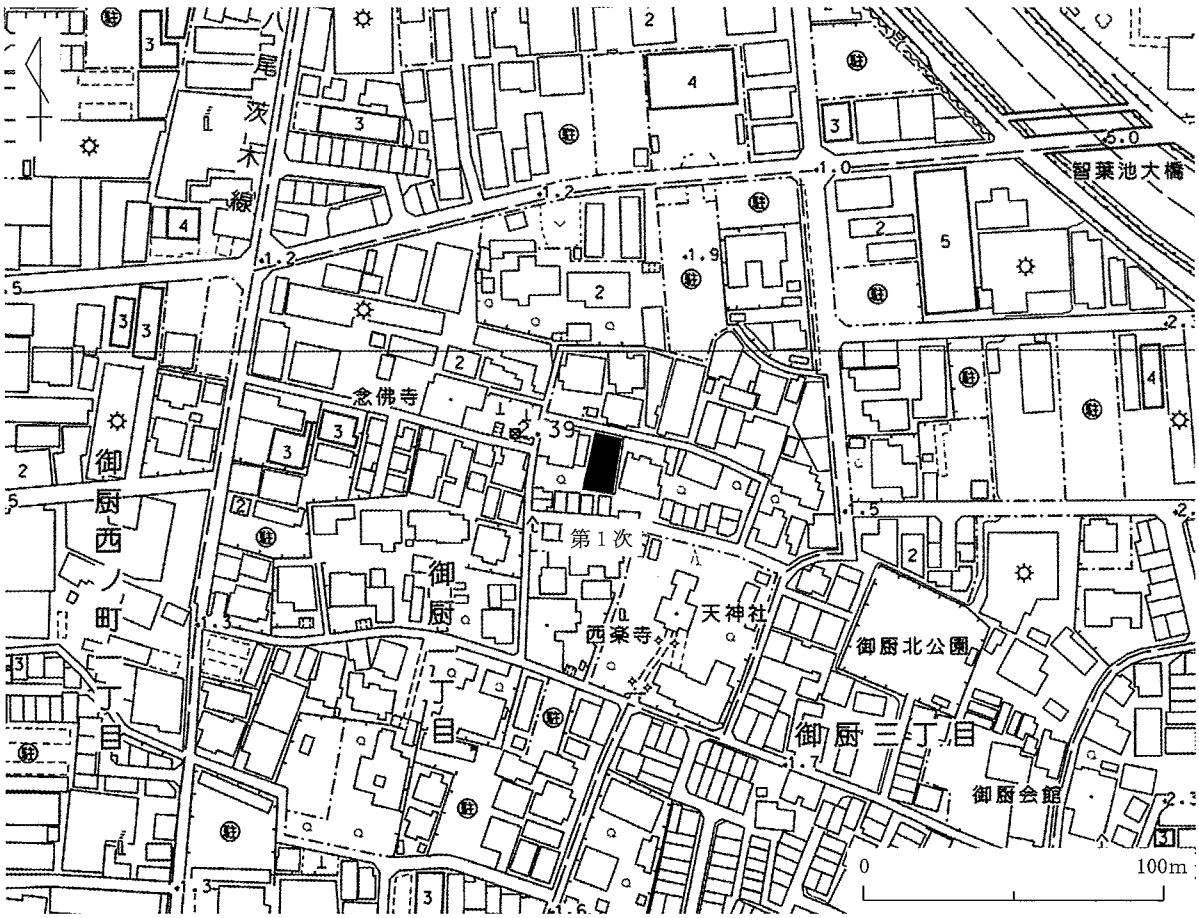
薬師寺跡は、御厨一丁目と三丁目に位置する中世の社寺跡である。

本遺跡は、昭和 56（1981）年に周知の埋蔵文化財包蔵地とされた。薬師寺跡に関する記載としては、中河内郡役所 1923『中河内郡誌』に詳しいので以下にその全文をあげる。

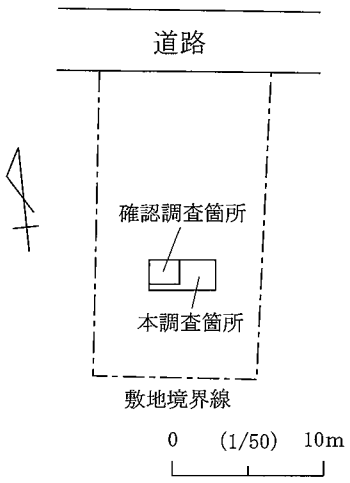
「遺跡地名発掘物より推定するに広壮なる大伽藍なりしものの如し。意岐部村法観寺及加藤氏邸の付近を門屋と言い伝え、神社の後を寺内小路と称え、西楽寺より西を中小路と言い、神社の鳥居前を出口と言い、長田新家の方面に燈明田と言う地名残り、神社より西北に当る地よりは祭器五六個発掘せり。この方面の地において古寺の瓦の破片を発見することしばしばあり。廃退せし時代等は不詳なり。御厨天神社内に一基の石燈籠あり、薬師寺の遺物ならんと言い伝う。一対の中片方は大和秋篠寺に本尊薬師如来と共にあり。なお地名に北の坊及び東の坊存す。」（旧字体を新字体に改めた。）

２）調査の経過

平成25年5月、東大阪市御厨一丁目1132番1において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は、柱状改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 25 年 5 月 22 日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、中世の井戸を検出した。この結果に基づき協議代理



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図

者と取り扱いについて協議を行い、同日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で9㎡である（第２図）。

３）調査の概要

層序（第３図）

盛土。

第１層　黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルト。

第２層　褐灰色（7.5YR5/1）粘質シルト。

第３層　褐灰色（7.5YR5/1）粘質シルト。
　　黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト混じる。

第４層　褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルト。

第５層　黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト。
　　褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルトが偽礫で混じる。

第６層　黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト。
　　褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルトが互層となる。

第７層　灰色（N5/0）粘土。

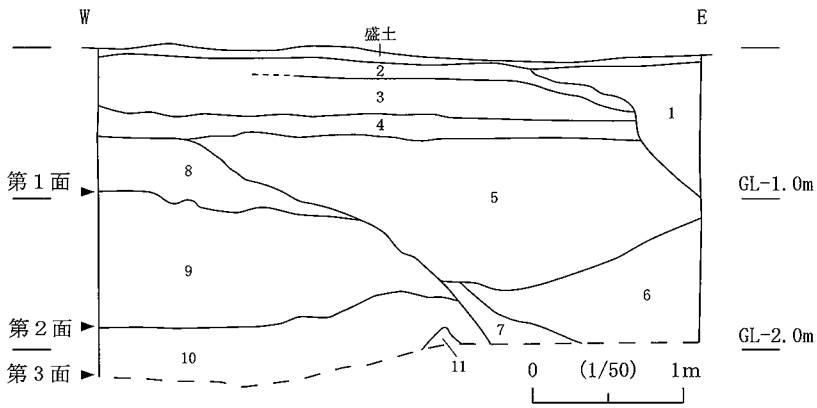
第８層　灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルト。

第９層　黒褐色（10YR3/1）粘質シルト。

第10層　黒色（10YR2/1）粗～細砂混じり砂質シルト。

第11層　浅黄色（2.5Y7/3）小礫～粗砂混じり砂質シルト。

第１層は、土坑の埋土である。近世の陶磁器が出土した。第２～４層は近世の耕作土である。第５～７層は土坑１の埋土である。第９層は整地土である。第10層は、井戸の埋土である。第11層は、基盤層である。



1. 黒褐色（7.5YR3/2）粘質シルト
2. 褐灰色（7.5YR5/1）粘質シルト
3. 褐灰色（7.5YR5/1）粘質シルト
　黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト混じる
4. 褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルト
5. 黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト
　褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルトが偽礫で混じる
6. 黄橙色（7.5YR7/8）粘質シルト
　褐灰色（10YR5/1）粗砂混じり砂質シルトが互層となる
7. 灰色（N5/0）粘土
8. 灰黄褐色（10YR5/2）砂質シルト
9. 黒褐色（10YR3/1）粘質シルト
10. 黒色（10YR2/1）粗～細砂混じり砂質シルト
11. 浅黄色（2.5Y7/3）小礫～粗砂混じり砂質シルト

第３図　確認・本調査箇所北壁断面

遺構

第１面

第９層上面を第１面として調査を行った。第１面では土坑１を検出した。検出面は第９層上面であるが断面観察から、第８層に属するものであることを確認した。埋土からは、図下していないが近世の陶磁器が出土した。

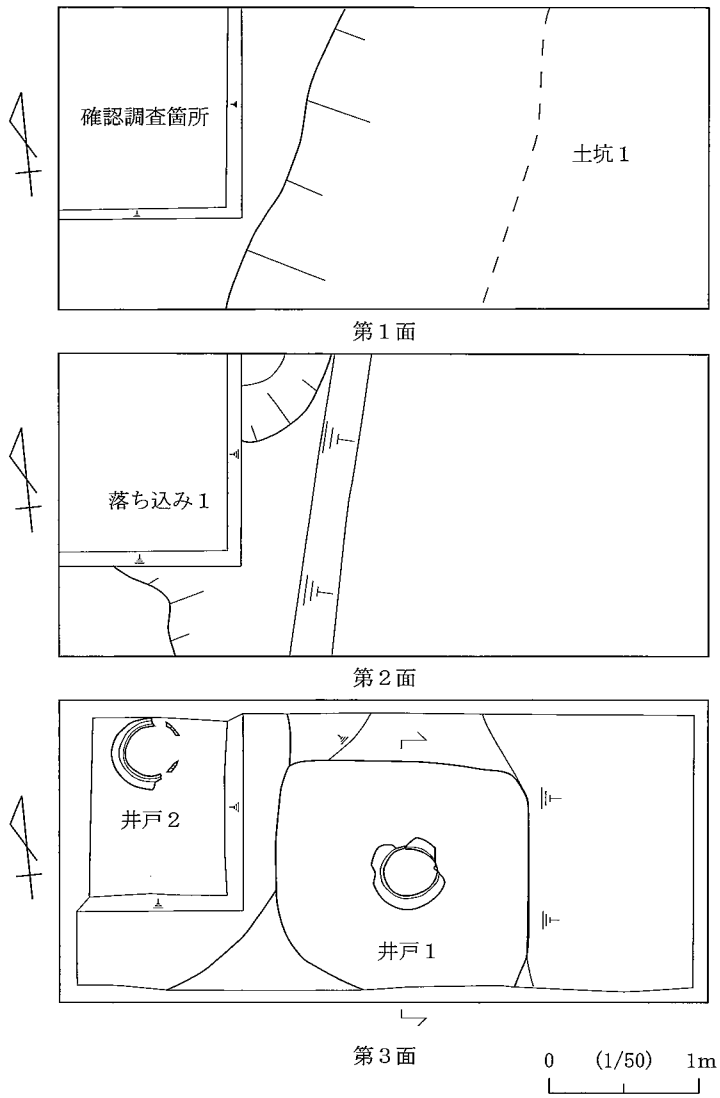
第２面

第10層上面を第２面として調査を行った。この面では落ち込み１を検出した。落ち込み１は、下層にある井戸１の窪みであったと考えられる。落ち込みの埋土は、第９層と同じである。落ち込み１からは、土師器皿（第６図18・19）・須恵器捏鉢(20)・瓦質土器羽釜(21)が出土した。

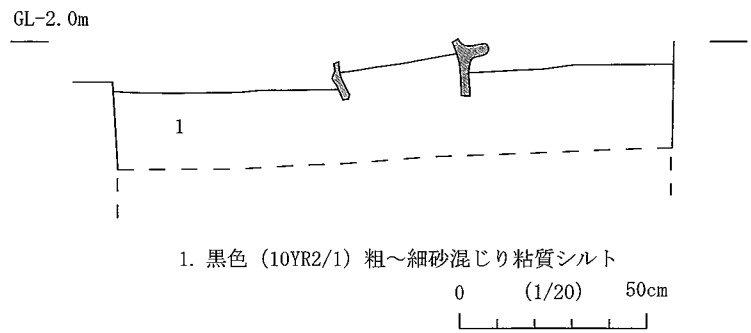
第３面

第11層上面を第３面として調査を行った。井戸１と井戸２を検出した。井戸は、調査面積が狭くいずれの層からの切り込みであるのか判断できなかった。井戸には切り合い関係が認められ、井戸１が新しい。第２面で井戸１と関連する落ち込み１を検出しており、これとも矛盾しない。

井戸１・２ともに羽釜を井戸枠としている。井戸はかなり深くなることが予想されたため、上部１段目までの掘削とした。



第４図　調査区平面

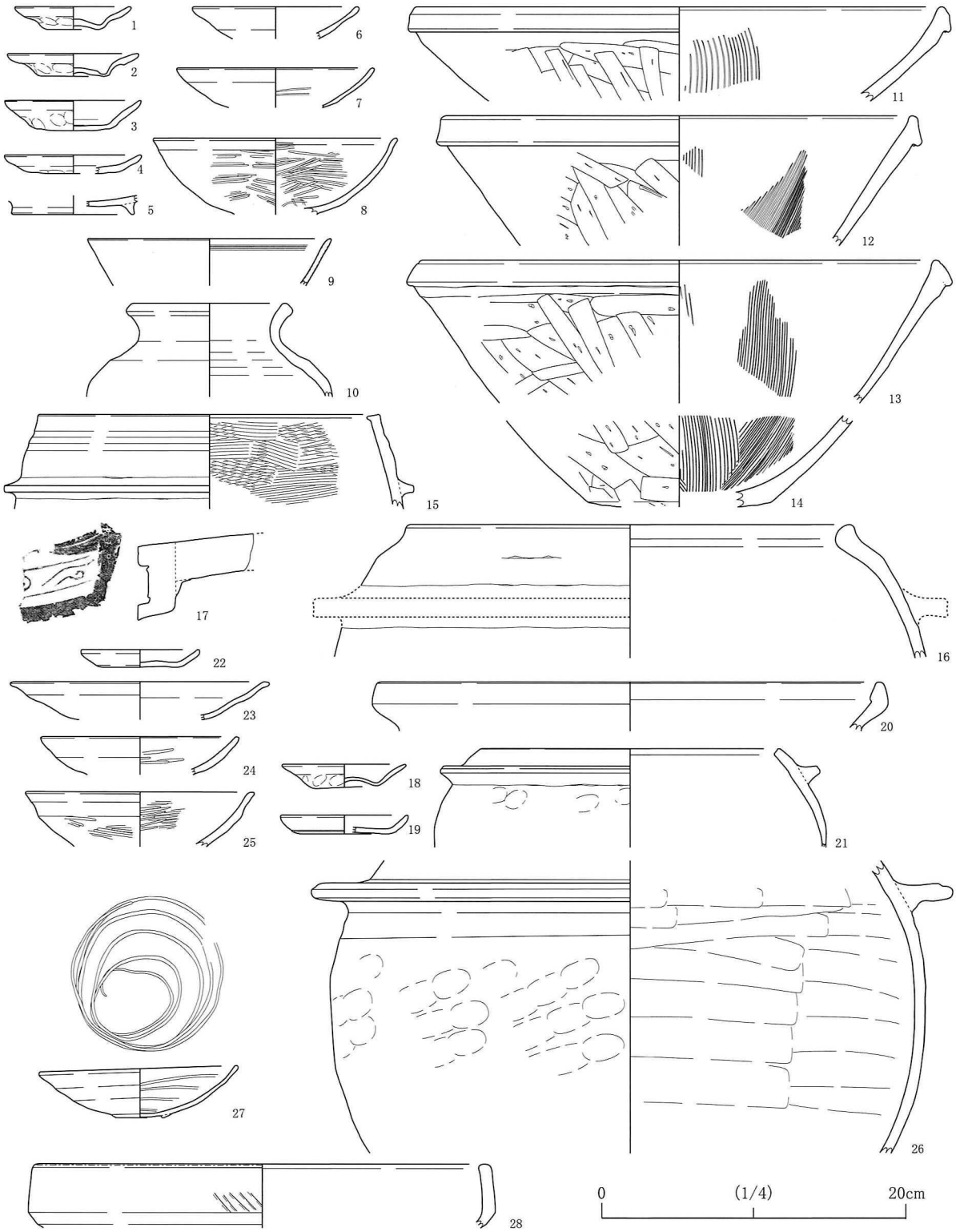


第５図　井戸１断面

４）出土遺物

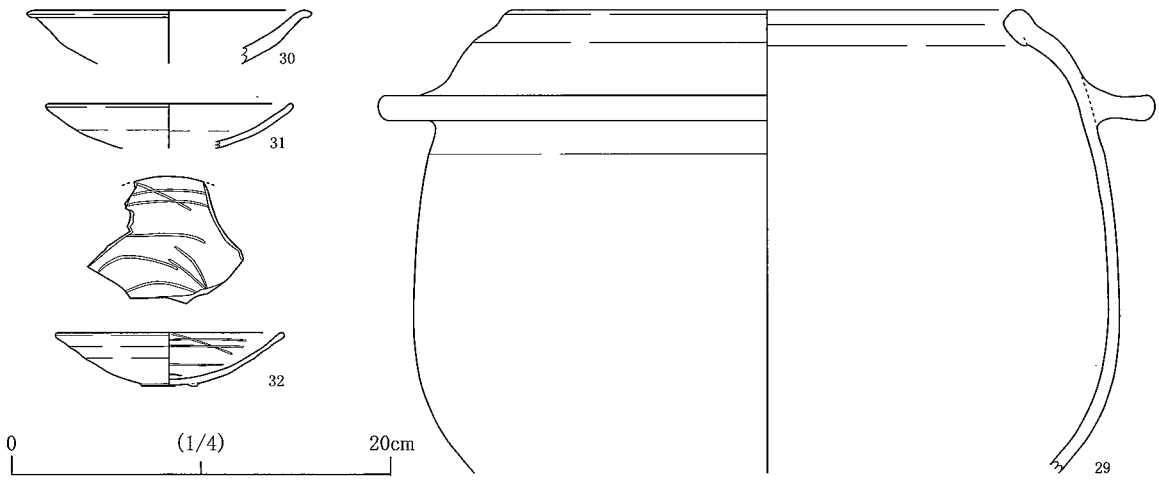
第９層

１～４は土師器皿である。１・２はいわゆる「へそ皿」である。14～15世紀。３・４は15世紀代であろう。５は黒色土器椀である。底部と高台が残る。内面にススを吸着させている。10世紀代。６～８は瓦器椀である。６・７は14世紀。８は内外面ともに密にヘラミガキが残る。12世紀後半。



第６図　薬師寺跡第１次調査出土遺物

９は中国製青磁碗である。内面に２本の圏線がめぐる。10 は瓦質土器壺である。11 ～ 14 は瓦質土器擂鉢である。外面はケズリ調整を行い、内面は密に擂目を施す。いずれも 15 世紀であろう。15・16 は羽釜である。15 は瓦質土器で、内面にハケメを施す。15 世紀。16 は土師質土器である。鍔部を欠損している。13 世紀後半。17 は軒平瓦である。唐草文。15 世紀。



第７図　薬師寺跡第１次調査出土遺物実測図

落ち込み

18・19 は土師器皿である。18 はいわゆる「へそ皿」である。14 ～ 15 世紀であろう。20 は東播系須恵器の捏鉢である。21 は瓦質土器の羽釜である。内湾する口縁部を持ち端部に面を持つ。外面にはユビオサエが残る。13 世紀代。

第 10 層

22 は土師器皿である。14 ～ 15 世紀であろう。23 は土師器椀である。体部は直線的に外方へと伸び口縁部を緩やかに外反させる。13 世紀。24 は瓦器椀、25 は瓦器皿である。24 は内外面ともにミガキが残る。12 世紀後半。25 は内面にわずかにミガキが残る。13 世紀。

井戸１

26 は土師質土器羽釜である。井戸１の井戸枠として使用されていた。体部下半を打ち欠き井戸枠としている。内外面にユビオサエが残る。13 世紀代であろう。井戸枠の外側から 27・28 が出土した。27 は瓦器椀で、見込みにヘラミガキによる圏線が数周めぐる。13 世紀後半。28 は焙烙である。外面にススが付着する。

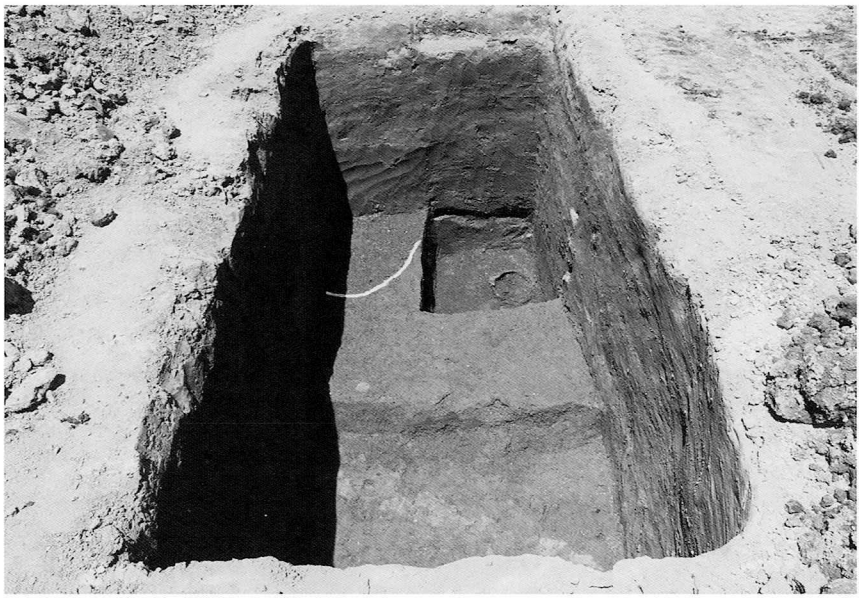
井戸２

29 は土師質土器羽釜である。井戸２の井戸枠として使用されていた。体部下半を打ち欠き井戸枠としている。13 世紀代であろう。30・31 は土師器椀である。いずれも直線的に伸びる体部を持つ。30 は口縁部を外反させ、31 は内湾気味に丸くおさめる。いずれも 13 世紀代であろう。32 は瓦器椀で、見込みにヘラミガキによる圏線が数周めぐる。高台は粘土紐を貼り付けたのみで形骸化している。13 世紀後半。

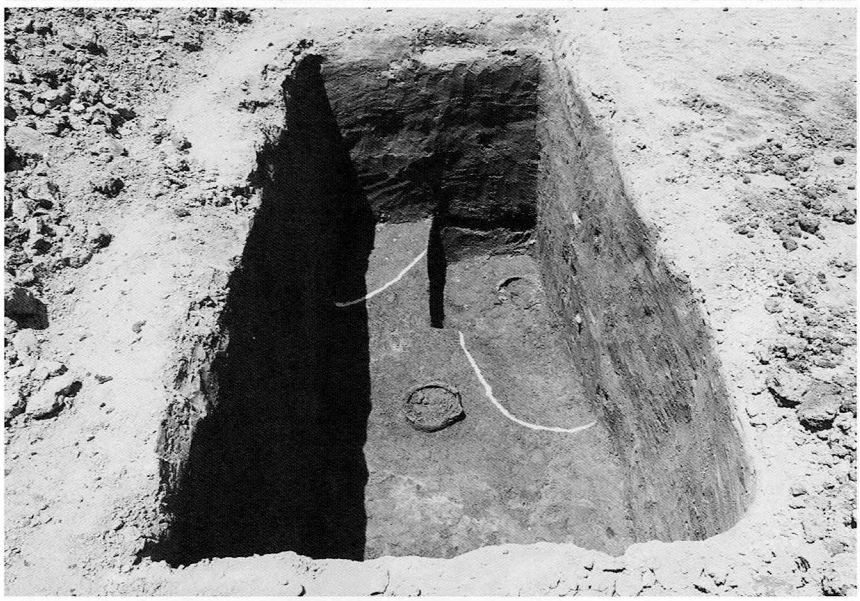
５）まとめ

昭和 56 年に周知の埋蔵文化財包蔵地となってから初めての本調査となった。井戸１・２は 13 世紀後半である。調査区は、東半が近世の土坑によって中世の遺構が掘削されており、建物跡などは検出できなかったが、はじめて生活痕跡を認めたことは大きな成果といえる。今後は、当該調査地点を中心にさらなる調査によって、薬師寺跡の解明に努めたい。

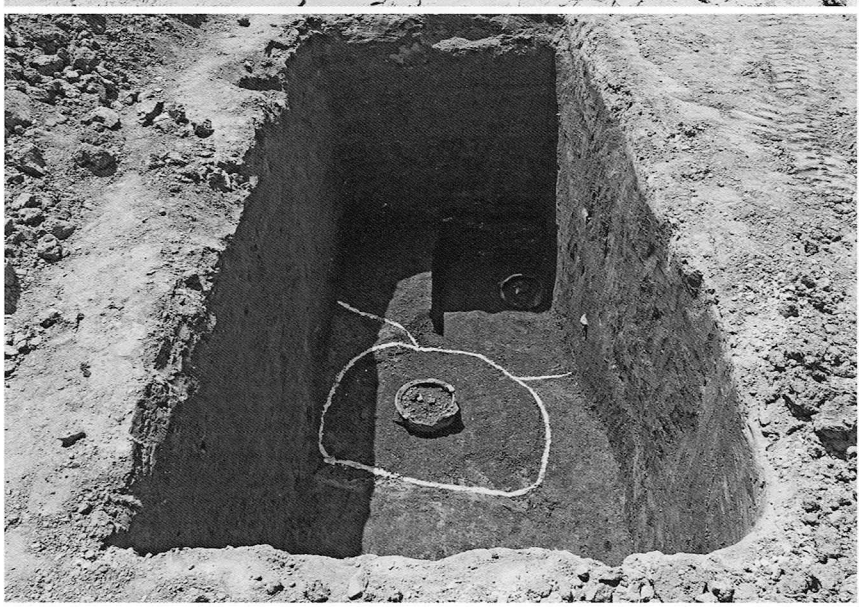
図版1　薬師寺跡第1次発掘調査　遺構



1．本調査箇所
第2面検出状況
（東より）



2．本調査箇所
第2面完掘状況
（東より）

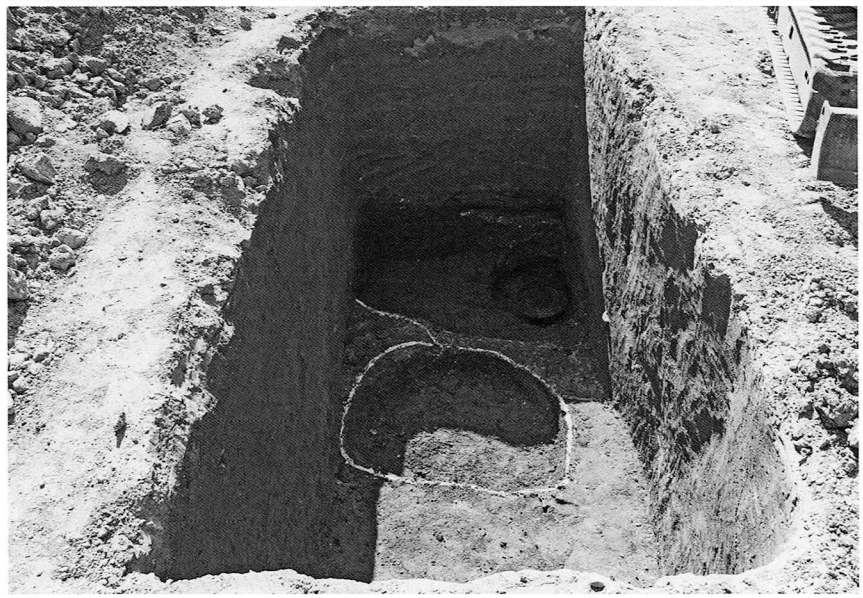


3．本調査箇所
第3面検出状況
（東より）

図版2　薬師寺跡第1次発掘調査　遺構

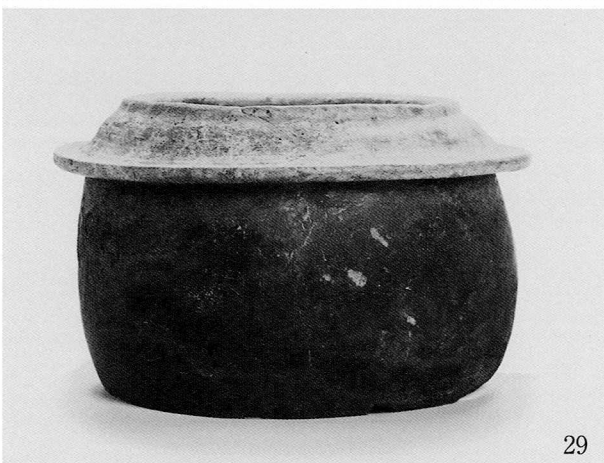
1．本調査箇所
井戸1
（西より）

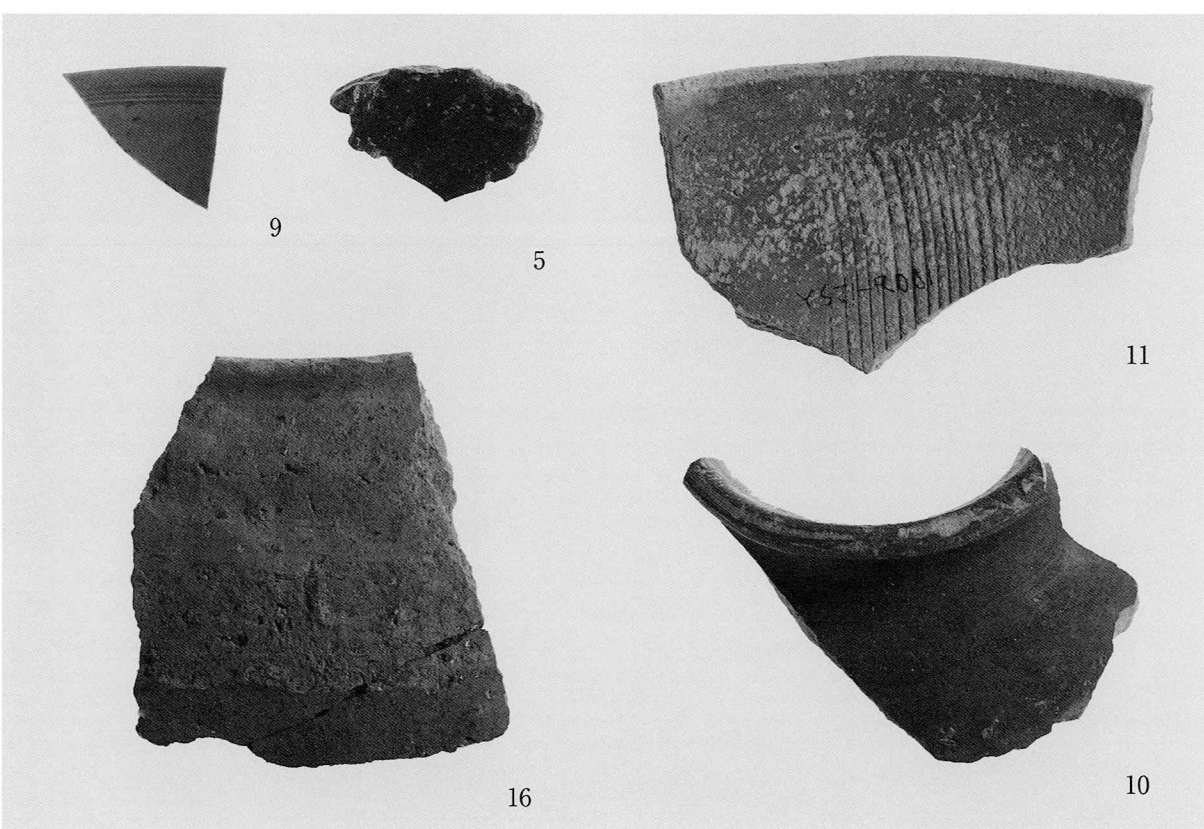
2．本調査箇所
井戸2
（南東より）



3．本調査箇所
第3面完掘状況
（東より）

図版3　薬師寺跡第1次発掘調査　遺物





1．第9・10層出土　青磁、黒色土器、土師質土器、瓦質土器

第９章　馬場川遺跡第21・22次発掘調査

馬場川遺跡第 21 次

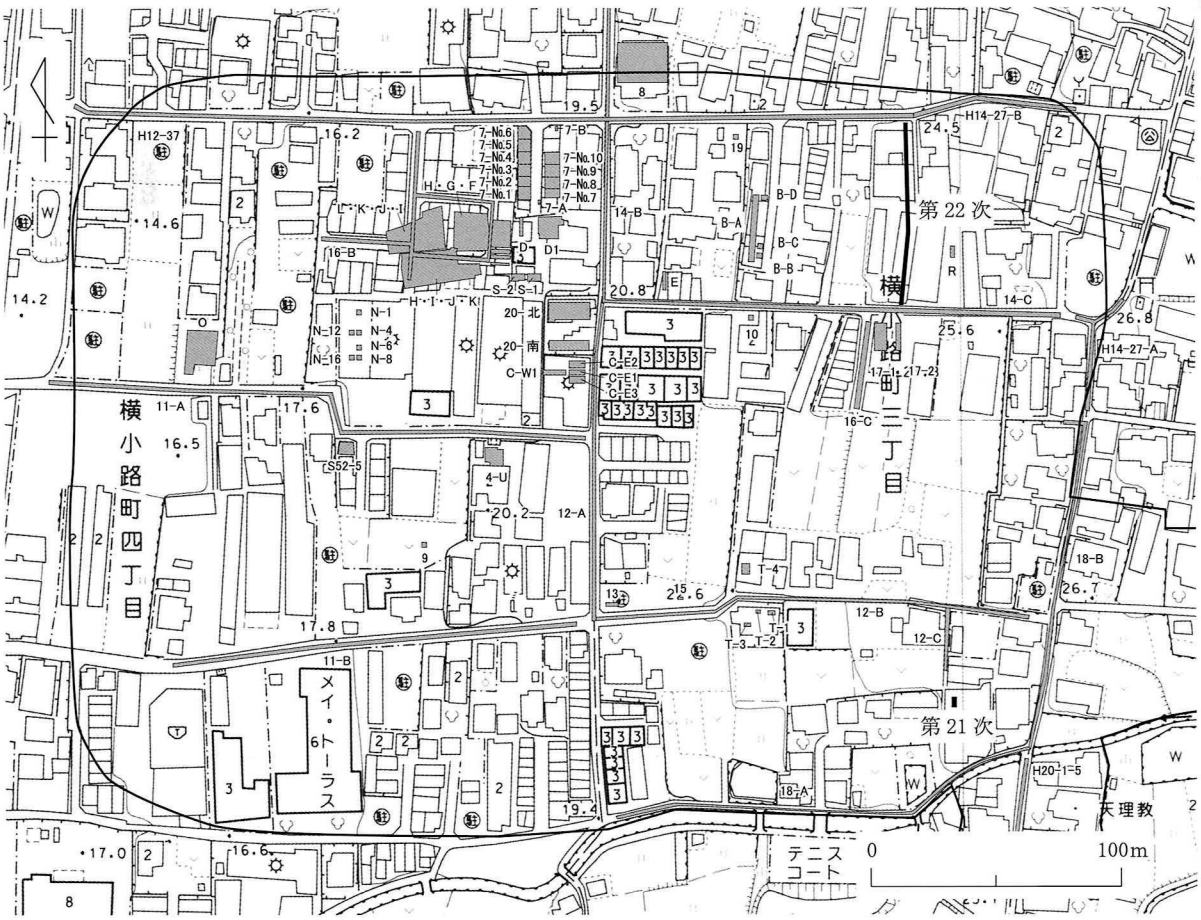
１）はじめに

馬場川遺跡は、横小路町三丁目から四丁目に所在する縄文時代中期から江戸時代にわたる複合遺跡である。本遺跡は、昭和 44（1969）年工場建設に伴い多量の縄文土器が出土したことから、その存在が明らかとなり、それ以降これまでに 20 次におよぶ発掘調査が行われてきた。

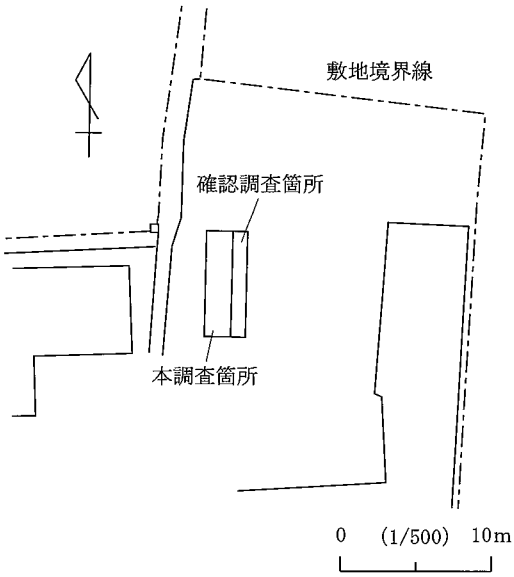
特に、縄文時代晩期前葉から中葉にかけての集落跡が良好な状態で遺存しており、多数の土偶・土製品が出土する遺跡として知られている。

２）調査の経過

平成 25 年 8 月、東大阪市横小路町三丁目 1173 番、1174 番の各一部において、個人住宅建設に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該建物の基礎工事は、表層改良工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 25 年 9 月 6 日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、調査トレンチ GL-0.8m から -1.1mの間で須恵器、土師器、縄文土器が出土し、ピットを検出した。この結果に基づき協議代理者との取り扱いについて協議を行い、平成 25 年 9 月 9 日からトレンチを設定して調査を行った。調査面積は合計で 18.2㎡である（第２図）。



第１図　調査位置図



第２図　調査トレンチ位置図

３）調査の概要

層序（第３図）

盛土。

第１層　にぶい黄褐色（10YR5/3）小礫～細砂混じり砂質シルト。

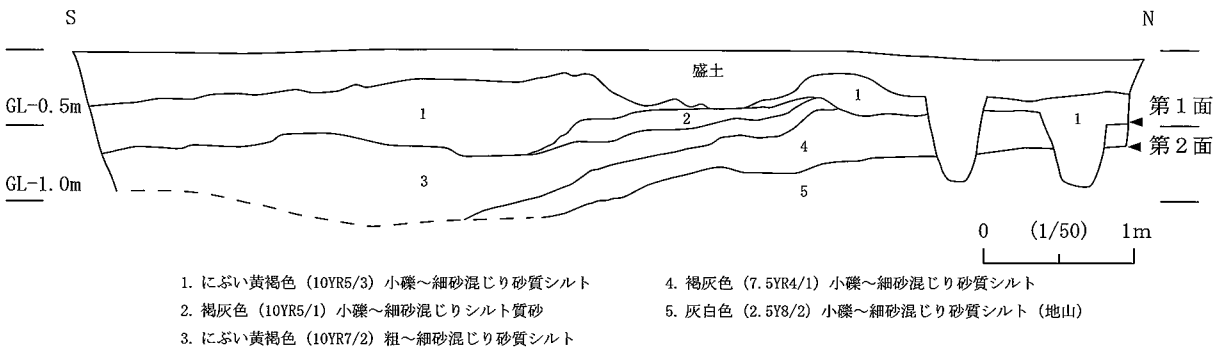
第２層　褐灰色(10YR5/1)小礫～細砂混じりシルト質砂。

第３層　にぶい黄褐色（10YR7/2）粗～細砂混じり砂質シルト。

第４層　褐灰色（7.5YR4/1）小礫～細砂混じり砂質シルト。

第５層　灰白色(2.5Y8/2)小礫～細砂混じり砂質シルト。

第１層は、中～近世の耕作土と考えられる。第２・３層は、河川１の埋土である。第４層は、扇状地堆積層である。第４層からはその他に奈良時代から平安時代と考えられる土師器の体部片、古墳時代前期の甕の体部片、弥生時代後期の甕の体部片が出土している。第５層は、扇状地堆積層でいわゆる地山である。



第３図　調査箇所西壁断面

遺構（第４図）

第１面

第１層を掘削した面を第１面として調査を行った。第１面では、河川１を検出した。

河川１

南に行くにしたがい深くなるが、調査対象となった深度内で底を検出することはできなかった。埋土内からは、須恵器（第５図２）が出土した。

第２面

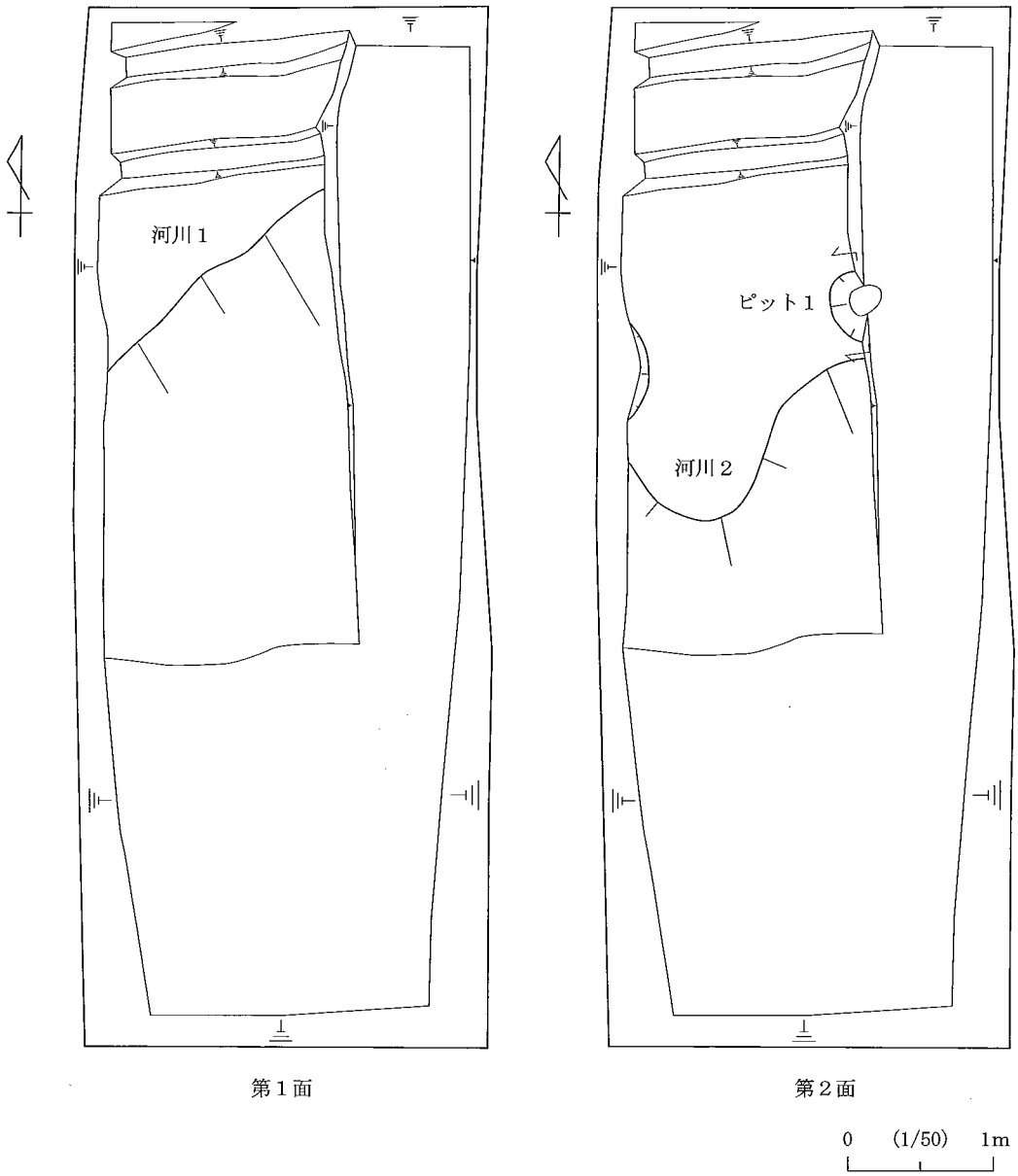
第５層上面を第２面として調査を行った。第２面では、河川２、ピット１を検出した。

河川２

河川１の前進となる河川である。第４層に古墳時代後期の遺物を含むことから、古墳時代後期には河川として機能していたと考えられる。河川１との関係から奈良時代または平安時代には埋没したと考えられる。

ピット１

埋土からは土師器の極小破片が出土したが、時期を特定できる遺物ではない。形状や深さから柱穴

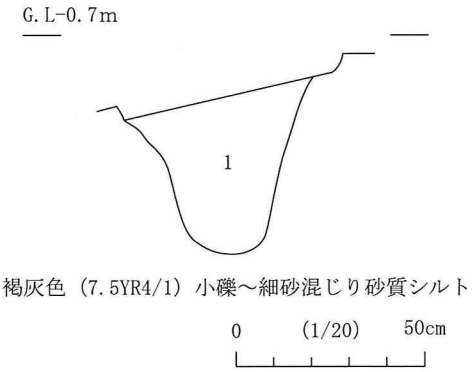


第４図　調査区平面

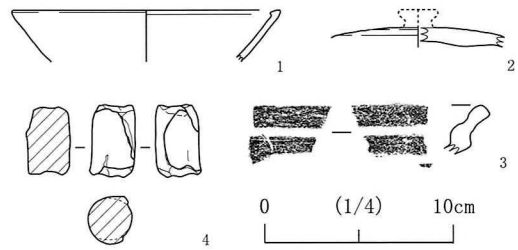
と考えられる。対となる柱穴は不明である。古墳時代としておきたい。

４）出土遺物（第５図）

第２・３層からは、古式土師器の甕（１）の他に、小破片で実測していないが、奈良時代または平安時代と考えられる土師器の皿が出土している。第３層からは、須恵器の杯蓋（２）が出土した。天井部に剥落痕があり宝珠つまみが付いていたものである。TK217 型式であろう。第４層からは、縄文時代晩期中葉の浅鉢（３）と土偶（４）を実測した。３は、口縁部に屈曲を持つ器形で黒色磨研系の浅鉢である。篠原式。４は、土偶の胴部である。２本の棒状粘土を合わせた土偶で、底部に脚を付けるためのソケット状の凹みが認められる。浅鉢に伴う時期で晩期中葉と考えたい。



第５図　ピット１断面



第６図　馬場川遺跡第 21 次調査遺物実測図

本調査箇所　ピット１（東より）

本調査箇所　第２面（南より）

５）まとめ

今回の調査では、奈良時代から平安時代の河川を検出した。すぐ南に位置する箕後川の古流路と考えられる。

当該調査区は、馬場川遺跡でも最も南に位置する地点である。これまで下水道敷設に伴う調査が行われていただけで、様相は不明な点が多かった。今回、調査範囲は狭いが古墳時代の遺構を検出できたのは大きな成果である。また、縄文時代晩期中葉の土器と土偶は、縄文時代の集落の範囲や生活域を考えるのに重要な成果となった。

馬場川遺跡第 22 次

６）調査の経過

平成 25 年６月、東大阪市横小路町三丁目 459 番１において、宅地造成に伴う「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された（第１図）。当該工事は、下水道敷設工事を含むもので、埋蔵文化財への影響が懸念されたため、事前の確認調査が必要な旨を届出者に通知した。その後、平成 25 年８月 14 日に埋蔵文化財の確認調査を実施した。調査の結果、調査トレンチ GL-0.9mから -1.4mの間で縄文土器が多量に出土した。この結果に基づき協議代理者との取り扱いについて協議を行い、下水道敷設に伴う立会調査を平成 25 年９月 11 日から９月 12 日まで行った。

7）調査の概要（第７図）

層序

盛土。

第１層　黄灰色（2.5Y5/1）細砂混じりシルト質砂。

第２層　橙色（7.5YR6/6）シルト質砂。

第３層　灰黄褐色（10YR5/2）　大礫～粗砂混じりシルト質砂。

第４層　褐灰色（10YR4/1）　粗砂混じりシルト質砂。

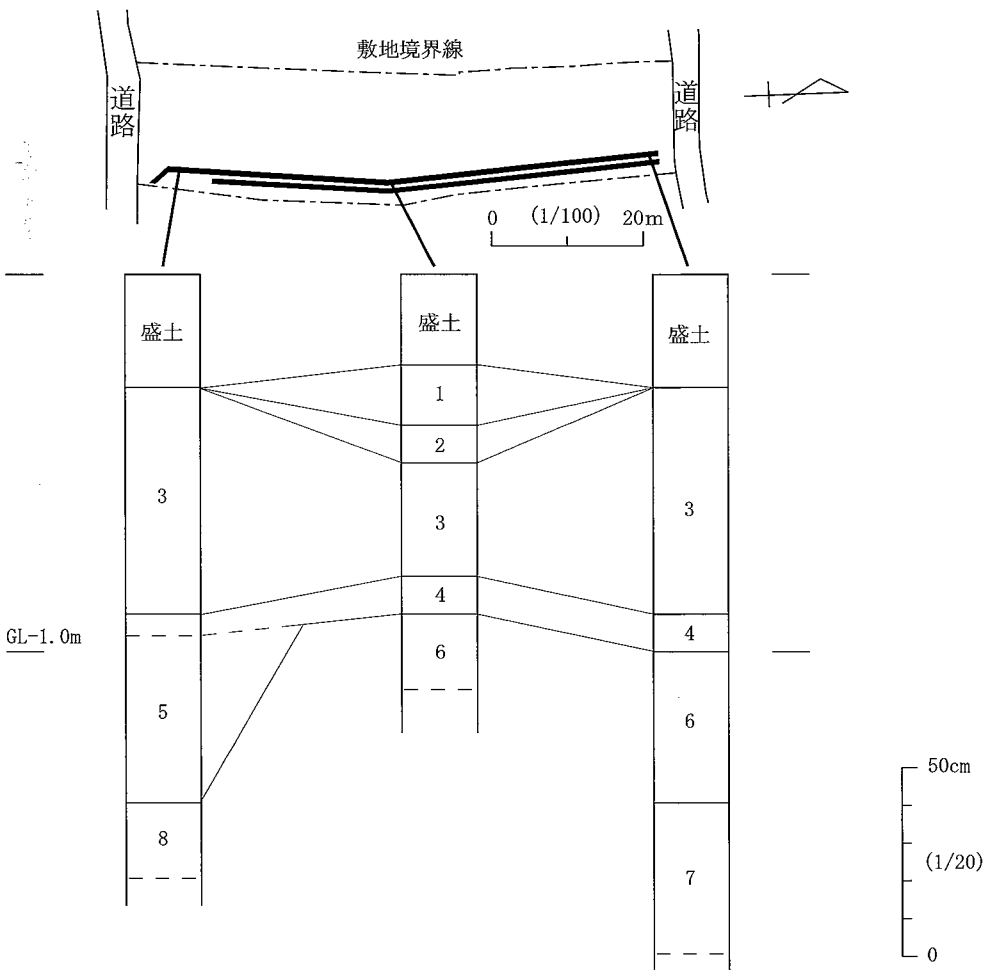
第５層　暗灰色（N3/0）　粗～細砂混じり粘土。

第６層　にぶい黄橙色（10YR7/2）　粗～細砂混じりシルト質砂。

第７層　灰白色（2.5Y8/1）粗砂混じりシルト質砂。

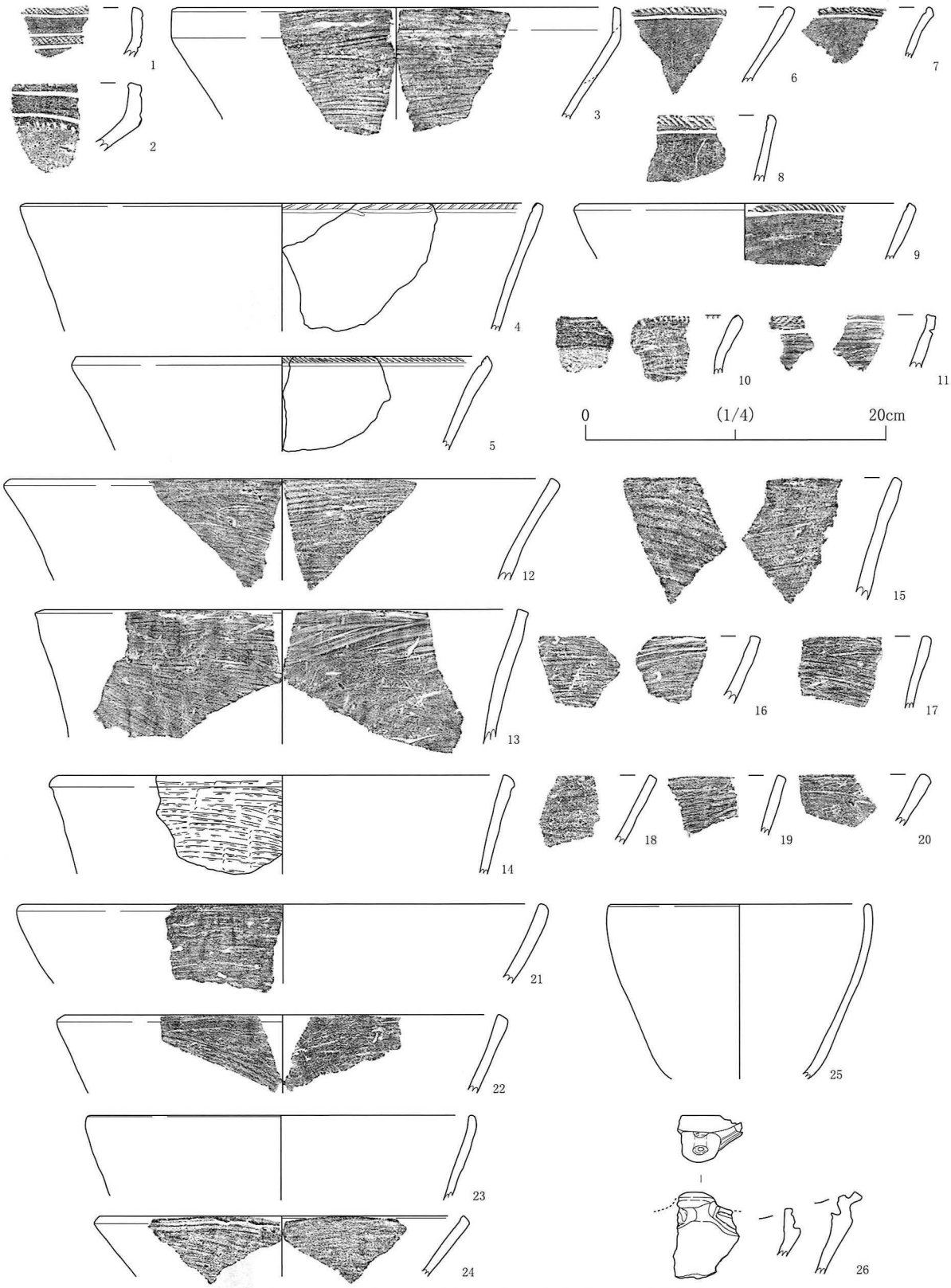
第８層　青灰色（5B5/1）　粗砂混じり粘土。

第１・２層は、耕作土である。第３・４・５層は、いずれも河川堆積層である。第４層は南に行くにしたがい層厚が薄くなり、第５層とすりついている。遺物は、第５層と認識した層位からの出土である。同一の層から縄文土器と古墳時代前期の土器が出土している。



1．黄灰色（2.5Y5/1）細砂混じりシルト質砂
2．橙色（7.5YR6/6）シルト質砂
3．灰黄褐色（10YR5/2）　大礫～粗砂混じりシルト質砂
4．褐灰色（10YR4/1）　粗砂混じりシルト質砂
5．暗灰色（N3/0）　粗～細砂混じり粘土
6．にぶい黄橙色（10YR7/2）　粗～細砂混じりシルト質砂
7．灰白色（2.5Y8/1）粗砂混じりシルト質砂
8．青灰色（5B5/1）　粗砂混じり粘土

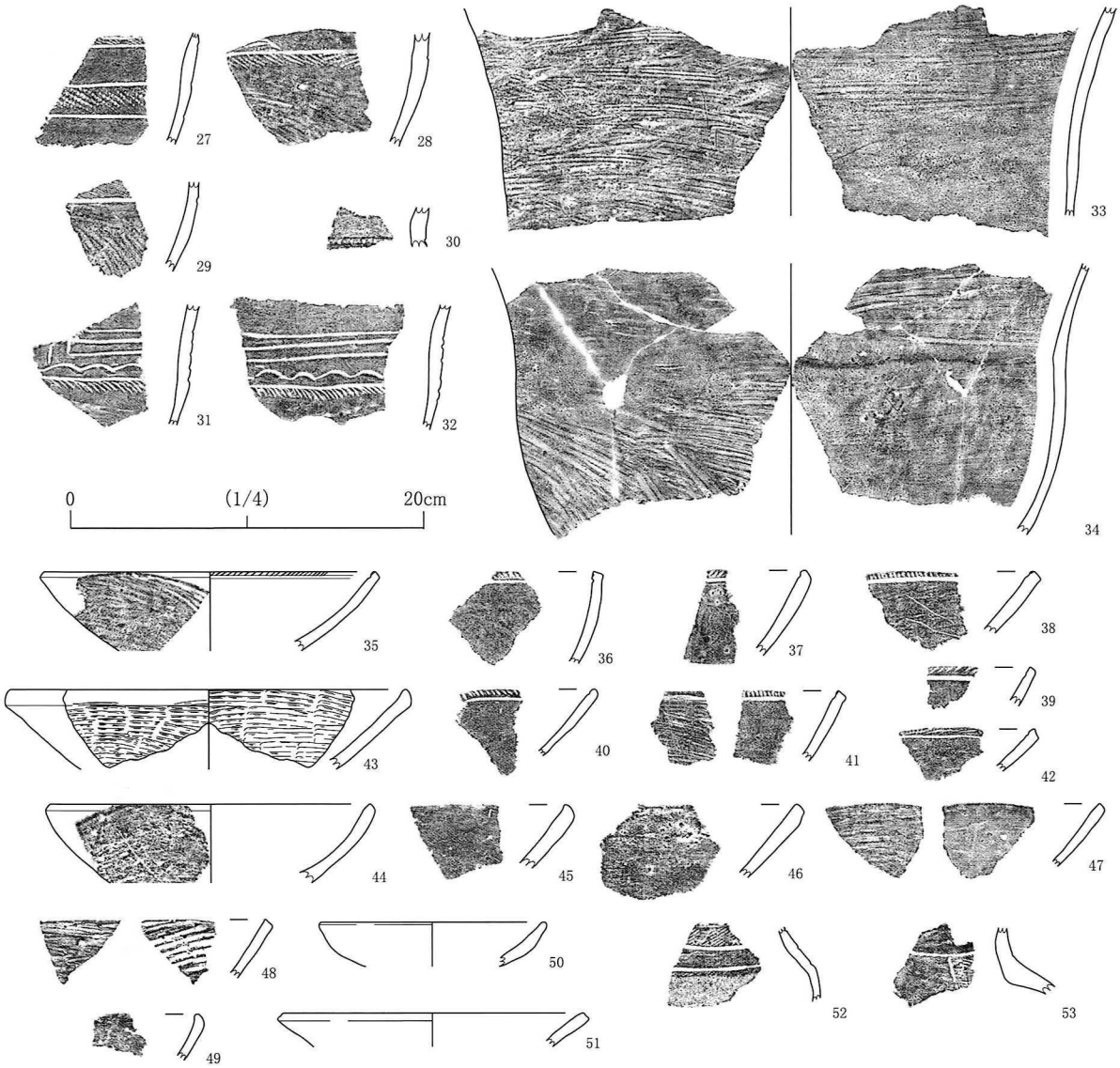
第７図　立会調査位置図・断面模式図



第８図　馬場川遺跡第22次調査出土遺物実測図

８）出土遺物

遺物は第３～５層から出土した。最も多く出土したのは第５層である。今回は縄文土器・石製品を報告する。



第９図　馬場川遺跡第22次調査出土遺物実測図

縄文土器は縄文時代後期中葉と晩期前葉に大きく分かれる。そのため、時期がわかる口縁部と体部片を形態ごとに報告し、時期があまり明瞭ではない底部と分けて報告する。

第５層（第８・９図）

縄文時代後期中葉

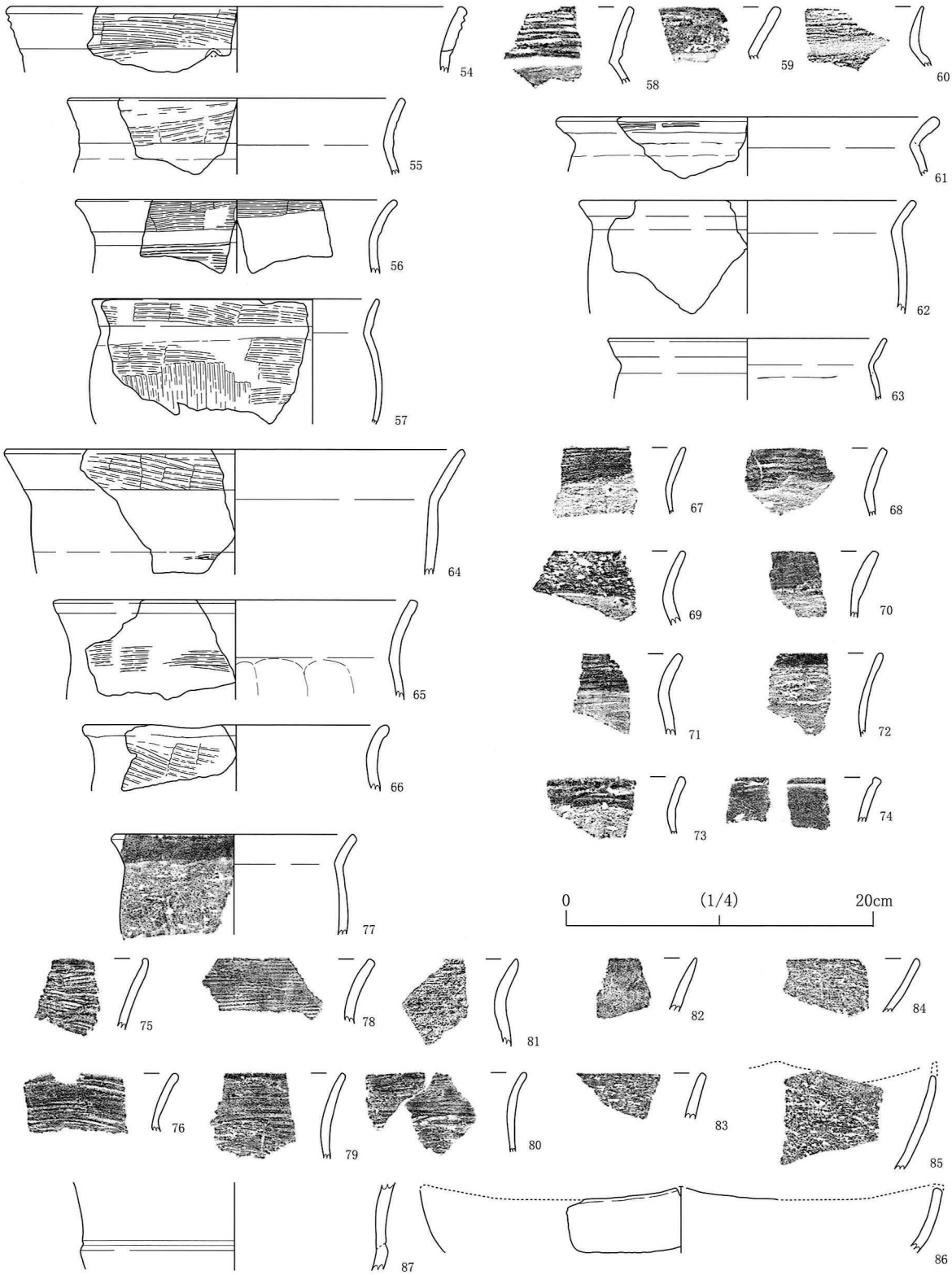
１～３は、ハの字に広がる口縁部に端部を屈曲させ平坦面を形成する深鉢である。１は沈線と擬縄文を施し、２は平坦面との境に刻みと沈線を施す。

４～20は、ハの字に広がる口縁部を持ち、端部外面に面取りを施す深鉢または鉢である。口縁部の断面形態は矩形を呈し、外面端部に面取りを行う。４～９は内面に沈線と刻目、 10は刻目のみが施される。11は外面に沈線と擬縄文を施す。

21～25は緩やかに内湾する口縁部を持ち、砲弾形となる深鉢である。端部は丸くおさめる。

26は波状の口縁部に端部を屈曲させ平坦面を持つ深鉢である。匙状突起を持つ。

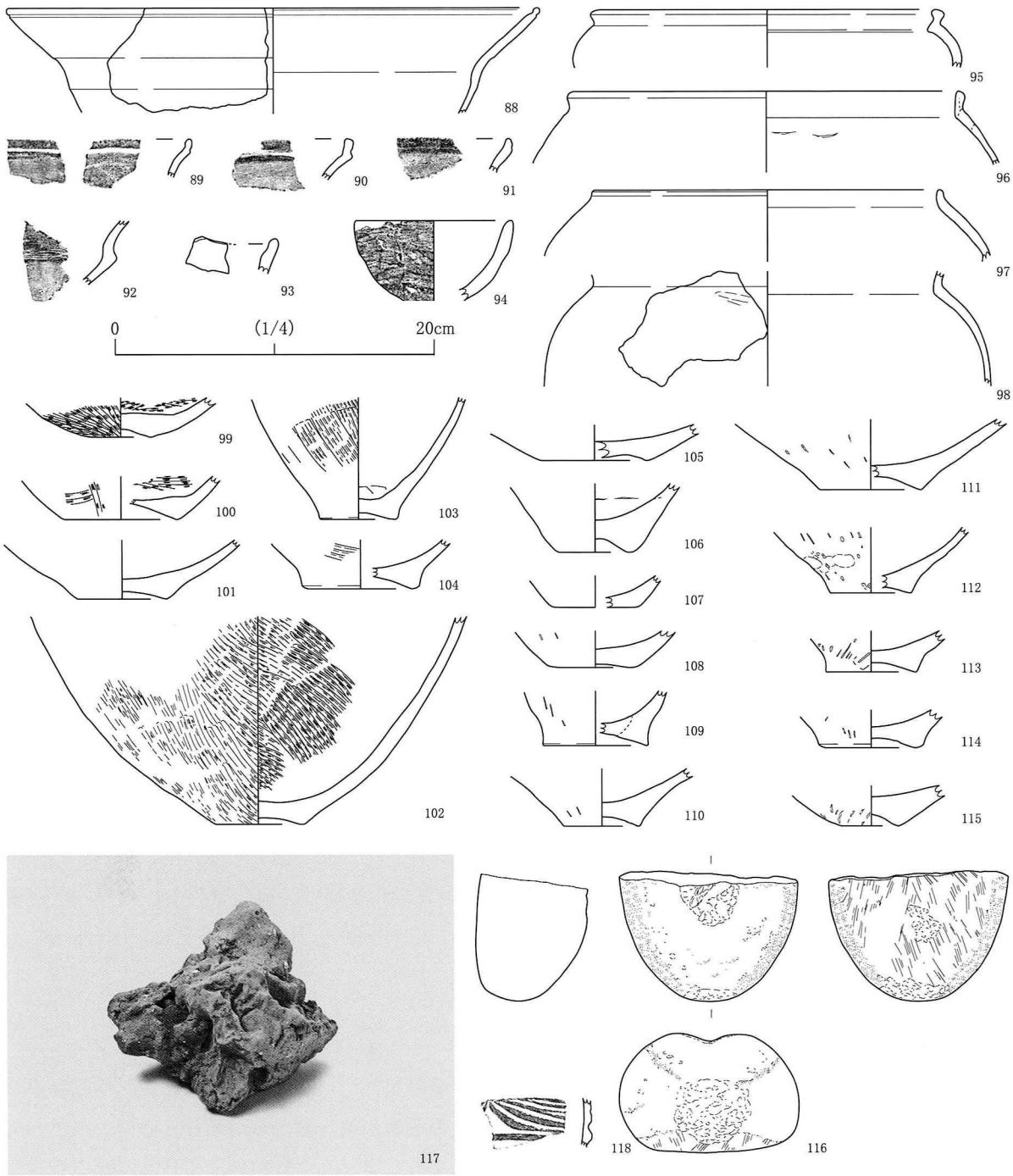
27～34は深鉢の体部である。27～29は沈線による区画に擬縄文を施す。30は沈線の中に刺突文が施される。31・32は沈線と連弧文を施し、体部と底部の境に刻目帯を配する。33・34は内外面と



第10図　馬場川遺跡第22次調査出土遺物実測図

も明瞭に巻貝条痕が残る。

35 ～ 50 は椀形の浅鉢である。35 ～ 42 は内面に沈線と刻目が配される。43 ～ 50 は無文である。51 は浅鉢と考えられるが、判然としない。



第11図　馬場川遺跡第22次調査出土遺物実測図

52・53は注口土器である。52は肩部、53は頸部に相当する。いずれも沈線による区画が施され内部に擬縄文が充填される。

晩期前葉～中葉（第10・11図）

54～63は、口縁部と体部の境にナデが一条めぐる深鉢である。54～61はいずれも外面に二枚貝条痕が残る。

64～73は口縁部下半から体部にかけてナデを施す深鉢である。二枚貝条痕を施したのちナデを行う。

74は、外面に二枚貝条痕を施したのち、ナデを行う。口縁端部を内側へと肥厚させ、段差を設ける。

いわゆる岩田系か。

75 ～ 83 は外反する口縁部を持つ深鉢である。75 は巻貝条痕、76 ～ 80 は、外面調整が二枚貝条痕を施したのち、口縁端部をヨコナデする。81 ～ 83 はケズリを施したのち、口縁端部をヨコナデする。

84 ～ 86 は砲弾型の深鉢である。84・85 は外面にケズリ調整を施す。85・86 は波状の口縁である。

87 は、体部と底部の境に沈線を持つ破片である。外面は二枚貝条痕を施したのち、ナデ調整を行う。

88 ～ 92 は、体部と口縁部の境を屈曲させ、「ハ」の字に広がる口縁部を持つ浅鉢である。

88 は口縁端部の内外面に一条の沈線がめぐり、89 ～ 91 は端部を屈曲させ平坦面を作り出す口縁部を持つ。89・90 は外面に一条の沈線がめぐる。

93 は、突起を持つ浅鉢である。94 は小型の浅鉢である。外面は二枚貝条痕を施したのちナデ調整を行う。

95 ～ 98 は内湾する体部に短い口縁部を持つ浅鉢である。96 はさらに内側へと肥厚させる。

底部

99 ～ 102 は外面に巻貝条痕、103・104 は二枚貝条痕、105 ～ 107 はナデ調整、108 ～ 115 はケズリ調整を施す。

石製品

116 は台石である。おおよそ半分が欠損する。敲打痕が中央部分に集中し、窪みとなっている。裏面は非常に平滑で磨石としても使用していたと考えられる。砂岩。

土製品

117 はいわゆる焼成粘土塊である。無数のユビ圧痕が認められる。重さは、935.3g で胎土には長石・石英・角閃石が含まれる。晩期前葉～中葉の深鉢の鉱物構成や粘土の焼成が似ている。

第３層

118 は体部に橿原式文様を持つ浅鉢である。117 は北側の第３層から出土しており、他の遺物とは出土地点、層位が異なる。

後期中葉はそのほとんどが元住吉山Ⅰ式２期に比定できる。晩期は、54 ～ 74・84・88 ～ 92 が滋賀里Ⅲａ式、75 ～ 86・93 ～ 98 が篠原式と考えられる。底部は 99 ～ 102 は後期中葉、103 ～ 115 は晩期前葉～中葉と考えられる。

９）まとめ

今回の調査は、工事中の立会調査のため、遺物採取を最優先とした。南側では第４層と第５層が判然としない部分もあったが、古墳時代の土器と縄文時代の遺物が第５層から出土している。出土した縄文土器は、元住吉山Ⅰ式２期と滋賀里Ⅲａ式が中心となる。これまで行われた調査では認められなかった特徴である。後期中葉の土器は、これまで第 20 次調査の際に出土しており、当該時期にも当遺跡に人々が生活していたことを推測したが、一定の量の出土により確定的なものとなった。出土地点と時期的な傾向がどのように関連するのか、さらなる調査の進展を待って検討していきたい。

【参考文献】

奈良県立橿原考古学研究所 2011『重要文化財橿原遺跡出土品の研究』橿原考古学研究所研究成果第 11 冊

兵庫県教育委員会 1998『佃遺跡　本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財調査報告Ⅲ』兵庫県文化財調査報告第 176 冊

報告書抄録（その１）

ふりがな	ひがしおおさかしまいぞうぶんかざいはっくつちょうさがいほう －へいせい25ねんど－
書名	東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報　－平成25年度－
副書名	
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編集者名	仲林篤史・奈良拓弥
所在地	〒577-8521　東大阪市荒本北一丁目１番１号
発行年月日	2014年３月31日

ふりがな 所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
皿池遺跡（さらいけいせき）	(10次) 東大阪市河内町 458番９ (11次) 東大阪市河内町 409番１、410番３～６、９	27227	62	(10次) 平成24年11月２日 ～11月６日 (11次) 平成25年２月８日、 ３月29日～３月30日	(10次) 6.7㎡ (11次) 21.6㎡	(21次) 個人住宅建設 (22次) 老人保健施設建設
横沼遺跡（よこぬまいせき）	東大阪市横沼町 三丁目２番１	27227	150	平成25年11月21日 ～11月26日	32.5㎡	個人住宅建設
若江遺跡（わかえいせき）	(87次) 東大阪市 若江南町二丁目 43番２、44番１の一部 (88次) 若江南町二丁目 64番１	27227	98	(87次) 平成24年12月21日 ～ 平成25年１月26日 (88次) 平成25年２月15日	(87次) 90㎡ (11次) ６㎡	個人住宅建設
岩田遺跡（いわたいせき）	東大阪市 西岩田一丁目 574番６、569番９	27227	115	平成25年２月７日	５㎡	個人住宅建設
山畑古墳群（やまはたこふんぐん）	東大阪市瓢箪山町 30番10	27227	66	平成25年２月25日 ～２月26日	10㎡	個人住宅建設
岩滝山遺跡（いわたきやまいせき） 高塚古墳（たかつかこふん）	東大阪市上六万寺町 1565番１、1599番１、 1590番３、1590番11	27227	80	平成25年３月４日 ～３月13日	56.25㎡	保存目的
薬師寺跡（やくしじあと）	東大阪市御厨 一丁目1132番１	27227	139	平成25年５月22日 ～５月23日	９㎡	個人住宅建設
馬場川遺跡（ばばがわいせき）	(21次) 東大阪市横小路町 三丁目1173番、1174番の各一部 (22次) 東大阪市横小路町 三丁目459番１	27227	89	(21次) 平成25年９月６日 ～９月10日 (22次) 平成25年８月14日 ～９月12日	(21次) 18.2㎡ (22次) 95㎡	(21次) 個人住宅建設 (22次) 宅地造成

報告書抄録（その２）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
皿池遺跡 (第10･11次調査)	集落跡・ 官衙跡	弥生時代 ～平安時代	ピット・溝	土師器 須恵器 瓦	
横沼遺跡 (第１次調査)	散布地	鎌倉時代 ～室町時代	河川・湿地	土師器 瓦器 須恵器	
若江遺跡 (第87･88次調査)	集落 官衙跡 城館跡 寺社跡	弥生時代 ～近世	堀・溝・井戸・ ピット･落ち込み･ 水田畦畔	土師器 瓦器 瓦 石製品 木製品	
岩田遺跡 (第３次調査)	古墳 集落跡	鎌倉時代 ～室町時代	(遺物包含層)	土師器 瓦器 瓦質土器 銭	
山畑古墳群 (第34次調査)	古墳	弥生時代 ～古墳時代	(遺物包含層)	土師器 須恵器 弥生土器	
岩滝山遺跡 (第11次調査) 高塚古墳	集落跡 古墳 城館跡	古墳時代 ～鎌倉時代	古墳・落ち込み	陶器 土師器 瓦器 須恵器	
薬師寺跡 (第１次調査)	寺社跡	鎌倉時代 ～室町時代	井戸・土坑	土師器 須恵器 瓦器	
馬場川遺跡 (第21･22次調査)	集落跡	縄文時代 ～古墳時代	ピット・河川	縄文土器 土偶	

東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報

ー平成25年度ー

発　行　日　　平成26年３月31日

編集・発行　　東大阪市教育委員会

〒577-8521

東大阪市荒本北一丁目１番１号

TEL. 06-4309-3283

印　刷　所　　株式会社ミラテック